

長野遺跡群

県町遺跡（2）

—後町小学校跡地活用整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2018年3月

長野市教育委員会

長野遺跡群

県町遺跡（2）

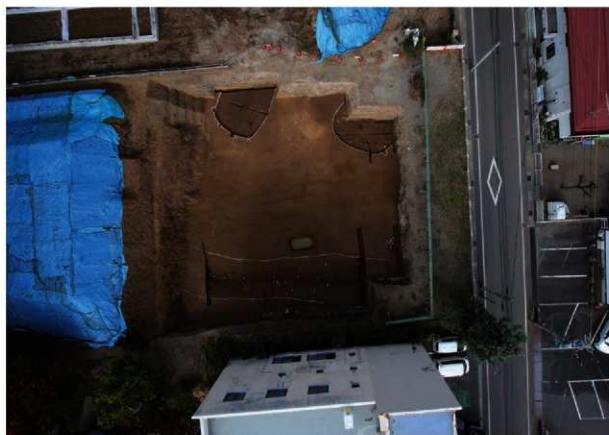
—後町小学校跡地活用整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2018年3月

長野市教育委員会



平成 27 年度調査区全景 (上が北)



平成 28 年度調査区東半 (上が北)



D区 21号住居跡出土遺物



A区 4号住居跡出土雑穀



小壺内面に残存する赤色顔料 (A区 3号住居跡)

序

埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」といわれ、遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、当時の人々の生活を今に伝え、郷土の成り立ちと文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産であります。

善光寺平に位置する長野市には数多くの遺跡が周知されていますが、この中で、開発事業により保存が困難であるものについては事前に発掘調査を行い、記録保存という形で後世に残していく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第151集として刊行いたします本書には、後町小学校跡地活用整備事業に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、長野遺跡群に属する「県町遺跡」として詳しくまとめられています。発掘調査では、弥生時代中期後半・後期、古墳時代後期、奈良時代末～平安時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを検出し、また、弥生時代中期後半の特異な大型瓢形壺、小壺、須恵器稜椀、墨書土器などが出土しています。この成果が地域の歴史解明、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘作業に際して多大なご尽力を賜りました関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守





例 言

- 1 本書は、後町小学校跡地活用整備事業に伴い、記録保存を目的として平成27年9月11日～平成28年1月20日、平成28年9月5日～11月17日に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、後町小学校跡地活用整備事業を行う長野市長の依頼により、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが発掘調査に関する直接の業務を担当した。
- 3 発掘調査の所在地は、長野市大字南長野603番地外（平成27年度）、長野市大字南長野614番地-1（平成28年度）で、長野道群県町道跡後町小学校地点と呼称する。保護対象面積は11,400㎡で、発掘調査面積は3,082㎡である。
- 4 調査の略記号は「NAG」と表記し、出土遺物及び調査に係る諸記録は長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）で保管している。
- 5 調査の成果の一部は現地説明会（平成27年12月5日実施）等で公開しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 6 現地における発掘調査は、飯島の指導の下田中が担当し、日下・鈴木・高津が補助した。整理調査は飯島が統括し、田中が担当して行った。作業分担は以下の通りである。

整理作業	土器・その他実測	田中、高津、鳥羽、武藤、向山、窪田
	石器実測	市川
	遺物トレース	田中、高津
	遺物撮影	高津、日下、田中、向山
	遺構トレース	田中、向山
- 7 本書の執筆は、第Ⅰ章第1節は飯島、Ⅵ章はバリノ・サーヴェイ株式会社、その他は田中が分担した。第Ⅱ章第5図は高津が作成した。
- 8 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略 五十音順）
阿部泰之 石川日出志 牛山佳幸 笹澤浩 千野浩 寺島孝典 町田勝則 後町小学校同窓会
須坂市教育委員会 長野県立歴史館

凡 例

本書では発掘調査によって得られた資料について、下記の要領で掲載する。

- 1 地形図等の方位は真北、遺構測量図等は座標北を表す。遺構測量は平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値と、日本水準原点の標高を基準とし、株写真測図研究所の開発したコーディックシステムを採用するため同所に委託した。
- 2 遺構実測図は現地にて縮尺1/20で原図を作成し、本書では縮尺1/40を基本として掲載しているが、図によって異なるため、各図版ごとに縮尺を明示した。
- 3 本書に掲載した遺物番号はすべて通番とし、本文及び挿図・遺物観察表・図版の番号は一致する。遺物実測図は縮尺1/3を基本としたが、遺物の種類によってはこの限りでなく、各図版に縮尺を明示した。また遺物実測図と写真の縮尺は同一である。
- 4 本書図版に使用した遺構略号及びトーンは以下の通りである。
SB-堅穴住居跡、ST-掘立柱建物跡、SD-溝跡、SK-土坑、SX-不明遺構、P-小穴
 焼土・被熱痕  赤色塗彩  炭化材・黒色処理 断面黒色は須恵器
 灰堆積範囲・スス・油煙
- 5 本書の土層・遺物観察の色調記載は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖1998年版』によるものである。

目次

序・例言・凡例・目次

第1章 調査経過

- 第1節 調査に至る経緯と事務的経過…………… 1
- 第2節 試掘調査と工事立会いの概要…………… 4
- 第3節 調査の体制…………… 6
- 第4節 調査日誌抄…………… 7

第II章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境…………… 10
- 第2節 歴史的環境…………… 10

第III章 調査成果

- 第1節 調査概要…………… 14
 - 第2節 弥生時代の遺構と遺物…………… 19
 - 第3節 古代の遺構と遺物…………… 24
 - 第4節 その他の遺物…………… 29
- #### 第IV章 自然科学分析…………… 30
- #### 第V章 まとめ…………… 30
- 第1節 弥生時代の集落について…………… 45
 - 第2節 古代の原町遺跡…………… 46

引用・参考文献

報告書抄録

挿図・表目次

- 第1図 調査地位位置図…………… 1
- 第2図 調査地位位置図…………… 2
- 第3図 試掘トレンチ・調査区設定図…………… 3
- 第4図 試掘調査土層柱状図…………… 5
- 第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 11
- 第6図 裾花川河岸段丘想定図…………… 12
- 第7図 遺構分布図…………… 14
- 第8図 基本層序柱状図…………… 15
- 第9図 栗林式土器の装飾構成の表記法…………… 17

- 第10図 栗林式土器編年表…………… 18
- 第11図 瓢形壺の例…………… 21
- 第12図 原町遺跡・周辺遺跡の弥生土器…………… 23
- 第13図 原町遺跡奈良・平安時代の様相…………… 28
- 第1表 栗林式土器編年対応表…………… 17
- 第2表 記載外遺構計測表…………… 27
- 遺物観察表(1)～(8)…………… 47～54
- 非掲載遺物重量表(1)・(2)…………… 55・56

図版目次

- 図版1 A・D区全体図
- 図版2 B区・北棟立会区全体図
- 図版3 遺構個別図A区(1)
- 図版4 遺構個別図A区(2)
- 図版5 遺構個別図A区(3)
- 図版6 遺構個別図A区(4)
- 図版7 遺構個別図A区(5)・D区(1)
- 図版8 遺構個別図D区(2)
- 図版9 遺構個別図D区(3)
- 図版10 遺構個別図D区(4)

- 図版11 遺構個別図B区(1)
- 図版12 遺構個別図B区(2)
- 図版13 遺構個別図B区(3)
- 図版14 遺構個別図B区(4)
- 図版15 遺構個別図B区(5)
- 図版16 遺構個別図B区(6)
- 図版17 遺構個別図B区(7)
- 図版18 遺構個別図B区(8)
- 図版19 遺構個別図B区(9)・立会区(1)
- 図版20 遺構個別図立会区(2)

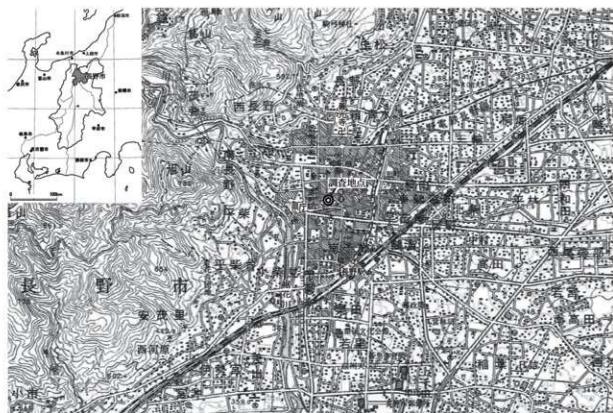
- 図版21 遺構個別国立会区 (3)
- 図版22 A区出土遺物 (1)
- 図版23 A区出土遺物 (2)
- 図版24 A区出土遺物 (3)
- 図版25 A区出土遺物 (4)
- 図版26 A区出土遺物 (5)
- 図版27 A区出土遺物 (6)
- 図版28 D区出土遺物 (1)
- 図版29 D区出土遺物 (2)
- 図版30 D区出土遺物 (3)・B区出土遺物 (1)
- 図版31 B区出土遺物 (2)
- 図版32 B区出土遺物 (3)
- 図版33 B区出土遺物 (4)
- 図版34 B区出土遺物 (5)
- 図版35 B区出土遺物 (6)
- 図版36 B区出土遺物 (7)
- 図版37 B区出土遺物 (8)・立会区出土遺物 (1)
- 図版38 立会区出土遺物(2)・その他の出土遺物(1)
- 図版39 その他の出土遺物 (2)
- 図版40 その他の出土遺物 (3)
- 図版41～72 写真図版

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経緯と事務的経過

長野市（以下、市）では、昭和50年代後半から市内への4年制大学の誘致を進めており、昭和57年1月に長野市大学立地懇談会を設置し、平成18年度以降は市から長野県（以下、県）に対して県立短期大学の4年制化の要望を提出している。一方、県は、平成22年2月に県立短期大学の将来構想に関する検討委員会を設置し、平成24年5月には県立大学設立準備委員会を発足させている。平成25年6月に新県立大学基本構想が決定されると、市は平成25年11月に「新県立大学整備に伴う後町小学校跡地活用に関する要望書」を提出し、市が早期開学のための支援を行うことや、大学機能の一部を後町小学校跡地に誘致したい旨を示した。平成26年2月には新県立大学施設整備基本方針が公表され、校舎等を長野市三輪にある県立短期大学敷地に建設すること、学生寮・地域貢献型施設（後町キャンパス）を後町小学校跡地に整備すること、平成30年4月開学を目標とすること等が示され、市としては後町小学校跡地活用整備事業を立ち上げて支援することが具体化したのである。

実は、平成25年当時の長野遺跡群の遺跡範囲は、旧後町小学校敷地の北西隅にごく一部かかる程度であった。そのため当初は遺跡の範囲外と思われていたが、大規模な事業であることから事前に確認調査を実施することになったのである。平成25年8月5日付で市の企画調整部企画課長より長野市埋蔵文化財センター（以下、当センター）所長宛に試掘調査依頼書が提出され、当センターが平成25年9月3日に試掘調査を実施した。詳細は次節に譲るが、敷地内に埋蔵文化財が存在し、かつ保護措置が必要であると判断された結果、県町遺跡の範囲として拡大登録されることとなったのである。当該事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内となったことで、まずは



第1図 調査地位位置図（縮尺1/50,000）

既存校舎の解体工事に伴う文化財保護法（以下、法）第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、平成26年12月11日付26総第683号にて、長野市長から市教育委員会（以下、市教委）宛に提出された。市教委は同月15日付26理第3-54号にて工事立会いを勧告し、平成26年12月10日から平成27年1月9日まで工事立会いを行った。その結果、旧校舎建物部分においては、昭和30年代の建設時による攪乱が広範囲に、かつ深くまで及び、遺構の残存はほとんど確認できなかった。

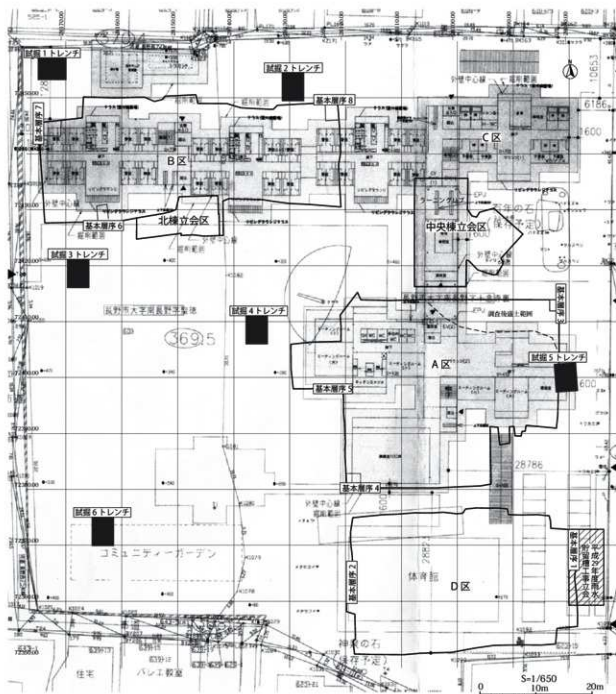
平成27年度は、当該地が善光寺御開帳のための仮設駐車場として利用されるなど有効活用されていたが、埋蔵文化財の保護に関する協議は継続して実施され、ついに7月24日付で後町キャンパス及び（仮称）小体育館建設に伴う発掘調査依頼書が市企画政策部企画課長（以下、企画課長）から提出された。発掘調査を実施するにあたり、具体的な打ち合わせを進める過程で、後町キャンパスの南棟・講義棟予定地部分をA区、北棟の予定地部分をB区、北棟の東側と中央棟の予定地部分をC区として調査区を設定した（第3図）。このうちC区は、平成27年度の工事立会いにおいて遺構の残存が認められなかった範囲であり、改めて施工時の工事立会いの措置としている。また、この段階では（仮称）小体育館（後の（仮称）後町ホール）建設予定範囲にSL（蒸気機関車D51）が屋外展示されており、その移転について方針が決定していなかったため調査を実施することができなかった。建物の具体的な設計も未定であったことから、後の協議とした。実際の発掘調査は、9月11日から翌28年1月20日までの132日間実施している。なお、平成27年12月5日には現地説明会を開催し、約260名の見学者があった。

平成28年度は、前年度に実施した現場作業分の整理作業から開始し、4月6日付28理第20号にて企画課長に対して通知した。また、屋外展示されていたSL（蒸気機関車D51）の敷地内移設がようやく決まり、4月19日付28



第2図 調査地位置図（縮尺1/10,000）

総第66号にて法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が市教委総務課長から提出され、同月22日付28埋第3-4号にて慎重工事の措置を市教委から勧告している。(仮称)後町ホール部分(D区)については、6月30日付28企第194号にて企画課長から法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出され、市教委は同年7月5日付28埋第3-13号にて発掘調査を勧告している。これに基づき、7月7日付けで企画課長から発掘調査依頼書が提出され、7月中旬から末にSL(蒸気機関車D51)が敷地内の南西へ移設されると、9月5日から11月17日まで74日間の発掘調査を行った。なお、後町キャンパスの建設工事に関しては、7月7日付28埋第54号にて法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が長野県知事からなされ、7月21日付28埋第3-14号で工事



第3図 試掘トレンチ・調査区設定図(縮尺1/650)

立会いの措置を市教委が勧告しているが、新たに未調査部分が確認されたため、8月3日、18日から26日までの間に工事立会いを行った。さらに設計当初未定であった工事用タワークレーンの設置箇所については、面積は狭小であるが掘削深度が3mと深いことや、平成27年度調査B区と隣接して遺構が連続している可能性が高いため、関係各所と協議の上、10月4日から24日まで立会調査を行った。

平成29年度は、4月7日付29理第12号にて企画課長宛に通知し、前年度までの2年間に実施した発掘調査や工事立会いの整理調査を行った。また、急遽浮上した雨水貯留槽部分の保護措置に関しては、後町小プールの更衣室があった場所であり、既に破壊を受けていることが明らかであったため、12月20・21日に工事立会いを実施して破壊状況を確認している。出土遺物に関する整理作業を進める過程で、様々な指導や助言を受け、平成30年3月23日に本報告書を刊行し、すべての保護措置を終了した。なお、発掘調査にかかる経費はすべて市の大学整備基金から支出し、平成27年度16,736,795円、平成28年度 5,545,774円、平成29年度 2,558,685円、合計24,841,254円となっている。

第2節 試掘調査と工事立会いの概要

平成25年当時の長野遺跡群の遺跡範囲は、旧後町小学校教地北西隅のごく一部がかかるとのみで、遺跡の範囲外と思われていた。しかし大規模な事業であることから、所定の手続きを経て、当センターが平成25年9月3日に試掘調査を実施した。

試掘調査は既存校舎を避けて校地内の6カ所にトレンチを設定した(第3図)。土層堆積の状況は(第4図)、旧地表面高については試掘3～6トレンチではほぼ同一レベルで、北に位置する試掘1・2トレンチの標高が高いのに対し、遺物包含層である暗褐色土層は試掘3・4トレンチにおいて標高が高く、そこを起点として東方に扇状に低下していく状況が観察できた。試掘2～5トレンチにおいて遺物包含層が確認され、古代の須恵器・土師器片が出土し、遺構確認面は地表下深さ約50cm～1m前後と想定された。調査の結果、校地内に埋蔵文化財が包蔵され、かつ保護措置が必要であると判断され、県町遺跡の範囲として拡大登録することとなった。

前節で述べた通り、所定の手続きに従って、既存建物の解体工事について工事立会いが勧告され、平成26年12月10日から平成27年1月9日まで工事立会いを行った。整備計画及び試掘調査成果に基づき、調査区をA～D区まで設定していたが、解体工事は調査区全域に亘った。とくにC区にあたる旧校舎部分は地下室が設置されていたため、攪乱が深く広範囲に及び、遺構がほとんど遺存していなかった。なお施工時に再度工事立会いを行うことにより、遺構確認を確実なものとした。

平成29年度、D区に位置する後町ホール建設工事に際して雨水貯留槽建設工事が追加され(第3図)、12月20・21日に工事立会いを実施した。旧地表下約1.4mまで掘削されたが、遺構・遺物等は確認されなかった。D区の調査成果により、旧地表下約70cmに想定された古代の遺構確認面は攪乱により破壊を受けていること、地表下約1.7mに想定される弥生時代の確認面は、保護層を含め確実に保護されていることが立会調査によって確認された。



試掘調査状況



試掘5トレンチ土層堆積状況



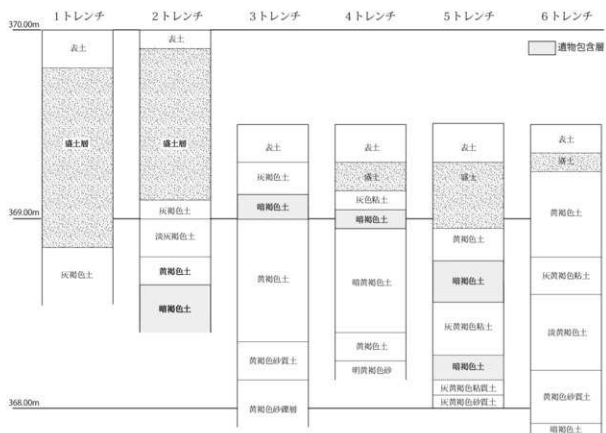
校舎解体工事（北西から）



校舎地下室遺存状況（東から）



後町ホール雨水貯留槽撤去状況（北西から）



第4図 試掘調査土層柱状図（縮尺1/20）

第3節 調査の体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として実施し、文化財課埋蔵文化財センターが担当した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤守
統括責任者	長野市教育委員会	教育次長	藤沢孝司 (H27)、松本孝生 (H28～)
統括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	青木和明
調査責任者	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター	局長兼所長	小山敏夫 (H27)
		同	主幹兼所長 森山正美 (H28)、石田正路 (H29)
調査担当者	長野市教育委員会文化財課 (埋蔵文化財センター担当)	課長補佐	飯島哲也 (H28～)
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	係長	竹下今朝光 (～H28)、小林晴和 (H29)
		事務職員	大竹千春 (H27)、宮崎千鶴子 (H28～)
	調査担当	係長 (学芸員)	飯島哲也 (H27調査担当者)、風間栄一
		主事 (学芸員)	小林和子
		研究員	田中晩穂 (主任調査員)、日下恵一 (調査員)、 鈴木時夫 (H28調査員)、高津希望 (H28調査員)、 柳生俊樹 (H27)、高田亜紀子 (H27)、清水竜太、 遠藤恵実子、篠井ちひろ
調査員 (現場)	大久保邦彦 (H28)、向山純子		
発掘作業員	青山三枝子、伊藤咲子、植木義則、上原律江、内田正征、江守久仁子、大谷盛孝、岡沢貴子 岡沢紀文、岡宮純子、金井節、金子ボンティブ、北村まどか、久保田温子、後藤大地 駒澤一雄、駒村文男、サムアットサリン、地子順子、地主ちづる、杉本千代、高野英子 高橋正樹、竹内徳治、田原次郎、塚本直樹、月岡純一、外館幸洋、中村泰明、原山健一 藤澤優子、峯村茂治、峯山真由美、宮尾弘子、村田岳仁、山口勝己、山本賢治、山本光洋 横田与志子、渡辺由美		
調査員 (整理)	青木善子、鳥羽徳子、向山純子、武藤信子		
調査補助員	市川ちず子 (H29)、窪田順 (H29)		
整理作業員	清水さゆり、関崎文子、西尾千枝、待井かおる、三好明子		
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所	代表取締役	湯本和幸
重機等賃貸借	株式会社北條組	代表取締役	北條高己 (H27)
	北野建設株式会社	代表取締役	北野貴裕 (H28)
理化学的分析・年代測定委託	パリオ・サーヴェイ株式会社	代表取締役	遠藤和郎 (H27)
X線写真撮影協力	長野県立歴史館	館長	笹本正治 (H29)
石器・石製品指導	長野県立歴史館	考古資料課 専門主事	町田勝則 (H29)
赤外線写真撮影協力	須坂市教育委員会生涯学習スポーツ課文化財係	学芸員	田中一穂 (H29)
地質学的指導・石材鑑定	長野市立博物館分館信州新町博物館	係長 (学芸員)	畠山幸司 (H29)

第4節 調査日誌抄

〈平成27年度〉

9月11日 調査範囲位置出しを行う。

14日 A区南西隅より重機掘削開始。校地は以前十念寺の敷地であったため、中近世面の存在も想定し、表土より約60cmの深度を仮想1次面と設定した。調査区南辺・西辺を掘削し、西辺中央付近では下層確認のためさらに深く掘削した。調査区西約1/3の表土掘削を終了したが、南辺では養生シートなどを含む攪乱で占められ、石墨や近代陶磁器などが出土する攪乱も確認され、小学校に関連するものと考えられた。

15日 調査区東半を仮想1次面の深度まで表土掘削した。並行して随時トレンチを掘削して下層の確認をしたが、遺物包含層を検出できなかった。

16日 作業員作業開始。重機掘削と並行して、仮想1次面の遺構精査を行うが、攪乱が激しく遺構は検出できなかった。前日に引き続きトレンチ掘削を行う。

18～28日 調査区北東隅に掘削したA区1トレンチにおいて、基盤層までの堆積状況を確認した。攪乱の及んでいる深度を考慮し、深さ約120cmを検出面として設定することとした。調査区北西部は旧地形の標高が高いため、深度約70cmで包含層が検出された。

29日 S B 1の調査を開始。

10月1・2日 排出土置場の養生。

5日 S B 2調査開始。

9日 調査区北西部S T 4、周辺小穴群調査開始。

13日 S T 4遺構測量。

16～27日 遺構精査。トレンチ設定。

20日 S B 3調査開始。

11月4日 A区遺構測量。

4～13日 B区重機掘削。

9日 A区北西隅を部分的に埋戻し、範囲測量。

S B 4調査開始。

13・16日 B区東半より遺構精査。校舎による攪乱が面積の約2/3に及び、包含層の遺物量も僅少であったため遺構密度は低いと想定されたが、古代の住居跡を検出した。

17日 B区上層遺構調査開始。

12月4日 現地説明会準備。

5日 現地説明会開催。

8日 空中写真撮影。

9・10日 遺構測量。

10・11日 重機による排出土処理。

14～16日 重機によるB区下層検出作業開始。



平成27年度調査表土掘削状況



平成27年度調査遺構精査作業

- 17・18日 A区埋戻し。
- 12月17日 B区下層遺構精査開始。上層において部分的に検出された掘立柱建物跡の範囲と床面が不明瞭であった住居跡を重点的に精査。
- 18日 B区下層遺構調査開始。
- 1月8日 B区下層全景撮影。
- 12日 排出土置場養生を撤去。
- 14日 排出土置場を再度養生する。
- 14・15日 遺構測量。
- 18日 器材撤収。
- 18～22日 B区埋戻し。
- 20日 排出土置場養生を撤去。



平成27年度空中写真撮影作業

〈平成28年度〉

- 9月5～7日 D区西半を重機により表土掘削。西辺にトレンチを掘削し検出面を確認する。
- 6日 遺構精査開始。
- 7日 遺構調査開始。攪乱範囲が広く、遺構は少ない。
- 16日 全景撮影の後、遺構測量を行う。
- 26・27日 検出したのが弥生後期の遺構であったため、重機掘削により下層に中期の遺構が存在するか確認を行う。東西方向の溝を確認し、記録する。
- 28・30日 調査区埋戻し。
- 10月3～12日 調査区東半を重機により表土掘削。
- 5日 遺構精査開始。
- 11日 竪穴住居跡2軒、溝跡を検出。
- 12日 遺構調査開始。
- 20・21日 市立櫻ヶ岡中学校の生徒2名が職場体験学習で参加。
- 11月1～4日 重機により排出土処理。
- 8日 空中写真撮影、遺構測量。
- 9日 全ての調査を終了し、器材撤収。
- 11月11～17日 調査区埋戻し。



平成28年度調査表土掘削状況



職場体験学習の様子

（平成28年度工事立会調査）

8月3日 県立大学北棟東部分（C区）の調査。表土下約3mまで確認。

18～22日 ラーニングハブ北部（C区）において表土下約1.25mに遺物包含層を確認。地表下約1.55mでは北東—南西に延びる溝状遺構2条を検出した。

25・26日 中央棟建設用タワークレーン基礎掘削工事に立会う。ラーニングハブで検出された溝状遺構とは方位の異なる溝状遺構を1条検出。遺構図を作成。

10月4日 北棟建設用タワークレーン基礎掘削工事立会い開始。

11日 堅穴住居跡検出、調査開始。

19日 タワークレーンの位置が西に変更されたため、立会範囲が拡張された。これにより、昨年度調査で南壁に検出されていたカマドの住居部分が検出された。

24日 遺構撮影・図化を行い、工事立会いを終了。



平成28年度中央棟工事立会い状況



平成28年度北棟工事立会い状況



平成27年度調査参加者



平成28年度調査参加者

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

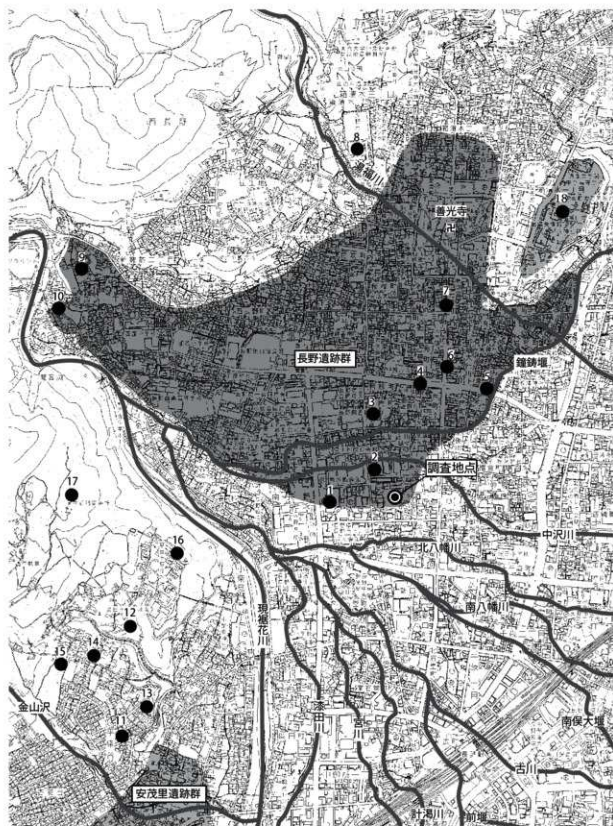
県町遺跡は長野遺跡群に属し、裾花川河岸段丘と湯福川扇状地の複合地形上に立地する。裾花川は西部山地の旭山北嶺里島付近から善光寺平に流入して南下し、犀川へ直線的に合流しているが、これは近世初頭に松代藩が行った瀬替えによるものである（第5図）。本来の流路は長野県庁付近より北で6段の河岸段丘を形成し、段丘より南東で分流する。旧流路の一部は、第4段丘の縁から城山東辺へ流れ北上しているが、現在は鐘鋳塚の流路で、痕跡が城山台地南から東側面の段丘崖にみられる。裾花川河岸段丘の南は犀川まで扇状地が広がり、善光寺下から平林・北尾張部と続く低地は、浅川扇状地との境界である裾谷となっている。湯福川は湯福神社付近を扇頂とし、南は権堂町付近、南東は三輪田町までの急傾斜扇状地を形成している。南西部の範囲が今回行った現地踏査によって推定することができた。

本地点と裾花川河岸段丘頂部付近に所在する新諏訪町遺跡は同年度に調査が行われ、裾花川河岸段丘上に位置するという共通点がある。各調査担当者は調査の過程で遺跡の立地する裾花川河岸段丘に関して現地踏査を行い、段丘分布図を作成した（第6図）。第1段丘面は左岸の往生地、右岸の平柴で河床からの比高80~100mにある。第2段丘面は新諏訪町遺跡旭寮地点が所在する小規模な面で比高15~20mである。第3段丘面は内部に小規模な段が観察されたが（3-1・3-2）、緩い段差しか観察できなかったため同一段丘面として捉えることとした。加茂小学校から東は、第1段丘面の東から東南方向に流れる湯福川の扇状地に被覆されて傾斜地となり、善光寺を中心として元善町遺跡・善光寺門前町跡・西町遺跡が形成されている。第4段丘面は旭町遺跡・東町遺跡がある面で、西は長野商業高校付近から派生し、東端は横山城跡に比定される城山で取東する段丘で、県合同庁舎より東では鐘鋳塚が段丘端部に沿って流下する。第5段丘面は長野商業高校南から中央通りまで段丘が確認できたが、それより東は湯福川扇状地に被覆されているため、段丘が確認できなかった。県町遺跡はこの面に位置する。この段丘より下、北八幡川より南では旧裾花川が分流して扇状地を形成しているため、段丘は確認できない。第6段丘面は現裾花川の河岸最下段で新諏訪町遺跡長野西高校調査地点が所在する。裾花川河岸段丘は南面して段丘面が平坦で比較的大いため、遺跡が多く立地しているとみられるが、善光寺門前町や官公庁があるために開発が早くから進み、その全容は明らかではない。

第2節 歴史的環境

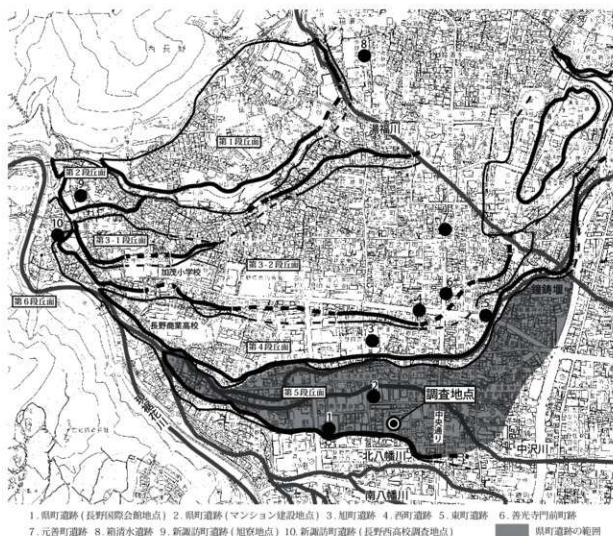
県町遺跡後町小学校地点は善光寺の南約1.1kmに位置する。善光寺に向かう中央通りの西にあり、十念寺に近接する。県町遺跡の範囲については本地点の調査によって拡大したが、第V章第2節において詳述する。十念寺は「出世大仏」を祀る寺として有名で、鎌倉時代の善光寺門前町の境界とされている。「後町」の地名は「後庁」の転訛したもので、鎌倉時代の信濃国庁の出先機関があったことに由来するとの説がある。

周辺の遺跡を概観すると、旭町遺跡（3）では長野市立図書館建設工事に伴う調査が行われ、縄文時代中期と古代の堅穴住居跡が検出され、打製石斧が7本入った埋壘やタカラ貝形土製品が出土した。とくにタカラ貝形土製品は富山・岐阜に出土例があり注目されている。西部山地には地附山古墳群・県主塚古墳・遠藤塚古墳（13）・中塚古墳（平柴中組古墳）（14）・きょう塚古墳（15）・大黒山古墳（17）など中後期の古墳が点在している。西町遺跡（4）・東町遺跡（5）は県庁大門線道路改良工事に伴う調査で、縄文中期から近世までの複合遺



1. 県庁遺跡(長野国際会議場地点) 2. 県庁遺跡(マンション建設地点) 3. 旭町遺跡 4. 西町遺跡 5. 東町遺跡 6. 浄光寺門前町跡
 7. 元善町遺跡 8. 箱清水遺跡 9. 新諏訪町遺跡(旭寮地点) 10. 新諏訪町遺跡(長野西高校調査地点) 11. 平柴平遺跡 12. 小柴見城跡
 13. 逸藤塚古墳 14. 中塚古墳(中塚古墳) 15. きょう塚古墳 16. 北原古墳群 17. 大黒山古墳 18. 横山城跡

第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡(縮尺1/15,000)



第6図 裾花川河岸段丘想定図(縮尺1/15,000)

跡であることが確認された。中世前期門前町の区画溝や堅穴建物跡等を検出し、貿易陶磁・カワラケ・古瀬戸・渡米銭等の遺物が出土した。善光寺門前町跡(6)でも西町道跡の区画溝の延長部分を検出し、中近世の門前町の解明がなされている。元善町道跡(7)では善光寺仁王門東地点・大本願明照殿地点の本調査をはじめ、試掘調査・工事立会い等で、古代から中世の瓦が出土しており、古代寺院の存在が確実視されてきた。善光寺の史料上の初見は10世紀成立の仏教説話集『僧妙達蘇生注記』で、「水内郡善光寺」と記され、この段階では善光寺は地方の一寺院として記載される。創建年代は、考古学的成果により9世紀後半まで遡ることは確実で、さらに元善町道跡仁王門東地点で出土した塑像片は、近年製作年代を7世紀後半とする見解もみられる(寺島2015)。このほか小柴見城跡(12)・横山城跡(18)など善光寺周辺には山城も多く分布し、善光寺や北信の戦国期に深くかかわる遺跡となっている。

長野道跡群とその南西の安茂里道跡群には、西部山地から派生している段丘上に弥生時代中期初頭から後葉の遺跡が確認されている。本調査の周辺には中期初頭の諏訪町道跡(10)、中期後半の平楽平道跡(11)・西町道跡(4)が分布し、これらの遺跡では石剣や石戈・指輪状石製品など重要な遺物が出土している。

以下に県町道跡既調査地点と周辺の弥生時代中期後半の遺跡の概要を記す。

長野国際会館地点(1) 県町遺跡は昭和44(1969)年、裾花川扇状地(河岸段丘も含む)での最初の調査として行われた。県町遺跡の端緒となった調査であるので、その成果について笹澤浩氏の報告(笹澤1970・1981a)を基に整理したい。7月21日から26日に第1次調査、9月29日から10月8日に第2次調査を実施し、昭和52(1977)年には第3次調査を行った。第1・2次調査は長野国際会館建設に伴うもので調査面積約300㎡、第3次調査は同南館(ホテル棟)建設に起因するもので調査面積約100㎡である。第1・2次調査では堅穴住居跡22軒、掘立柱建物跡1棟、火葬墓1基、溝跡6条が検出された。第3次調査では堅穴住居跡5軒が検出された。古墳時代の堅穴住居跡が中期後半1軒、中期末～後期初頭6軒、後期中葉3軒、後期後葉5軒が検出されている。奈良時代では堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条が検出され、平安時代は堅穴住居跡8軒、火葬墓、溝跡が検出された。掘立柱建物跡は柱穴の平面規模が径50cm前後で、3間×2間が検出された。柱間隔は1.8mで方位はN50°Eと記される。柱穴覆土から踏脚礎の台脚部片が出土した。掘立柱建物跡と踏脚礎の発見によって、本地点は水内郡家推定地とされている。報文では古墳時代の集落について安茂里遺跡群・西長野古墳群との関連に着目している。

マンション建設地点(2) 平成28(2016)年に約596㎡の調査が行われ、報告書が刊行されている(長野市教委2017)。弥生中期後半の堅穴住居跡2軒、大型溝1条、土坑2基、奈良・平安時代の堅穴住居跡18軒、溝2条が検出された。弥生時代の住居であるA区2次面SB4の床面からは、西隅に壺9点、甕1点が横位で並んだ状態で出土し、土器内部には栽培種でイネ43点、アワ1点、栽培の可能性のあるマメ科の種実が確認された。また住居柱材4点については、AMS法による分析で紀元前2世紀から1世紀との年代が判明した。古代の遺物としては、A区1次面SB4覆土中から円面硯片3点(2個体)と須恵器双耳杯が出土し、共存遺物の年代により8世紀後半から末のものとしている。またSB4についても須恵器底部に糸切とヘラ切が共存している段階であり、8世紀後半としている。

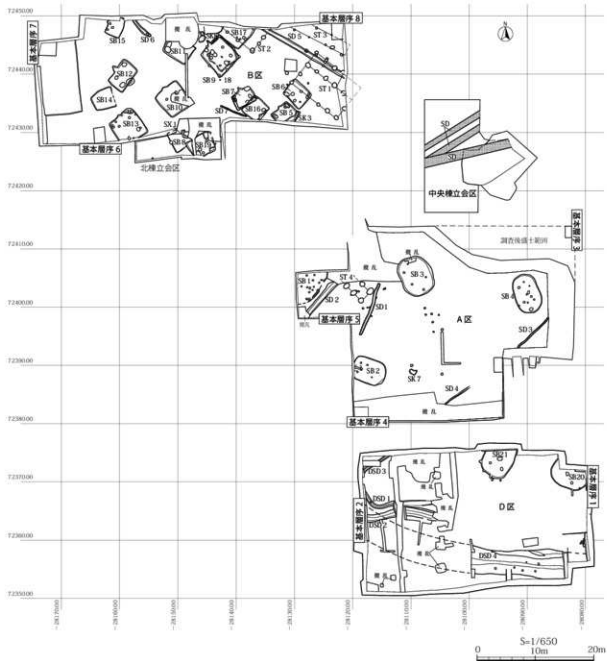
平柴平遺跡(11) 平柴平地造成に伴い、昭和46(1971)年度に2回調査を行った。縄文から平安時代にわたる遺跡で、堅穴住居跡・土壙墓・方形周溝墓が検出され、弥生中期では堅穴住居跡9軒、土坑9基が確認された。5号土坑からは石戈あるいは石剣とみられる先端部片が出土し、共存している土器は栗林2式古段階(栗林I式)に位置付けられている(第10図)。この他栗林II式の住居跡7軒、土坑6基が検出されている。壺口縁部がラッパ状に大きく開く形態と受口状に強く折り曲げる形態が混在し、台付甕を伴うなどの特徴から栗林2式新段階に該当する。

西町遺跡(4) 弥生中期の堅穴住居跡ASB1・BSB9が検出された。ASB1は円形を呈する住居跡で、破片資料であるが、壺は細頸形態や頸部刺突文・口唇部・頸部への縄文施文がみられる。甕胴部の波状文の振幅はまだ小さいが縦羽状文がみられ、受口状口縁が見受けられる。BSB9はコの字重ね文の台付甕や頸部波状文・縦羽状文を施文する。全体として栗林2式新段階と考えられる。ASB1には磨製石鎌・大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧、蛇紋岩製指輪状石製品が伴い、BSB9には有孔土製円板が共存する。この他磨製石包丁がCS D1より出土した。

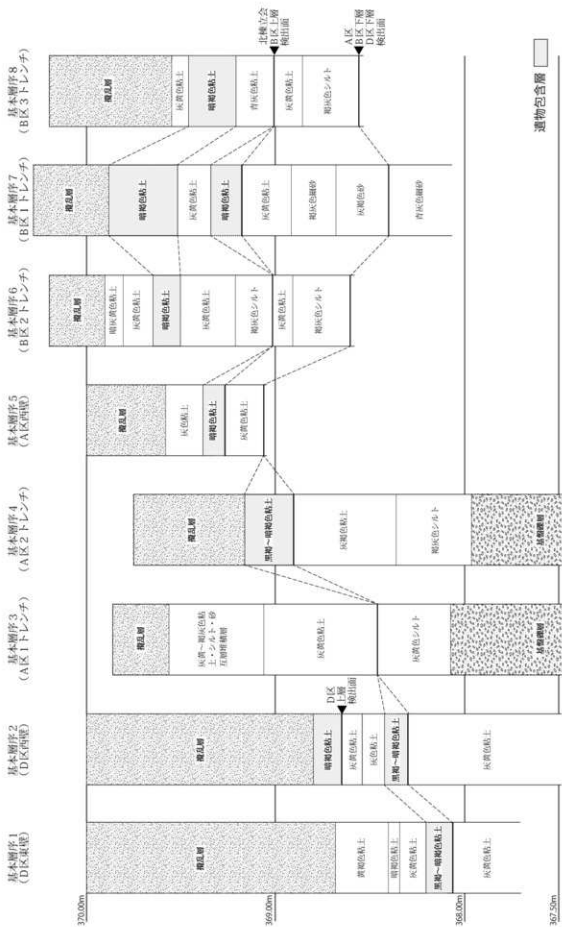
第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査概要

調査は平成27(2015)年度と平成28(2016)年度に行われた。調査面積は約3,082㎡でA～D区まで設定され、A・B区は平成27年度、D区は平成28年度に本調査を行った。C区は既存建物に地下室が設置されていたため攪乱を受けていると予想され、既存建物撤去工事の立会いにおいて遺構が希薄であると判断された。また建設工事用タワークレーン設置位置も遺構が希薄であり、深く掘削されるものの面積は狭小のため工事立会いの措置となったが、必要な場合は精密な調査に切り替えた。なお工事立会い範囲は調査面積には換算していない。



第7図 遺構分布図 (S=1/650)



本調査時は表土掘削や調査中に随時トレンチを設定して基本層序の把握に努め、試掘調査も含めると校地全体にトレンチを配置することができた(第3図)。それらの土層柱状図(第4・8図)を検討すると、旧地形は校地西部中央付近の標高が高く、東方に向かって扇状に漸次標高が低下する状況が看取できる。段丘上のマクロな地形変化と合わせると、段丘端部である南西部はやや低く、段丘中心である北東に向かって標高を上げ、校地の北東付近で一旦低くなった後、上位段丘との境界に向けて再び高くなる構造である。校地北東で旧地形が低くなる理由は不明であるが、基本層序7において水性堆積が顕著であることから河道や湿地などの存在を想定できる。ここでは本調査の弥生集落より時期が早く、マンション建設地点A-2SK7・SB7と同時期とみられる栗林2式古段階の土器が出土している。その後古代の段階ではこの低地部分は埋没し、逆に南東部が水性堆積の状況に至る。

平成27年度はA区から調査を開始し、試掘4トレンチで検出面に想定していた、地表下約55cmを目標として重機による掘削を行った。しかし既存建物である体育館による攪乱が大幅に残存しており、2m間隔で礫を充填した幅50cmで南北方向の溝が並び、近代以降の陶磁器や瓦等の遺物が出土した。さらに試掘5トレンチにおいて地表下94cmと135cmに存在した検出面を目指して、表土掘削を継続した。その間にもトレンチを掘削して検出面を探索したが、最終的には地表下1m前後において弥生時代後期から古代の遺構を検出し、SB1・ST4・SD2を調査した。その後は人力による精査を重ね、弥生時代中期後半の遺構、SB2~4を検出して各遺構の調査に入った。A区南東部は堅穴住居跡が検出された位置とは土質が異なり、シルト質土を主体とし、遺構分布が希薄であった。検出されたSD3・4は遺物が出土せず、時期が不明であったが、翌年、その延長上にD区で弥生時代後期の溝跡DSD1・3が検出され、何らかの関係が窺えることから弥生時代後期の遺構の可能性がある。

B区でも試掘成果を踏まえた上に、トレンチも設定して重機による表土掘削を行い、調査区西部~北端において地表下約1mの上層(調査時呼称2次)検出面で数軒の堅穴住居跡が検出できたが、その他は攪乱が著しく、さらに20~30cm掘削して検出した。上層調査時に下層に遺構があることが判明し、上層調査・記録後に重機掘削を行い古墳時代後期・平安時代初期の遺構を検出した。また調査区西端では下層検出面より約30cm下から弥生土器(221・222)が出土した。翌年B区南壁中央付近で北棟立会調査を行ったところ、B区南壁で確認されていたSB8の続きとSB19を検出した。これらの調査により検出した古代の遺構は古墳時代後期、奈良時代、奈良時代末~平安時代初期、平安時代前期に分類される。特に奈良末~平安初期と想定される掘立柱建物跡ST1~4(4はA区)は、ST3を除いて方位をほぼ揃えて構築されているため同時期の遺構と考えられ、ST1が片廂構造であること、ST2から「厨」墨書土器が出土したこと併せて、官衙的要素を見出すことができる。

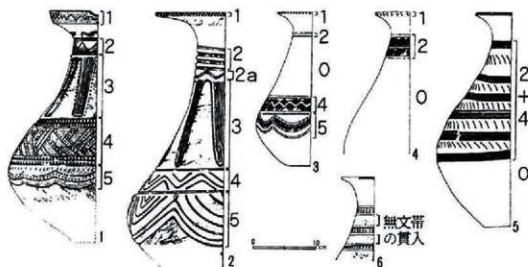
平成28年に調査したD区はA区と隣接しているため、弥生時代の遺構の検出を想定していた。調査は排土処理の都合上反転して行うことになり、西半から調査を開始した。しかし既存のプールによる攪乱は深く広範で遺構の残存状況は良好でなく、地表下約1.3mで弥生後期の溝跡3条のみが検出された。このうちDSD1・3は位置関係から同一遺構と考えられ、弥生時代後期の遺構である。調査区西壁中央には幅約5.1m、深さ約1mの断面V字形の溝DSD4が確認された。西半埋戻し時に下層確認のためのトレンチを掘削した際、東に向かう状況が看取され、東半の調査においてこの続きが検出された。緩い弧を描いて調査区外へと続くが、全容は不明である。東半の調査では西半の検出面の深さで遺構が確認できず、約20cm下げて堅穴住居跡2軒を検出した。出土土器の年代によってA区の弥生時代中期後半の住居跡と同時期と判断され、DSD4を区画とした集落であると考えられる。

各調査区の遺物包含層及び検出面高は基本層序柱状図(第8図)に示した。本報文における遺構・遺物に関す

る記述は弥生時代・古代の順で行い、図版もそれに従って、弥生時代を主とするA・D区、古代を主とするB区・立会調査の順に配置している。調査が複数の調査区となったため、遺構名に一部不統一が生じた。竪穴住居跡（SB）・掘立柱建物跡（ST）・溝跡（SD）・土坑（SK）は各遺構ごとに通番としているが、D区の溝跡は別番号となっているため、遺構名の最初に調査区名「D」を冠している。小穴（P）は各調査区名を冠し、遺構内の土坑・小穴などは調査区名を付していない。遺構の記載は、主軸は弥生時代の住居跡では長軸をあて、古代においてはカマドを通る軸とし、その長さに煙道は含めないこととする。掘立柱建物跡の主軸方位は検出した長軸の方位をあてた。

土器編年に関しては、古代はいわゆる屋代編年（長野県埋文2000）を基準とする。弥生土器については、一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会において、寺島孝典氏が各氏の編年の比較検討を行い、まとめられている（寺島2013）。そこで寺島氏が作成された編年対応表をベースとし（第1表）、栗林式土器の統一された編年観として提示された。石川日出志氏の編年（第10図、石川2012）を用いた。なお、その他の編年を用いる際は第1表の表記に従った。本文中で編年の要素として裝飾構成を援用しているが、第9図に示した石川日出志氏の表記法に依拠し、各段階の特徴や細分については、これまでの研究成果を随時参照して記載した。

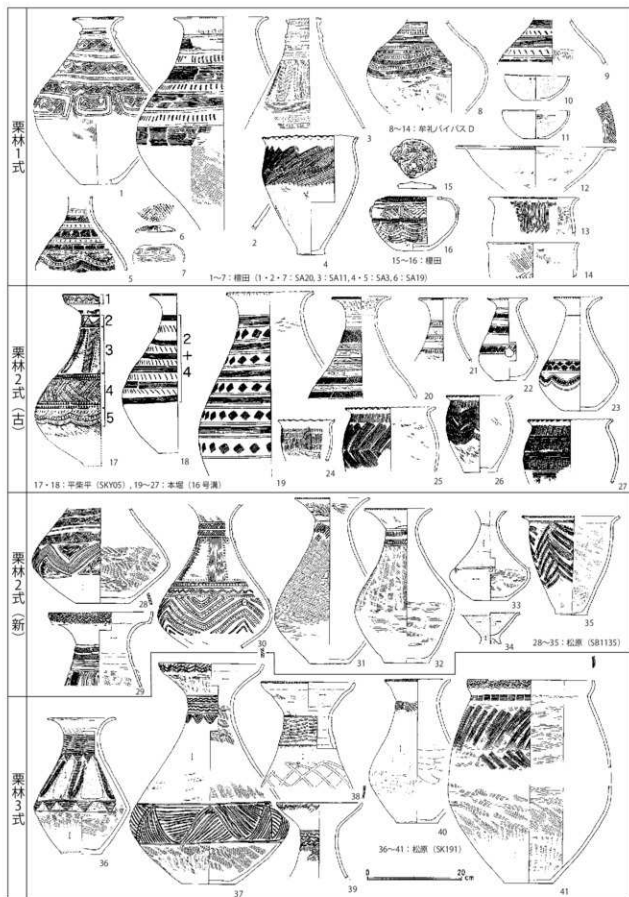
「指おさえ」は弥生土器の成形技法にみられるが、本文中では「指頭圧痕」を併用している。指おさえについては、口縁部などをつまみおさえる技法と解釈し、指頭圧痕は輪積成形に伴い指で粘土を圧着させるものとして用いた。



第9図 栗林式土器の裝飾構成の表記法（石川2002）

寺島1999	馬場2008	笹澤2011	石川2012
	1式古段階		
古段階古相			
古段階新相	1式新段階	1式古段階	1式
中段階古相	2式古段階	1式新段階	2式古段階
中段階新相	2式中段階	Ⅱ式古段階	2式新段階
	2式新段階		
新段階	3式	Ⅱ式新段階	3式

第1表 栗林式土器編年対応表（寺島2013）



第10図 栗林式土器編年表 (S=1/8、石川2012)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代後期の検出面はほとんど確認できなかったが、遺構としてはA区でSB1・SD3・4、D区ではDSD1～3が相当する。弥生時代中期の検出面は調査区全域に存在したとみられるが、B区において遺構は確認できず、北西隅で土器(221・222)が出土したのみである。出土地点は地質的には砂質土を主体とし、基盤礫層にも近く、土層堆積の状況から流路である可能性が高い。この2点は文様の特徴から、マンション建設地点A-2SK4・SB7と同時期の2式古段階と考える。

SB1 A区西北隅壁際に位置するため住居の一部だけを検出し、長短軸ともに約5.22mである。検出できた規模と平面形態からは北東-南西を主軸とする隅丸長方形あるいは楕円形であると推測される。後世の削平を受けたと見られ、深さ10cm弱と非常に浅い。小穴が14基検出されたが、住居の柱穴や炉跡は確定できなかった。遺物はほとんど出土せず、後期の高杯(1)のみを図示した。ほかには甕の底部片と土器小片、須恵器杯片が出土した。

SB2 A区南部西壁付近に位置し、西端は調査区外となっている。主軸長5.82m、短軸長4.26mの隅丸方形で深さ約18cmである。小穴は4基検出したが、P1～3を主柱穴とすると、柱穴の並びは方形にならない。炉跡は住居跡中央付近に見られた焼土範囲と想定する。トレンチを掘削した位置には古代の遺構が存在し、径約1.08m、深さ約39cmで、規模・形状から掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い。炭化材が床面付近に散在していたため、サンプリングして自然科学分析を行った。遺物は受口状口縁壺(2・3)、頸部波状文と崩れた縦羽状文を施した甕(6)が出土し、壺の口縁は受口が緩くなり、縄文は欠落していて、甕は最大径が胴部になる。石器は紡錘車とみられる有孔石製品(255)が出土している。未掲載の土器は小片で少量であるが、沈線文や羽状文の破片を含む。

SB3 主軸長6.78m、短軸長5.64mの楕円形を呈する。深さ36～42cmで、北端は近代以降の擾乱を受けている。炭化材の残存状況はあまり良くないが、放射状に広がると推定される。4・5層は壁際から地山土と同質の土が流入しており、その層は床面の炭化材と、焼土層である3層の間に存在する。住居焼失の際に周堤や屋根等の土が住居内に崩落した痕跡と考えられる。これはSB4の堆積状況と共通し、火災時に家屋崩壊とともに住居周堤や壁材が流入した可能性が高い。炭化材はサンプリングして自然科学分析を行った。赤色顔料を取めた壺(14)が床面で出土している。炉跡は焼土に紛れ、確認できなかった。主柱穴はP2～4と考えられるが、対応する柱穴を1基検出することができなかった。なおP1・5のどちらかが椽柱柱の可能性が高い。

壺は最大径が著しく下垂して胴部下位にあるか、最大径で「くの字」状に屈曲するもので占められ、口縁は緩い受口状(9)とラップ状に大きく開くもの(12)がみられる。9・10・16などは無文化がかなり進み、12には頸部の横位沈線文下に鋸歯状沈線文が配されるなど栗林3式の特徴を示す。甕は胴部に最大径があり、縦羽状文がみられるが、17のように口縁部に縄文を施文するものが含まれる。18は無文の甕であるが、現段階では出土遺跡に偏りがあり、中俣遺跡20号住67、松原遺跡SB360-439など、いわゆる拠点集落でみられる。24の胴部最大径の文様は、上信越自動車道建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターが松原遺跡で行った調査(以下、松原遺跡高速道地点。県埋文1998)で出土した、SK191-2016(第10図37)にみられるが、管見の限り器形の類例がなく不明である。未掲載土器にはコの字重ね文や口唇部に刻みを施すもの、5装飾帯に山形文、頸部片では擬似籬状文、横位沈線と刺突文を重畳するものなどを含む。籬状文の甕が多く確認された。

SB4 主軸長6.84m、短軸長4.38mの、平面形は南北に長い楕円形を呈する。深さ42～54cmで、炭化材が放射状に広がる状況が看取され、SB3と同様に住居焼失の際に周堤や屋根等の土が住居内に崩落した痕跡が、

3・7・7層に観察される。炭化材及び種実にはサンプリング後分析を行った。小穴は10基検出され、炉跡を中心にやや歪んだ亀甲形に配される。P2・3・7・8は主柱穴と考えられ、P1は棟持柱であろう。P10は位置的にはP1に対応するように配されるが、目的は不明である。P6は径約30cm、深さ約21cmになるが、主柱穴よりも内側にあるため建物構造との関連は低い可能性がある。炉跡に近接していることに意味があるのかもしれない。P9は南西壁際に穿たれていることから壁際の柱穴の機能があったのであろう。P11は住居南端、主軸上にあり、深さ9cmとごく浅いため出入口ピットと考えられる。約3万粒のアワを収納した壺(35)はこの小穴の東脇で床面より約10cm上で出土した。

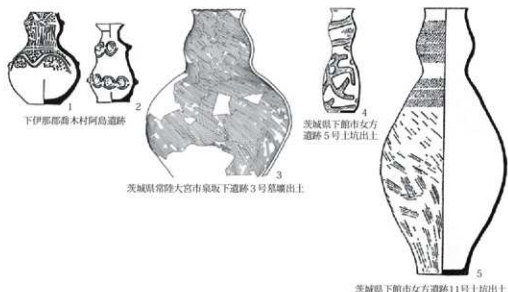
遺物の大半は下層～床面で出土し、床面に位置するものは残存比率が高く、住居西壁に並置され住居空間利用の特徴を示している。台付甕・高杯など脚台が付属する土器の出土比率は高く、鉢も比較的多い。62は高杯であるが、口縁の形態は北信で類例がなく、畿内の影響を受けた可能性がある。28は本遺跡の壺の中では縄文を伴う希少なものである。4装飾帯に横波状文と山形文の重畳を行う例は、松原遺跡高速道地点S B1115-1227がある。37は口唇部に縄文施文、胴部に波状文の構成だが、波状文の振幅は大きい。文様構成は松原遺跡高速道地点S B303-269と同じだが、最大径の位置と文様の粗雑さから37はより新しい時期のものとみられる。45・46の波状文も振幅が大きく、頸部に縷状文を伴う甕も多い。未掲載遺物は口唇部に刻みがあるもの、縷状文などあるが、無文の破片が多い。

S B20 長軸長6.6m、短軸長3.24mで、短軸は調査区外に続く。平面形は楕円形もしくは隅丸方形と推測される。炉跡は長軸上で中央付近に位置するが、主柱穴と推定されるものはP2のみであるため、建物構造は不明である。P1は上端に炭化材を伴っているため、壁際の柱穴とみられる。遺構深度は約18cmで、住居覆土はシルト主体でラミナ状堆積や鉄分沈着が観察され、住居廃絶後に洪水などによる水性堆積により埋没したと想定される。住居跡検出時に黒褐色粘土層が住居跡の輪郭にみられたのは、住居廃絶時の堆積層である。炭化物を含有する黒褐色粘土層の上に、シルト等を主体とする層が二次的に堆積したためと考えられる。P2で出土した台付甕(68)は柱穴への土器埋設とみられ、松原遺跡県高速道地点でも類例があり、住居の廃絶に伴う儀礼的行為とされるが(豊田2000a)、行為の意味など詳細は不明である。この他は破片資料が多く、出土量も他の住居と比較して少ない。土製品では有孔円板(287)が出土している。

S B21 主軸長5.34m、短軸長5.22m、深さ約45cm、北部は調査区外に続くが、平面は楕円形と推定される。P1・2は主柱穴と考えられるが、対応する柱穴は検出できなかった。住居壁外周のP3～6は等間隔で並び、住居柱穴と看做せるが、この他に外周小穴は見出せず、住居南部に限定されている。包含層である5層下にシルトを主体とする覆土が堆積する。S B20と同様、廃絶後の水性堆積と考えられ、検出時の状況も類似する。

遺物の出土量は比較的多く、床面から出土した土器は残存率が高い。甕形壺(70)は住居南部で東西に上下が分割して出土した。出土した壺の口縁部はラッパ状に大きく開くが、緩い受口状に分類される。70を除けば、壺の文様は口縁と頸部の縷状文のみとなり、74の頸部は擬似縷状文をもつ。79は台付甕だが、波状文の振幅はそれほど大きくなく、縦方向の直線文による区画がみられる点で古い段階の特徴を有する。未掲載資料では山形文の崩れたもの、波状文、コの字重ね文などがある。

甕形壺(70)については文様構成は粟林式であるが、粟林式のなかで胴中に明瞭な括れを有する器形は類例が見受けられない。しかし他地域では類例をみることができ、前期後半には北四国の阿方・片山式に明瞭な括れをもつ壺がみられ、粟林2式新段階と併行する畿内第IV様式では台を伴うが甕形の器形がある。南東北の御代田式・南御山式にも小型の例が散見し、再葬墓で著名な女方・泉坂下遺跡などでも甕形壺がある(第11図3～5)。長野県内では中期中葉の阿島式に類例があり、第11図1・2は15～18cmの小型のものである。甕形の土器にどの



第11図 甔形壺の例 (S=1/8)

ような用途・意味があるのかは不明であるが、弥生時代を通して点的には出土しているようである。

溝跡 D区DSD1～3 (図版1・10)は同一検出面から掘られているため、DSD2で弥生後期の遺物が出土したことや、中期の溝であるDSD4の上層に位置することから弥生後期の遺構と解釈した。DSD1～3は調査区西半で検出され、どちらも調査区西壁に向かって直線的に伸びて壁直前で回り込み、調査区外で繋がる想定される。調査区西壁土層断面 (図版10)ではDSD1が幅約78cm、深さ約18cmで、DSD3は幅約1.2m、深さ約30cmである。A区SD3・4 (図版1・6)の延長上に位置し、何らかの関連が想定される。A区SD3は幅約30cm、深さ約11.8cm、SD4は幅約40cm、深さ6.1cm前後でどちらも極めて浅い溝である。DSD1からは波状文の甔形壺片 (88) が出土した。

DSD2はDSD1の南を並行して走る溝で、幅約1.4m、深さ約27cmである。弥生後期の高杯脚部 (89) が出土し、未掲載には須恵器壺片・土師器小片を含む。DSD4 (図版1・8～10)は調査区を東西に横断する溝で、調査区西壁で幅約5.1m、深さ約1m、東壁で幅約4.6m、深さ約1.2mとなる。断面は緩やかなV字形を基本としながらも中段が存在し、東壁では南の上端が調査区外となっている。溝内にはP1～8の小穴があり、杭などが存在した可能性がある。段丘端部に沿って構築されていると想定され、集落の外縁に存在することから区画などを目的とした環濠と考えられる。

県町遺跡の年代 マンション建設地点の調査ではA-2SB4出土の柱材4点について放射性炭素年代測定 (AMS法) が行われ、紀元前2世紀から1世紀との結果を得ている。本調査でもSB2～4について、炭化材の年代測定 (AMS法) を実施した (第四章)。家屋部材と推測される3点については紀元前3世紀から1世紀で、SB4出土の壺に納められていたアワはBC46からAD59という結果でかなりの年代幅がみられる。本地点の家屋部材が最外年輪部が残存していない資料であるため、測定結果に誤差が生じている可能性を考え、アワの測定結果を住居跡から出土した弥生土器の年代に即したものと評価した。

両地点出土の土器に関して考古学的な時期差を検討すると、本地点の住居跡から出土した土器は弥生時代中期最終末、栗林3式に属すると考えられる。マンション建設地点A-2SB4は、壺はラッパ状に開くものと縦く内湾して立ち上がる口縁形態が存在し、頸部が横位沈線文と山形文の組合せで装飾され、擬似籐文ともみられるなど本地点と共通している。一方で最大径が胴部中位～下位にある点や最大径のくの字の屈曲がやや弱いこと、

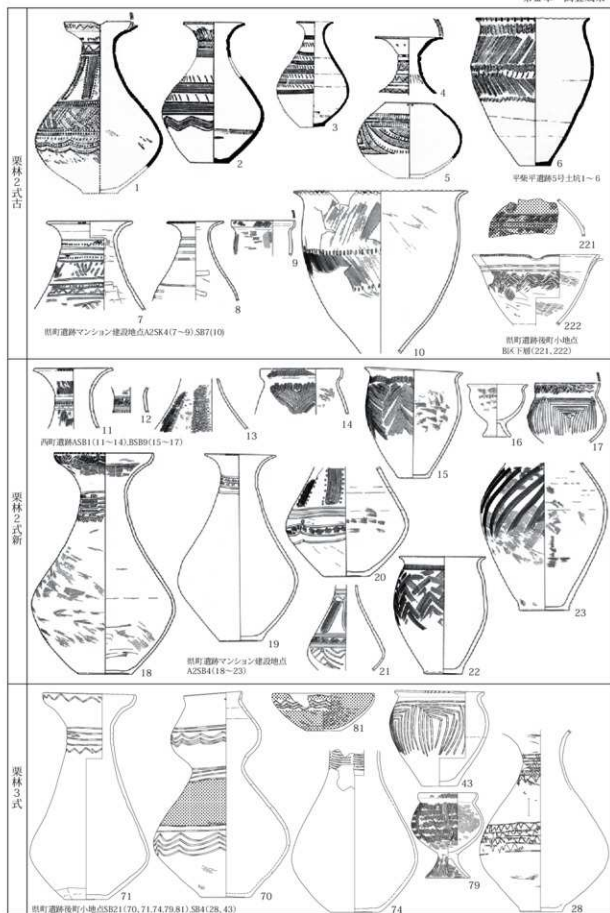
第12図20・21のように舌状垂下文を施し、2+4装飾帯が残されているのは、本地点より古手の要素で、本地点よりも若干古いと判断する。甕は概ね同じ要素で構成されるが、頸部瘤状文を主体としつつ、波状文も未だ残されている。以上から、マンション建設地点A-2SB4は本地点出土の土器群より古い2式新段階と解釈する。マンション建設地点A-2SK4とA-2SB7は3装飾帯に刺突を用いた多段の横帯装飾がみられ（第12図7）、甕の胴部最大径に列点文施文（同図10）、縦方向の直線文による区画（同図9）があり、2式古段階に位置付けられる。本地点B区下層検出面出土の壺（221）は文様構成が平柴平遺跡5号土坑出土の壺（第12図1）や県松原S B1135-1029（第10図30）に類似し、鉢（222）はやや内湾して立ち上がり口縁が外反する器形が3式段階ではほとんどみられず、類例としては檀田遺跡の堅穴住居跡75①S A 1-766が近い。766は共伴遺物の時期から栗林1式から2式古段階と考えられ、本地点の鉢も、221とともに2式古段階と捉えたい。

瀬花川河岸段丘上には弥生時代中期の遺跡として西町遺跡・平柴平遺跡が存在する。県町遺跡出土土器の検討を踏まえ、これらの資料を2013年シンポ編年（第10図）に沿って第12図に示した。栗林2式古段階の平柴平5号土坑出土資料（1～6）は壺の最大径が中位にあり、細頸で、3装飾帯への無文貫入があり（2）、2+4装飾帯構成のもの（3）が出現している。6は甕で胴部に横位羽状文を施し、短斜線を胴中位に持つ。2式新段階では、西町遺跡A S B 1（11～14）・B S B 9（15～17）は、壺はすべて口縁から頸部の資料であるため最大径の特徴を捉えることはできないが、2+4装飾帯が未だ残り、2装飾帯への横帯施文が認められる。口縁形態で屈曲した後直立する形態が見受けられないことから、比較的新しい段階と解釈している。甕の最大径は口縁と胴部にある段階で、胴中位の列点文も存在する。羽状文は縦羽状文があるが、密に施文されている。波状文の振幅はまだ小さく、この段階から明確に伴うとされるコの字重ね文もみられる。

3式には本地点の弥生時代中期の住居跡すべてが属する。文様の崩れ・簡略化・無文化が進んだ段階で、器形の特徴は壺の受口状口縁の屈曲が前段階より一層緩くなり、最大径が胴下位に集中し、「くの字」状を呈するものも増加し、頸部がより太くなる傾向が強い。文様は5装飾帯の横帯化が激しく、装飾帯からの縄文の欠落は本地点ではほとんどの壺にみられ、次の古田式に受け継がれるとされる頸部擬似瘤状文もみられる（74）。逆にマンション建設地点では本地点より古相を示す。なお本地点の甕は口唇部に縄文を施文する資料がやや多いという特徴がある。

本地点の弥生中期の住居形態 弥生時代の住居形態及び構造については松原遺跡県高速道地点の報文において分類がなされ、概略的な変遷について述べられている（賛田2000b）。賛田氏は、弥生時代の住居の平面形態について、円形・隅丸方形・楕円形・隅丸長方形に分類され、さらに隅丸方形・楕円形については定型化形をA、不整形をBと細分化している。松原遺跡での平面形態は各期において多様な形態を保持しながらも、円形・隅丸方形から隅丸長方形へという変化を見出すことができるとされ、楕円形はその中間的な位置付けをされている。また住居構造については、中期後半では主柱穴4本で方形・長方形の対称構造をなすものと、隅丸方形・円形では、対称構造の他に多角形の非対称構造が想定され、後期では古田式期に主柱穴が4・6基構成に、さらに箱清水式期では6基以上の構成を主体とすることが指摘されている。

松原遺跡県高速道地点における成果に依拠すると、本地点の弥生中期の住居跡は楕円形と推定され、主柱穴も4基を基準としている。炉跡について、中期後半に主柱穴内中央に位置し、住居奥の柱穴間に移動することがいわれるが、本地点で検出された炉跡は未だ中央にある。住居跡の形態・構造においては中期後半の様相を示していると考えられる。



第12図 照町遺跡・周辺遺跡の弥生土器 (S=1/8)

第3節 古代の遺構と遺物

古代の遺構はB区に集中して検出された。B区においては、調査区中央が既設建物による攪乱が深く、本来存在したはずの検出面が調査区の2/3程度削平されていた。このため、攪乱を受けずに遺構が検出された高さが本来の検出面と考えられる。SB8上層断面図(図版20)において、8層上面が、攪乱の下に検出した上層及び北棟立会検出面、12層下面が下層検出面に相当し、7層上面が、実際にSB5やST1P9・47の掘り込まれた本来の検出面であることが確認された。下層検出面ではSB16・17、B P10・28などが検出された。

掘立柱建物跡については、上層で確認できた柱穴と下層まで発見できなかったものがあるが、ST1は調査区東壁で上層検出面の遺構であると確認でき、ST2はSB17と切り合い関係にあり、古墳時代後期以降に構築されたと判断した。そしてST1・2は出土遺物の年代から平安期の集落より古いとみられる。遺構図においては、本来の検出面である上層を遺構上端として断面図を作成し、下層で検出した柱穴は上層検出面高までを推定して破線で示した。A区で検出したST4・SD2は覆土の相似性と主軸が同方位であることによりST1・2と同時代の遺構と想定される。

B区上層検出面では縄文時代とみられる打製石斧(250)が、SB10床面ではメノウ製勾玉(271)が出土しているが、混入と推測している。下層検出面では弥生時代中期後半の栗林2式古段階の遺物(221・222)が出土している。

SB5 主軸長3.0m、短軸長3.76m、深さ約34cmの方形で主軸方位はN42°Wである。東南壁が斜向するのは、下層にSK13が重複していたことで遺構確認の錯誤をしたことによる。カマドのある主軸が短いタイプの住居で、カマドは北西壁中央に配され、カマド袖や内部で礎が検出されたため、石芯カマドとみられる。遺物は須恵器杯類を主体とし、黒色土器(103)・土師器杯(104)、須恵器貯蔵具と土師器甕(108・109)が出土した。

SB6 主軸長4.14m、短軸長3.09m、深さ約45cmの方形で主軸方位はN45°Wである。重複するST1が先行する。カマドは北西壁中央に設けられ、壁外に延びた煙道と火床面には被熱痕が検出された。P3・16は主柱穴と考えられるが、他に主柱穴は検出されなかった。床面に金属製品(274)や鉄滓(281)、砥石(256)、須恵器杯、土師器砲弾型甕(121)、武蔵型甕(123)が出土した。

SB7 主軸長2.86m、短軸長3.88m、深さ約40cmの方形で主軸方位はN27.6°Wである。南にあるSB16を切って構築されている。南西壁には床面からの高さ約8cmで幅34cmほどの棚状部分が検出された。カマド袖部には礎があり石芯カマドとみられる。カマド右脇には長さ40cmと32cmの礎により区画された空間があり、内部は若干の落込みが確認され、須恵器杯4点(128・129・131・136)が出土している。また区画の礎と壁の間には土師器の小甕(142)が配置されていた。床面に主柱穴は確認されず、建物構造は不明である。

SB8 B区南壁中央付近で、上層検出面のさらに上層に調査区壁面にカマドが検出されたが、調査区外ということで拡張せず、翌年の立会調査において遺構全体を調査することができた。立会調査は狭小な調査区で、前年度に確認したカマドの位置も不明確であったため、当初2軒の住居が存在すると想定してSB8・22としていたが、最終的にはSB8のみと判断した。攪乱によって約1/3は消失し、検出できたのは主に遺構の南西部であった。主軸方位はN28.8°W、主軸長は3.6m、残存する短軸長は3.08m、深さ約24cmである。カマドはB区南壁と遺構内火床面の位置から住居北壁に設置されていたと想定される。この他に住居西壁付近に2ヶ所の火床面を確認した。西壁際で須恵器杯(223)の中に鉄滓(282)が入った状態で出土し、覆土中からは鉄鉢形の須恵器鉢(226)などが出土した。

SB9・18 SB9の主軸長は5.4m、短軸長4.98m、深さ約30cmの方形で、主軸方位はN 42.4°Wである。上層検出面でSB9が検出され、カマド袖基部高を基準として掘削したところ、壁際では床面を確認できたが、住居中央などに灰色粘土が被覆し床面を検出できなかった。下層検出面で、SB9と入れ子状になるSB18が確認され、SB9壁際に廻らされた10基の柱穴も下層検出面ですべてを検出することができた。主柱穴は4本すべてが柱筋を挿入、壁柱穴も対称に配置されていた。主柱穴4本と壁柱の配置に計画性があり、本調査の古代住居の中ではSB13とともに規模が大きい。調査の過程ではSB18を拡張してSB9を構築したと解釈していたが、構造の堅牢さを考慮すると、SB18がSB9の床下構造である可能性も想起される。カマドは煙道まで検出され、袖部に礫が並ぶ石芯カマドである。カマドから南方向に長さ約90cmの灰の広がりが視認された。カマド内には遺物が多く遺存していたが、そのほかは住居内に分散して出土し、南壁付近では下層で須恵器椀検 (157) が出土している。遺物は底部糸切の須恵器杯を主体とし、黒色土器杯を少量伴う。土師器壺は砲弾型と武蔵型が出土した。

SB10 主軸長5.04m、短軸長4.2m、深さ約42cmの方形で、主軸方位はN 33.9°Wである。上層検出面で確認されたが、東部を攪乱により削平されていた。カマド内には礫が残され、石芯カマドと想定される。主柱穴はP1・2の2基しか確認されなかった。住居北西部床面においてメノウ製勾玉 (271) が出土したが、遺構とは直接的な関連はない。遺物はカマド内及び周辺に集中し、須恵器蓋・杯、土師器杯・砲弾型壺 (176) が出土した。カマド内から出土した178はバケツ形で、輪積痕やハケ整形の痕跡が顕著に残る甕であるが、管見の限り県内では類例がない。このような形状・成整形の土器の事例は北陸・東海地方に点在する古代の製塩遺跡に類例を求めることができる。また岐阜県・山梨県など内陸部での2次的製塩で使用された製塩土器にも類例があるため (新名2013、平野2017)、製塩土器の可能性もあるが、現段階では不明である。

SB11 長軸長4.92m、短軸長3.54m、深さ約36cmの方形で、長軸方位はN 57°Wであり、上層検出面で確認された。北部を攪乱されているが、他の住居跡と同様にカマドの位置は北西壁と推測され、SK10がカマド火床面、SK11がカマド脇土坑の可能性があると不明である。須恵器杯蓋・杯・壺、土師器ハケ壺・ケズリ壺が出土した。

SB12 上層検出面で確認された遺構で、主軸長3.24m、短軸長4.95m、深さ約60cmの方形で、主軸方位はN 51.6°Wである。主軸が短く、横長なプランである。西壁上は攪乱を受け段差があるが、本来はカマド奥壁の高さが住居壁の高さであったと推測される。カマドは他の住居跡よりも壁外へ突出し、袖内に土師器壺片 (187) を正位に立てて埋め込んでいる。この壺はハケ壺で古代1・2期のものである。主柱穴は3基しか確認できなかった。遺物は須恵器杯・貯蔵具、土師器壺で、少量に留まる。

SB13 上層検出面で確認された遺構である。主軸長5.22m、短軸長5.1m、深さ約36cmの方形で、主軸方位はN 33.1°Wで、SB9とともに規模は大きい。カマドでは大形の礫が出土していないため、土製カマドの可能性が高い。土層断面ではカマド奥壁から煙道が上方に立ち上がる痕跡が観察された。住居北隅のSK9は当初下層の単独遺構としていたが、住居床面で視認されていたため住居付属の遺構とした。主柱穴はP1～3・13だが、P6・7・5・11・SK9も位置的には住居構造と関係する柱穴の可能性が高い。須恵器杯蓋・杯、黒色土器杯、土師器ハケ壺、砥石 (257・258) が出土した。

SB14 上層検出面で確認された遺構である。主軸長3.6m、短軸長3.39m、深さ約24cmの方形で、主軸方位はN 69.5°Eである。主軸は火床面が検出された遺構東壁を基準としている。浅くて平面形も歪みを持ち、火床面と想定した位置もSB19以外にはカマドが設置される方位ではない。遺物は極めて少なく土師器小壺 (199) を図示した。

S B 15 主軸長2.76m、短軸長3.52m、深さ約5cmの方形で、主軸方位はN 65.1°Wである。下層検出面で確認したが、極めて浅いことから上層検出面の遺構と考えられる。プランはS B 7・12・19と相似した横長タイプで、P 2は主柱穴の可能性ある。遺物は極めて少なく小片で、須恵器杯(200)・甕(201)を掲載した。

S B 16 下層検出面の遺構である。主軸長3.58m、短軸長3.64m、深さ約16cmのほぼ正方形で、主軸方位はN 52°Wである。住居北西壁は、重複するS B 7によりほとんど残存していないが、壁中央に火床面と思われる被熱痕が検出された。北隅壁際には周溝が認められ、南東壁にも部分的に見られる。出土遺物には比較的古いケズリ調整壺(203・205)があり、S B 7よりも時期が遡ることがわかる。

S B 17 下層検出面の遺構である。長軸長4.56m、短軸長4.48m、深さ約44cmの方形と想定され、主軸方位はN 52.8°Wである。遺構北部、面積約1/3は調査区外となっているため、カマドの有無は不明である。住居廃絶後、S T 2が重複して構築されている。床面から出土した206は須恵器の無蓋高杯と想定したが、他の器種である可能性もあり不明である。

S B 19 立会区で検出された。主軸長4.26m、短軸長3.64m、深さ約64cmで、主軸方位はN 69.5°Eである。主柱穴はS K 3・P 1～3が該当すると思われるが、その組合せは不明である。カマドは住居北東壁に設置され、S B 14と同じ方位となる。しかし本住居には北西壁際床面に被熱痕が観察され、カマドが設置されていた痕跡と看做せる。プランに建て替えや拡張などの変更痕跡は見出せず、カマドの付け替えのみを行ったと推測される。従って北西カマド段階では横長プランで共通する住居も多いが、北東に付け替えた段階では、ほかにS B 14のみとなる。カマドは右脇に土坑(S K 1・2)を伴い、S K 1底面出土(234・235)、住居覆土出土(233)、S K 2出土(236)の須恵器杯はいずれも内面に極めて薄い暗灰色の変色が観察された。灯明皿としての使用が想定される。

S T 1 5×2間の母屋に1間の北東廂が付属する。主軸方位はN 51.5°Wで、古代住居跡とはほぼ同じである。重複するS D 5が先行し、S T 1廃絶後にS B 6が構築されると推測される。柱穴の平面規模は直径56～80cmで、S B 6に削平されている柱穴の径は約48cmになる。柱間間隔は心々で約2mである。P 5・34から須恵器杯・黒色土器杯が出土した。

S T 2 検出したのは2×2間で、主軸方位はN 51.5°W、北西—南東の桁行は調査区外、梁行も調査区外に延びる可能性がある。S D 5が先行すると推測され、重複するS B 17が古い。柱穴の平面規模は直径40～72cmで、深さは48～64cmである。柱間間隔は心々で1.44～3mとばらつきがみられた。P 7から黒色土器杯(211)が出土し、底部外面に「厨」の墨書が観察された。

S T 3 検出したのは桁行3間で約2.08mの間隔で2列平行して検出している。梁行は1間と推測される。柱穴の直径は20～32cm程度で、深さは12～44cmである。柱間間隔は心々で2.8mと3.2mに分かれた。主軸方位はN 62.7°Wで、S T 1・2とは異なる方位で柱穴規模も小さいため、時期が異なるものと考えられる。

S T 4 A区で検出された遺構である。主軸方位はN 44.4°W、検出したのは2×1間で、他は調査区外となるため不明である。柱間は桁行で心々約1.8m、梁行で約2.1mである。官衙や居宅などでは梁行2間以上がほとんどであり、その点からも総柱建物の可能性がある。柱穴の平面規模は直径0.84～1.32mと大きく、深さは最大で48cmとなる。

S D 2 A区で検出された遺構である。方位はN 41.4°Eで、幅約98cm、深さ約55cmで断面逆台形をしている。覆土はしまりの強い青灰色粘土をしており、土質としてはS T 4の覆土に類似する。

S D 5 下層で検出された遺構である。方位はN 59.1°Wで、幅約88cm、深さ約26cmで断面は底面が傾斜した逆台形を呈する。S T 1 P 9に先行する遺構である。出土遺物がなく、時期は不明である。

SD6 下層で検出された遺構である。方位はN 47.5°Wで、検出した長さ3.68m、幅54~78cm、深さ約4cmと浅く、南端に直径42cmで、深さ約5cmの小穴を有する。

SD7 下層で検出された遺構である。方位はN 67.5°Wで、長さ4.84m、幅約22cm、深さ約3cmの細く浅い溝で時期は不明である。

SK8・BP10 下層検出面で検出されたが、上層に擾乱があったため確認できなかったことによるもので本来は上層の遺構であったと考えられる。内部は炭化物・焼土が多く含まれ、底面には被熱痕が観察されたため住居カマドと考え、隣接するSK8もその住居の一部と判断した。土師器砲弾型甕(212)・鍋(213)・小甕(214)が出土した。

BP28 下層で検出した遺構で、SB9カマド脇壁際に位置する。当初SB9の柱穴と考えたが、SB9ですべての壁柱穴が対称の位置にある中で不要のもので、規模も他と比較して大きかったため、単独小穴とした。長軸約68cm、短軸約32cm、深さ約20cmで、南側が径約20cm、深さ約32cmの小穴になる。炭化物・焼土が多く検出された。遺物は須恵器杯(215・216)、武蔵型甕(217)が出土した。

検出面 上層では須恵器壺蓋(218)・壺(220)、黒色土器鉢(219)を掲載した。下層では調査区西壁で出土した弥生土器の壺(221)、その付近で下層検出面より約30cm下で弥生土器の鉢(222)が出土した。出土地点であるB区の北西部は、第7図の基本層序7に位置していることから、次第に低くなる地形で砂質土を主体としている。おそらくは流路や湿地などの低地が存在したと推定される。

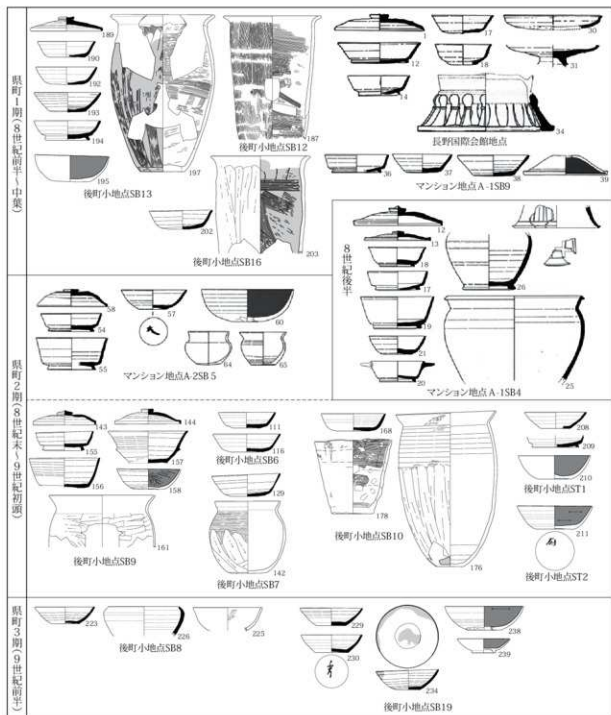
遺構の変遷 本地点の古代の遺構で最も古いのは古墳時代後期とみられるSB17である。その後は概ね3期に区分される(第13図)。1期は須恵器底部切離しがヘラ切で、ケズリやハケ調整の甕の段階で、SB11~13・16、SK13、である。屋代編年古代2期、8世紀前半を中心とする時期と想定する。2期は屋代編年古代5期を中心とした時期で、8世紀末~9世紀初頭にあたる。須恵器底部切離しが回転糸切のみになり、土師器甕が砲弾型や武蔵型になる段階で、SB5~7・9・10・14・15、ST1・2、BP10・18である。3期は屋代編年6期に対

長さ(cm)

遺構名	調査区	長さ	幅	深さ	平面形	断面形	備考
SD3	A	7400	340	118	調査区外へ続く	縦傾斜・弧状	南西端南東へ屈曲、弥生後期
SD4	A	4800	400	61	北東端消失	縦傾斜・弧状	DSD31に接続か、弥生後期
SK7	A	1160	920	3~4	不整形	浅い	弥生壺小片
SK13	B	5380	5270	1~2	不整形	浅い	SHSの床下か
SX1	立倉	2000	400	100	L字形	浅い箱状	擾乱で全体不明
AP1	A	460	340	5.5	楕円形	弧状	土師器小片
AP2	A	240		15.9	円形	半円状	土師器小片
AP4	A	320	230	17.0	楕円形	半円状	
AP5	A	260		36.5	円形	U字状	
AP6	A	180		14.9	円形	半円状	
AP7	A	300	200	17.7	楕円形	半円状	
AP8	A	180		13.7	円形	半円状	
AP9	A	300	200	17.7	楕円形	半円状	
AP10	A	230		23.2	円形	半円状	
AP11	A	260	180	14.1	楕円形	半円状	
AP12	A	330	260	19.4	楕円形	半円状	
AP13	A	280		7.2	円形	浅い	
AP14	A	220		13.3	円形	半円状	
AP15	A	320	240	6.8	楕円形	浅い	
AP16	A	280	200	9.8	楕円形	浅い	
AP17	A	420		6.9	円形	浅い	
AP18	A	360		8.2	円形	浅い	
BP6	B	600		19.3	円形	台形状	土師器小片
BP14	B	500		7.7	円形	浅い	須恵器・土師器小片
BP15	B	1000	900	7.5	L字形	浅い	須恵器・土師器小片
BP21	B	800	520	20.0	楕円形	半円状	
BP45	B	600		20.8	方形	階段状	SD5と重複、古代か
BP54	B	244		23.4	円形	U字状	

第2表 記載外遺構計測表

応し9世紀前半である。立会区のSB8・19で、前期の須恵器と比較して、杯が薄手で内湾して立ち上る器形に変化している。ST4は遺物が出土せず時期が不明だが、ST1・2と同時期とすれば2期の遺構となる。



長野国際会館地点(笹澤1982)

マンション建設地点(長野市教委2017)

第13図 県町遺跡奈良・平安時代の様相 (S=1/8、各文献の報告番号を使用)

第4節 その他の遺物

石器 縄文時代前期か中後期、弥生時代中期の石器を8点、時期不明のもの1点を掲載した。石鏃は打製石鏃(246・247)、磨製石鏃(248)が出土した。打製石鏃は有茎で茎や先端など欠損しているが、246は残存長2.65cmと大型の石鏃である。248は欠損部中心に孔があったと推測され、無茎有孔の信濃特有の磨製石鏃とみられる。石材は、磨製石鏃では副次的石材とされるチャートで、長野盆地では石川条里遺跡など限定的にしか出土していない(長野県理文1999)。打製石斧(250)は石材が頁岩で、縄文前期か中後期のものとみられ、側面を刃潰していない、比較的薄手の石斧である。先端には使用痕跡が確認された。薄手の石斧は周辺では旭町遺跡で出土した打製石斧に見出すことができる。大型蛤刃石斧は4点で、251・252がS B 3から、253・254がS B 4から出土している。石材は輝緑岩である。長さによって分類すると、254は約25cmと推測される特大のもので、日常的に石斧として使用されるのではなく、儀器としての性格が考えられる。251は約20cmと推測され、大型に分類され、252・253は小型である。すべて欠損していて、ベンガラが付着しているのが観察された。251・253は磨痕・敲打痕が観察され、252・254も破片であることから、これらは2次利用のために住居に持ち込まれたものであろう。249は黒曜石でノッチドスクレイパーの可能性はあるが、風化が激しく剥離してから長時間経過しているものである。出土したのは平安時代の住居であるS B 10で、他にメノウ製勾玉(271)が出土している遺構であることから、混入と考えられる。メノウ製勾玉と碧玉製管玉(272)は石材から弥生時代のもので推測されるが、不明である。その他、S B 3・4・7・9・21の床面から円礫(261~270)が出土した。地山は円礫があまり含まれない土質であるため、住居への搬入の可能性を考え掲載した。使用痕跡は磨痕・敲打痕が観察されるものがあり、磨石・敲石(264~266)や台石(270)としたものもある。

金属製品 古代の住居跡では大小の砥石や鉄滓、金属製品が出土した。金属製品は長野県立歴史館においてX線撮影を行ったが、器種の特定には至らなかった。その他寛永通寶2点(284・285)、明治時代の半銭銅貨1点(286)が出土した。

出土文字資料 本調査で最も注目すべきは、「厨」墨書土器(211)であろう。S T 2 P 7から出土したもので、黒色土器杯底部外面、やや外縁寄りに墨書されている。運筆には書き慣れている様子が窺え、日常的に文字を書く人物によるものと考えられる。「厨」は、古代において官衙や寺院などの給食施設あるいは組織という意味で使用され、「厨」墨書土器もその施設と関連のある遺跡での出土が目立つ。今回は掘立柱建物跡の柱穴からの出土で、1点のみであるため積極的な評価は難しいが、県町遺跡全体で捉えれば、官衙的性格の一要素といえる。

このほかS B 19では須恵器杯(230)底部外面に2文字墨書され、「千万」と釈読できる。寛書ではS B 5出土須恵器高台付杯(102)、S B 7 P 17出土須恵器杯(133)に、底部外面に焼成前に2本の線が刻まれる。S B 15から出土した須恵器杯(200)底部内面には薄く線刻が観察され、「×」と焼成後に刻まれている。

第四章 自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

県町遺跡（長野県長野市大字南長野西後町地内）は、現在の裾花川の左岸、裾花川が形成した扇状地上に立地する。なお、周辺の地形分類図（中村ほか、1974）によれば、扇状地扇頂付近には数段の段丘の存在が指摘されており、本遺跡は旧扇状地面に相当する段丘面上に立地する。県町遺跡では、これまでの発掘調査により古墳～平安時代の集落であることが明らかとされていたが、平成27年度の発掘調査の結果、弥生時代中期および後期の竪穴住居跡、奈良～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡などが確認されている。

本分析では、上記した平成27年度の発掘調査で確認された弥生時代中期とされる竪穴住居跡の年代、竪穴住居跡内より出土した炭化材、炭化種実および骨片などの種類などに関わる資料の作成を目的として、自然科学分析を実施した。

I 放射性炭素年代測定

1. 試料

放射性炭素年代測定対象とされた試料は、A区より検出された弥生時代中期とされる竪穴住居跡3基より出土した炭化材3点（試料No2：A区S B 2 No2、試料No3：A区S B 3 No1、試料No6：A区S B 4 No2）と、A区S B 4の炭化材上から出土した小型壺内に認められた炭化種実（試料No7）である（図版1-2、3、6、図版2-8、9）。

炭化材試料は、いずれも竪穴住居跡の覆土下層から出土しており、担当者により採取されている。測定には、試料の状態や木取りの観察を行った後、残存する最外年輪部より採取した数年輪分を供している。また、炭化種実試料は、後述する種実同定結果および担当者との協議・確認に基づき、炭化種実群の主体を占める栽培種のアワ（アワ類・胚乳主体粒径2-1mm：0.11g）を測定に供している。

2. 分析方法

測定試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。次に、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勘

告に従う(Stuiver and Polach, 1977)。なお、本報告では、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算に対応できるよう、1年単位の値も記した。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。本報告では、暦年較正には、OxCal4.2較正プログラム(Bronk&Lee, 2013)を用い、較正曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)を用いている。また、暦年較正結果は $1\sigma \cdot 2\sigma$ (1σ は統計的に真の値が98.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。

3. 結果および考察

各試料の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、A区S B 2の炭化材(試料No 2: 覆土下層No 2)が $2,110 \pm 30$ BP、A区S B 3の炭化材(試料No 3: 覆土下層No 1)が $2,240 \pm 30$ BP、A区S B 4の炭化材(試料No 6: 覆土下層No 2)が $2,160 \pm 30$ BP、A区S B 4の小型壺内の炭化種実(試料No 7: アワ類・胚乳)が $2,000 \pm 20$ BPを示す(表1)。また、暦年較正結果(2σ)は、A区S B 2の炭化材(試料No 2)がcalBC 203-calBC 51、A区S B 3の炭化材(試料No 3)がcalBC 391-calBC 206、A区S B 4の炭化材(試料No 6)がcalBC 358-calBC 108、A区S B 4の小型壺内炭化種実がcalBC 46-calAD 59である(表1、図1)。

今回の放射性炭素年代測定の対象とされた竪穴住居跡は、出土遺物などの状況から弥生時代中期後半と推定されている。本地域の弥生時代中期後半の土器である栗林式については、近年では寺島(2013)や馬場(2015)などにより栗林式の編年や他地域との併行関係が示されている。これらを踏まえ、小林(2009)などを参考とすると、栗林式の暦年代については紀元前3世紀後半から紀元前後頃と想定される。今回の各竪穴住居跡より出土した炭化材や炭化種実の暦年較正年代(2σ)についてみると、A区S B 3、S B 4の炭化材試料はやや古い暦年代範囲が含まれ、炭化種実試料は4試料中では最も新しく紀元前後頃の暦年代範囲を示す。試料間では年代のばらつきが大きいものの、概ね調査所見を支持する結果と言える。なお、測定に供した試料のうち、炭化材はいずれも本来の最外年輪部が残存しなかったことから、得られた年代については古木効果の影響も考慮する必要がある。

II 樹種同定

1. 試料

試料は、A区S B 2、S B 3およびS B 4から出土した炭化材6点(試料No 1~6)である。試料の詳細は、結果とともに表2に示したので、参照されたい。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995-1999)を参考にする。

3. 結果

同定結果を表2に示す。炭化材は、広葉樹3分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、エノキ属)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*) プナ科

表1. 放射性炭素年代測定および暦年校正結果

試料	補正年代 (BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年校正用) (BP)	暦年校正結果		測定機関 CodeNo.
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
試料No 2 A区SB2 覆土下層 炭化材 (No 2)	2,110 \pm 30	-27.09 \pm 0.49	2,114 \pm 27	184BC (68.2%) 97BC	203BC (95.4%) 51BC	IAAA-153459
試料No 3 A区SB3 覆土下層 炭化材 (No 1)	2,240 \pm 30	-22.42 \pm 0.67	2,242 \pm 27	378BC (18.9%) 354BC 291BC (49.3%) 232BC	391BC (25.9%) 346BC 321BC (69.5%) 206BC	IAAA-153460
試料No 6 A区SB4 覆土下層 炭化材 (No 2)	2,160 \pm 30	-25.32 \pm 0.69	2,159 \pm 28	351BC (33.6%) 302BC 210BC (34.6%) 168BC	358BC (40.0%) 281BC 258BC (1.4%) 245BC 236BC (54.0%) 108BC	IAAA-153461
試料No 7 A区SB4 炭化材上部 小型壺内炭化種実 (アワ 類・胚乳)	2,000 \pm 20	-9.25 \pm 0.55	1,996 \pm 23	38BC (28.9%) 9BC 3BC (35.2%) 26AD 43AD (4.1%) 47AD	46BC (95.4%) 59AD	IAAA-160535

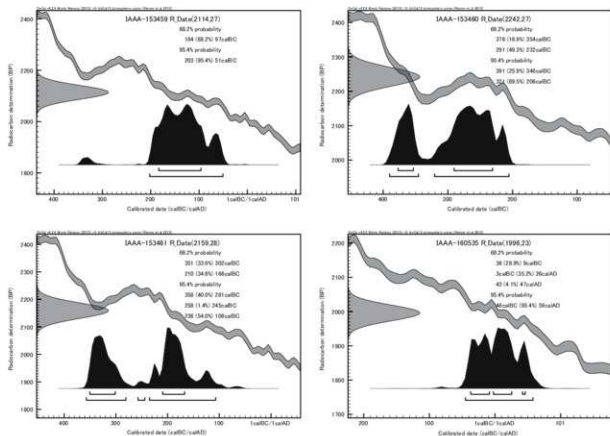


図1. 暦年校正結果

表2. 樹種同定結果

試料No	調査区 遺構名	出土状況	取上げ No	形状	種類 (分類群)	備考
1	A区SB2	覆土下層	No1	楕円板状	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
2	A区SB2	覆土下層	No2	楕円板状	エノキ属	*
3	A区SB3	覆土下層	No1	板状板状	エノキ属	*
4	A区SB3	覆土下層	No2	楕円板状	エノキ属	
5	A区SB4	覆土下層	No1	楕円板状	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
6	A区SB4	覆土下層	No2	楕円板状	エノキ属	*

*放射性炭素年代測定試料

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ垂属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Primus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

4. 考察

A区SB2、SB3およびSB4から出土した炭化材は、試料の観察ではいずれも分割材状(板目板状あるいは板目板状)を呈する。これらの炭化材には、広葉樹のクスギ節、コナラ節およびエノキ属の3種類が確認された。

確認された分類群のうち、クスギ節は二次林や河畔等に生育する落葉高木であり、コナラ節は二次林や山地に生育する落葉高木、エノキ属は河畔等に生育する落葉高木である。また、これらの分類群の木材の材質についてみると、クスギ節とコナラ節は重硬で強度が高く、エノキ属はやや重硬な部類に入るとされる。

遺構別の樹種構成は、A区SB2がクスギ節とエノキ属、A区SB3がエノキ属、A区SB4がコナラ節とエノキ属からなり、各堅穴住居跡においてエノキ属が共通して確認されるという傾向が指摘できる。この結果から、エノキ属を主体として、クスギ節やコナラ節が伴うという木材利用が想定され、遺跡周辺より入手可能な重硬な木材を選択的に利用した可能性なども考えられる。

Ⅲ 炭化種実同定

1. 試料

試料は、A区SB4炭化材上部から出土した小型壺(図版2-7)内部より検出された炭化種実(試料No7)である。なお、試料は、遺物整理の際に採取された炭化種実(図版2-8)と、本分析を実施するにあたり小型壺内より抽出した炭化種実(図版2-9)からなり、(乾燥)重量は15.4gを量る。

2. 分析方法

試料は、ほぼ単一の分類群・部位(アワの穎・胚乳)から構成され、複数個が合着し塊状を為す炭化物(以下、塊状炭化物)も確認された。そのため、以下の方法により分析を実施した。

試料を肉眼で観察し、主に径1cm以上の塊状炭化物を抽出する。双眼実体顕微鏡およびマイクロスコープ(KEYENCE, VHX-1000)を用いて、塊状炭化物の表面を非破壊で観察する。塊状炭化物抽出後の試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、保存状態が良好なアワを200個抽出する。次に、アワ200個抽出後の試料を2mm、1mmの篩を通し、アワ以外の種実および主に2mm以上の炭化材、植物片、土粒等を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や椿坂(1993)、石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施する。さらに、分類群や部位、状態、粒径別の個数や重量などを計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、炭化種実を分類群別に容器に入れて保管する。

3. 結果

同定結果を表3に示す。A区SB4炭化材上部から出土した小型壺内部より検出された炭化種実試料（試料№7）からは、被子植物3分類群（栽培種のヒエ、アワ、ゼニアオイ属）が確認された。

炭化種実群は、アワの穎・胚乳主体の組成を示し、アワの穎・胚乳（主体含む）が14.7g、アワとゼニアオイ属が複数合着する塊状炭化物が13個（0.02g）確認され、全体の95%を占める。アワ以外では、栽培種のヒエの穎・胚乳が1個（0.001g未満）、ゼニアオイ属の果実・種子が97個（0.07g）確認されたほか、不明種実が1個（0.001g未満）、炭化材が16個（0.003g）、および土粒主体（アワ包含）（3個：0.06g）、土粒・植物片主体（0.6g）の残渣からなる。

炭化種実の保存状態は良好である。各分類群の写真を図版5、6に示して同定根拠とし、以下に形態的特徴等を述べる。

・ヒエ (*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科イヌビエ属

穎（果）・胚乳は炭化しており黒色、長さ2.5mm、幅・厚さ1.7mmのアワよりも大型で細長い半扁卵体を呈する。腹面（内穎）は平らで背面（外穎）は丸みがある。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様がある。穎果内に1個入る胚乳は、背面基部正中線上に胚乳長の2/3程度を占める浅い馬蹄形の胚の窪みがあり、腹面にも径0.5~0.8mm程度の扇形で基部がやや尖る浅い窪みがある。胚乳表面は粗面である。

・アワ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

穎（果）・胚乳は炭化しており黒色を呈し、100個の重量は0.05gを量る。穎果は径1.5~1.9mmの半扁球体で、腹面（内穎）は平らで背面（外穎）は丸みがあり、基部に果実序柄（小穂軸）が残る個体もみられる（図版6：8-10）。果皮は薄く、表面には特有の微細な孔頭状突起が横列する。穎果内に1個入る胚乳は、背面基部正中線上に、胚乳長の2/3程度を占める深い馬蹄形の胚の凹みがあり、腹面には長径0.5mm程度の浅い広倒卵形の窪みがある。胚乳表面はやや平滑である。

表3. 炭化種実同定結果

分類群・部位	状態・粒径	試料№7			図版 番号	備考
		A区SB4炭化材上				
		数量 (個)	重量 (g)	割合 (%)		
炭化種実						
ヒエ	穎・胚乳	1	<0.001	0.0%	16	長さ2.51mm, 幅1.67mm, 厚さ1.69mm
アワ	穎・胚乳 (果実残存)	5	<0.001	0.0%	8-10	
	穎・胚乳	100	0.05	0.3%	-	
アワ穎・胚乳主体		100	0.054	0.3%	-	
	複数塊状 (最大塊)	1	4.191	27.1%	1-6	45.23×28.78×23.19mm
	複数塊状 (>10mm)	6	4.783	31.0%	-	
	複数塊状 (10-4mm)	21	0.567	3.7%	-	
	複数塊状 (4-2mm)	-	0.893	5.8%	-	
	完形・破片 (2-1mm)	-	2.44	15.8%	7	放射性炭素年代測定 (0.11g)
	完形・破片 (<1mm)	-	1.684	10.9%	-	
アワ穎・胚乳/ゼニアオイ属	果実・種子	13	0.018	0.1%	11,12	両種合着
ゼニアオイ属	果実・種子	4	<0.001	0.0%	13	7個体分
不明種実		90	0.07	0.5%	14,15	
	破片	1	<0.001	0.0%	-	
炭化材	>2mm	16	0.003	0.0%	-	最大3.7mm
土粒主体 (アワ包含)	>2mm	3	0.059	0.4%	-	
土粒・植物片主体	>2mm	-	0.634	4.1%	-	
合計		-	15.446	100.0%		

*計測はデジタルノギスを使用

多量の穎・胚乳が着した塊状炭化物は、径4mm以上が28個(9.5g)確認され、最大の塊状炭化物(最大塊:図版5-1)の大きさは4.5cm×2.9cm×2.3cmを測り、重量は4.2gを量る。塊状炭化物表面のマイクロスコブによる観察では、穎・胚乳個々の向きは区々で、隣接する別個体の胚乳や穎果が着する状態が確認されるが、穎・胚乳以外の部位(葉・茎など)やアワ以外の種実、虫類等の混入物も確認されない。

・ゼニアオイ属(*Malva* sp.) アオイ科

果実(分果)・種子は炭化しており黒色を呈する。果実は径1.8mm、果実内に1個入る種子は径1.5mmの腎臓状円形で背面観は長方形、腹面は薄くなり、湾入部に脐がある。果皮は粗面で、表面には十数本の隆条が脐から背面まで放射線状に伸びる。種皮表面は粗面。

国内において古来より栽培されるゼニアオイ属は、ゼニアオイ(*M. sylvestris* L. var. *mauritiana* Boiss.)、フユアオイ(*M. verticillata* L.)と変種のおかノリ(var. *crispa* L.)がある(柴田, 1958; 本田, 1976; 堀田編, 1989; Krebs・大場, 1995など)。今回の出土果実・種子はゼニアオイに似るが、フユアオイとの比較検討を行っていないため、属レベルの同定にとどめている。

4. 考察

A区SB4の炭化材上部から出土した小型壺内部より検出された炭化種実群は、栽培種のアワの穎・胚乳が多量確認され、試料全体の95%を占めるという組成が明らかとなった。また、アワ以外の炭化種実では、栽培種のヒエの穎・胚乳やゼニアオイ属の果実・種子が確認された。

多量確認されたアワは、100個あたりの重量(0.05g)より換算すると、およそ3万個程度と推測される。アワは栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、胚乳が食用として利用される雑穀類である。なお、アワの塊状炭化物の表面観察では、多量の穎・胚乳が区々に合着する状態であり、果穂を示唆する規則的な配列や葉・茎等の混入は認められなかった。このことから、脱殻後の脱稃前の状態で保存(貯蔵)され、炭化したことが推定される。

この他に確認されたヒエは、胚乳が食用として利用される雑穀類である。また、ゼニアオイ属は、既存の文献等(柴田, 1958; 本田, 1976; 堀田編, 1989; Krebs・大場, 1995など)によれば、日本に野生種はなく、ヨーロッパ原産で観賞用に栽培されるゼニアオイ、中国原産で葉や芽が野菜として食用に、種子が「冬葵子(とうきし)」として利尿剤等の薬用に利用されるフユアオイおよび変種のおかノリがある。これらの渡来時期に関しては、ゼニアオイは「江戸時代」(本田, 1976; 堀田編, 1989)、「江戸時代にはすでに渡来していた」(Krebs・大場, 1995)、フユアオイは「江戸時代」(堀田編, 1989)、「徳川時代以前」(柴田編, 1957)、「平安時代に栽培されていた」(本田, 1976)とされ、とくにフユアオイの確実な渡来時期は不明である。

今回の試料は、小型壺内より多量のアワとともに炭化した状態で出土している点や、前述したアワの暦年較正年代を参考とすると、弥生時代まで遡る資料と推定される。ゼニアオイ属の遺跡からの出土例は極めて少ないものの、松原遺跡(長野市)の河川跡から出土した弥生時代中期の土器内部より多量検出された炭化種実にアオイ属(*Malva* sp.)の種子が確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2000)。アオイ属は今回のゼニアオイ属と同義であり、同じ弥生時代の資料と推定されることや、土器内より炭化した状態で出土するなどの共通点が注目される。今後、ゼニアオイ属の渡来時期や利用状況を明らかにするため、本遺跡や松原遺跡の出土種子の放射性炭素年代測定を含めた検討が期待される。

IV 骨同定

1. 試料

試料は、A区S B 4から出土した片口鉢内部より検出された骨片(試料No 8)である。分析に供された試料は、水洗および乾燥した状態にある(図版2-10)。

2. 分析方法

試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。

3. 結果および考察

検出された骨は、白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じるなどの焼骨の特徴が認められた。また、いずれも哺乳類と判断されるが、破片であることや種類の同定根拠となる特徴が確認できないことから、種類の特定には至らなかった。確認できた部位は四肢骨片5点(11.82g)のみであり、その他は部位不明(28.48g)である。

以上の結果から、弥生時代中期における哺乳類の利用が示唆され、用途等は不明であるが四肢骨片を含む焼骨が片口鉢内に残されたと推定される。また、焼骨片の出土量は僅かであることから哺乳類1体分には満たないと考えられ、今回確認された骨はその一部と想定される。

<引用文献>

馬場伸一郎, 2015, 小松集団と交流する信州栗林集団, フォーラム 小松発北陸新幹線ルートの弥生文化を探る, 小松市・小松市教育委員会, 25-38.

Bronk Ramsey, C., & Lee, S., 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal, Radiocarbon, 55, 720-730.

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.

本田正次, 1976, フユアオイ, 週刊朝日百科 世界の植物, 34, 朝日新聞社, 830-833.

堀田 満(代表)編, 1989, 世界有用植物事典, 平凡社, 1499p.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

Krebs Gerald・大場秀章, 1995, ゼニアオイ, 週刊朝日百科 植物の世界, 75, 朝日新聞社, 87-89.

小林謙一, 2009, 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編 縄文時代から弥生時代へ, 新弥生時代のはじまり, 第4巻, 雄山閣, 55-82.

中村三郎・小林 詢, 1974, 地形各論 長野 5万分の1, 土地分類基本調査簿(国土調査), 第157号, 経済企画庁, 1-22.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版), 東北大学出版会, 678p.

バリノ・サーヴェイ株式会社, 2000, 種実遺体, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 -長野市内 その3- 松原遺跡 弥生, 総論8 総論・自然科学分析, 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36, 日本道路公園・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター, 99.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869–1887.

柴田桂太編。1958。資源植物事典（増補改訂版）。株式会社北隆館。904p。

島地 謙・伊東隆夫。1982。図説木材組織。地球社。176p。

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文。2012。ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－。誠文堂新光社。272p。

Stuiver Minze and Polach A Henry. 1977. *Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data*.

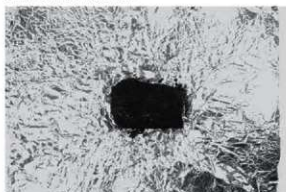
Radiocarbon, 19, 355–363.

寺高孝展。2013。栗林式土器の成立と展開－栗林式土器編年の再確認と栗林式土器文化成立から終焉まで－。一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会 研究発表資料 文化の十字路口 信州。日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会。285–290。

椿坂恭代。1993。アワ・ヒエ・キビの同定。吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」。261–281。

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編)。1998。広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト。伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）。海青社。122p。[Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

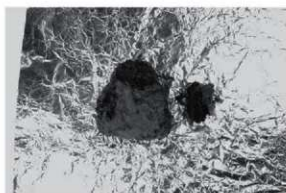
図版1 分析試料(炭化材)



1. 試料No.1 (A区SB2 覆土下層 ; No.1)



2. 試料No.2 (A区SB2 覆土下層 ; No.2)



3. 試料No.3 (A区SB3 覆土下層 ; No.1)



4. 試料No.4 (A区SB3 覆土下層 ; No.2)



5. 試料No.5 (A区SB4 覆土下層 ; No.1)



6. 試料No.6 (A区SB4 覆土下層 ; No.2)

5cm

図版1 分析試料(炭化材)

图版2 分析試料(炭化種実・骨片)



7. 試料No.7(AI区SB4 炭化材上; 小型壺)



8. 試料No.7(AI区SB4 炭化材上; 炭化種実①)



9. 試料No.7(AI区SB4 炭化材上; 炭化種実②)

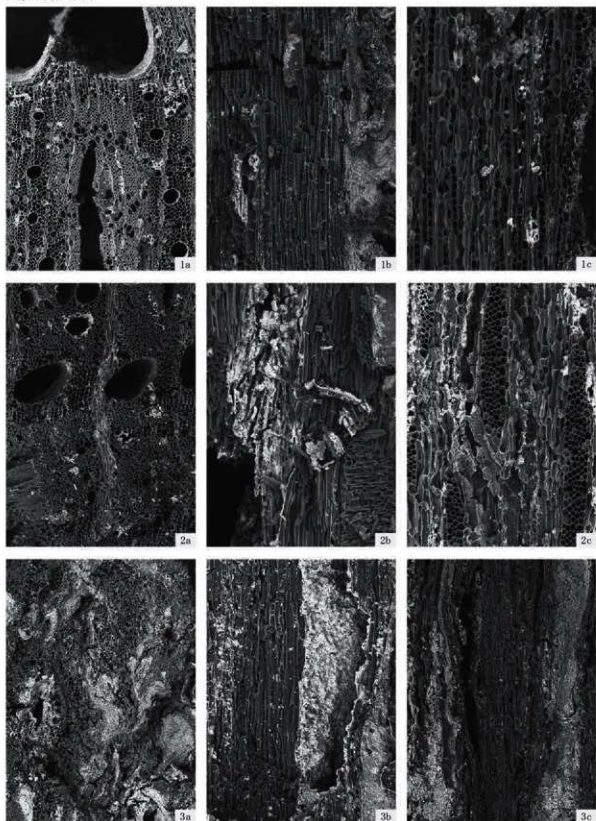


10. 試料No.8(AI区SB4 炭化材下; 骨片)



图版2 分析試料 (炭化種実・骨片)

図版3 炭化材(1)



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料No.1; A1区SB2 覆土下層 No.1)

2. エノキ属(試料No.2; A1区SB2 覆土下層 No.2)

3. エノキ属(試料No.3; A1区SB3 覆土下層 No.1)

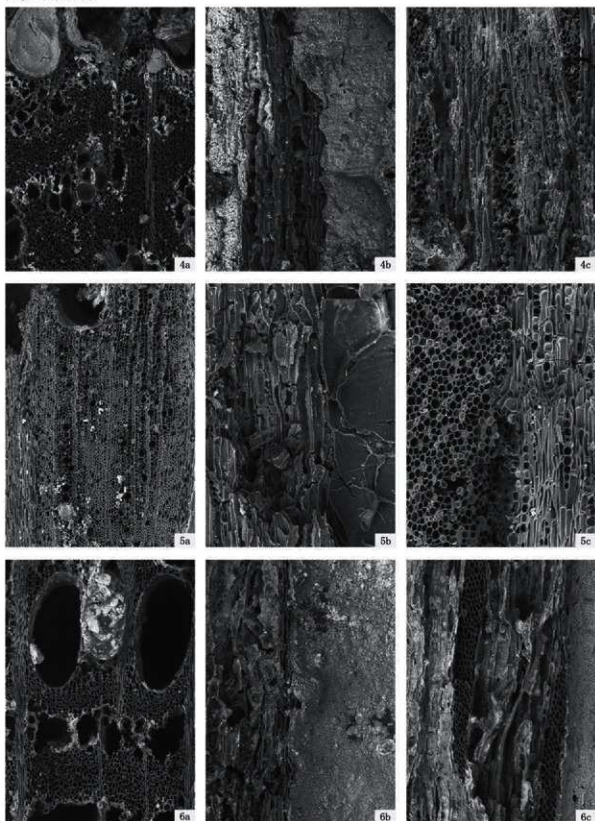
a:木口, b:柾目, c:板目

100 μm a

100 μm b, c

図版3 炭化材(1)

図版4 炭化材(2)

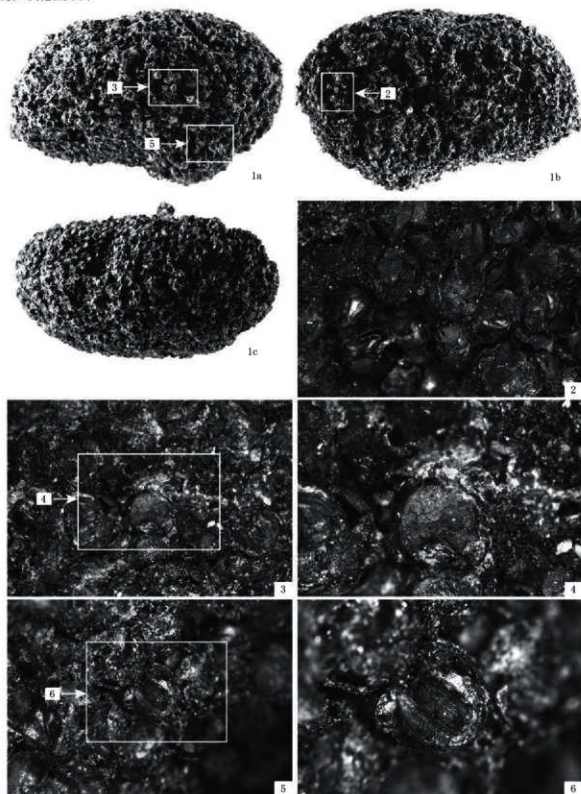


4. エノキ属(試料No.4; A区SB3 覆土下層 No.2)
 5. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料No.5; A区SB4 覆土下層 No.1)
 6. エノキ属(試料No.6; A区SB4 覆土下層 No.2)
 a:木口, b:柁目, c:板目

100 μ m: a
 100 μ m: b, c

図版4 炭化材(2)

図版5 炭化種実(1)

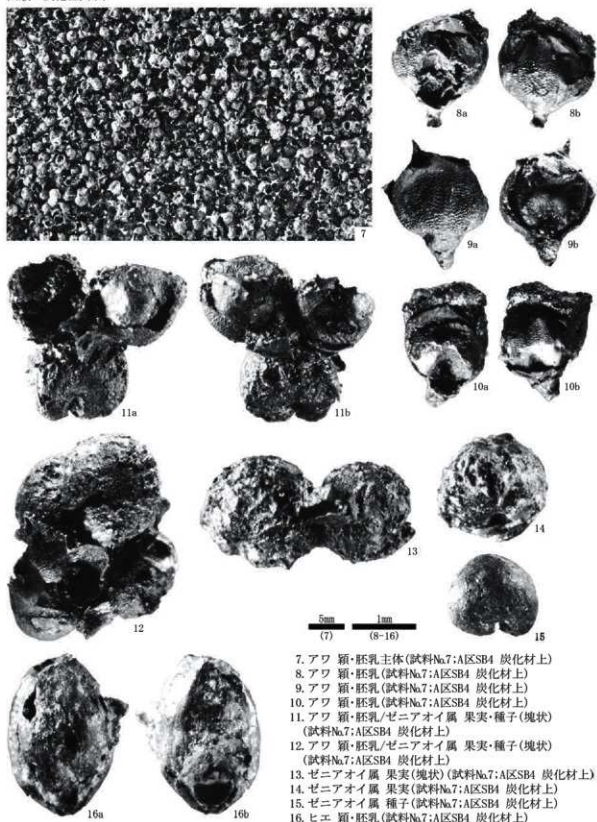


1. アワ 穎・胚乳主体(最大塊)(試料No.7:A区SB4 炭化材上)
2. アワ 穎・胚乳(最大塊)(試料No.7:A区SB4 炭化材上)
3. アワ 穎・胚乳(最大塊)(試料No.7:A区SB4 炭化材上)
4. アワ 穎・胚乳(腹面)(最大塊)(試料No.7:A区SB4 炭化材上)
5. アワ 穎・胚乳(最大塊)(試料No.7:A区SB4 炭化材上)
6. アワ 穎・胚乳(背面)(最大塊)(試料No.7:A区SB4 炭化材上)

5mm 1mm 1mm
(1) (2, 3, 5) (4, 6)

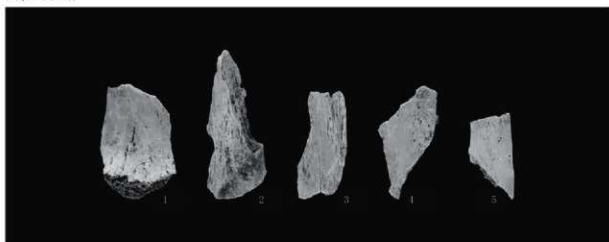
図版5 炭化種実(1)

図版6 炭化種実(2)



図版6 炭化種実(2)

图版7 出土骨



1. 哺乳綱 四肢骨(試料No.8 ; AIESB4 炭化材下)
2. 哺乳綱 四肢骨(試料No.8 ; AIESB4 炭化材下)
3. 哺乳綱 四肢骨(試料No.8 ; AIESB4 炭化材下)
4. 哺乳綱 四肢骨(試料No.8 ; AIESB4 炭化材下)
5. 哺乳綱 四肢骨(試料No.8 ; AIESB4 炭化材下)

2cm

1-5

图版7 出土骨

第V章 まとめ

第1節 弥生時代の集落について

ここでは本調査で検出された弥生時代中期後半の栗林式期集落について、周辺の遺跡や長野盆地の弥生時代中期後半の動態も踏まえつつ見解を述べたい。本地点の弥生集落の存続時期は、長野盆地南部の大集落である松原遺跡の規模が次第に収束していく時期、来るべき吉田式期へと向かう時期にあたり、従来県町遺跡内には存在しないと考えられてきた、弥生時代中期最終末にあたる。近年、弥生時代中期後半の栗林式期の集落については、笹澤氏により詳細な検討がなされ、土器型式1～2型式の短期居住型遺跡（A型）、栗林式期全期間にわたる長期居住型遺跡（B型）に分類され、その中で大型遺跡（A1型）、小型遺跡（A2型）、長期居住移動型（B1型）、長期居住定住型（B2型）に細分されている（笹澤2012）。これによれば、本地点は土器1型式内で住居5軒で構成されるため、A2型に相当し血縁を紐帯とした集落の基礎単位と想定される。

長野盆地南部における栗林式期集落の立地の特徴は、浅川扇状地上においては、自然流路を境界として微高地上に形成される特徴が指摘され（笹澤2012）、中仮遺跡や篠ノ井遺跡群のように自然堤防上に営まれる集落も、自然流路や後背湿地がその境界となる傾向がある。栗林式期に地形の特徴的な変化を利用して集落を形成していたとすれば、裾花川河岸段丘上では段丘がその単位の一つとなるのではないだろうか。また県町遺跡内で本地点とマンション建設地点との間に想定される低地（あるいは自然流路）は本地点弥生集落の境界である可能性があり、マンション建設地点との時期差は集落が異なることによるとも考えられる。

長野盆地南部においては栗林2式新段階に集落遺跡の増加や規模の拡大がみられる。浅川扇状地では栗林式期集落が展開しているが、檀田遺跡・吉田古屋敷遺跡・吉田町東遺跡・中仮遺跡などの集落遺跡の動向を分析すると、扇頂部から扇尖～扇端部へとという集落立地の変化を読み取ることができるとされている（笹澤2012・馬場2013）。県町遺跡周辺についても同じ動向が窺え、上位段丘に位置する平柴平遺跡・西町遺跡から下位段丘の県町遺跡への立地の変化があり、その要因は、県町遺跡で出土したイネやアワなどの稲実と関連して、農耕を目的とした低地利用の活性化と、物資・情報の流れの変化にあると思われる。信濃の弥生時代中期後半の穀物栽培については種子圧痕に関する調査が行われ、イネと、雑穀であるアワ・キビの組合せが一般的であることが指摘されている（馬場・遠藤2017）。本地点の南は段丘上と異なり、裾花川が分流する低平な土地が広がり、東には浅川扇状地との裾合谷が存在する。これらの地域は、古くから市街地化されているために土地利用の状況は不明だが、段丘とは明確に異なる地形で、可耕地であった可能性が考えられる。

物資・情報の流れの変化については、栗林2式古段階までは高田平野～飯山～北武蔵というネットワークが存在し、千曲川を介さずに群馬へと抜けることができる白根山～吾妻川ルートが利用されていたとされ、松原遺跡で磨製石斧を生産するようになり、松原遺跡が「交易場」として機能したことによって、2式新段階に千曲川に沿って佐久へ向かう東山道ルートに移ったことが指摘されている（馬場2008b）。このような長野盆地南部のマクロな変化が県町遺跡周辺にも何らかの影響を与えたことは十分に考えられる。本地点の北約400mにある西町遺跡では、弥生時代中期後半の竪穴住居跡が2軒報告されており、栗林2式新段階に位置づけた（第三章第2節）。西町遺跡A S B 1では指輪状石製品が出土し、本地点の南西約1.4kmにある平柴平遺跡5号土坑からは石戈と推測される石製品が栗林2式古段階の土器と共存している。これらの石製品は出土遺跡・量が限られ、長野盆地南部では松原遺跡・中仮遺跡など、いわゆる拠点集落（笹澤2012）から出土し、希少石製品の中でも最上位に位置し、集団の表象としての威信財と評価されている（町田2008）。本地点で出土した磨製石鏃、儀器とみら

れる大型蛤刃石斧も、これらの集落と何らかの関連を想定できるだろう。

今回、長野遺跡群を中心とする裾花川河岸段丘上に、弥生時代中期から後期まで集落が展開することが再確認できた。市街地化がかなり進んでいるために、全容を把握することは困難であるが、本地点の調査によってその一端を垣間見ることができたと思われる。

第2節 古代の県町遺跡

掘立柱建物跡の様相 本調査では奈良時代末～平安時代初頭と考えられる掘立柱建物跡が検出された。S T 1・2は主軸方位はN 51.5° Wと同じで、間隔を保ち並列する状況から、同時期の建物と推定する。長野国際会館地点の掘立柱建物跡の方位はN50° Eであり、11°の相違は生じるが、S T 1・2とはほぼ直交する位置にある。S T 4についても、離れた位置にあるために若干の相違はありながら、N 44.4° Wとはほぼ同じ方位を保つ。遺物ではS T 2の柱穴からは「厨」と記された墨書土器が出土した。運筆から書き慣れた人物の手による可能性があり、文書事務を伴う厨施設と何らかの関係がある可能性を推測させる。長野国際会館地点では掘立柱建物跡の柱穴より踏脚破片が出土した。

特殊遺物の出土 踏脚破は都城での出土状況により8世紀代のものとされている(神野・川越2003)。県内で踏脚破を出土しているのは県町遺跡も含め、篠ノ井遺跡群・飯田市恒川遺跡群のみで5点になるが、県内の専用破出土点数260点と比較すれば出土比率は寡少である。しかも出土遺物の性格について、恒川遺跡群は伊那郡家に、篠ノ井遺跡群は7世紀末から8世紀にかけての行政的な拠点と想定されている(原2011)。

県町遺跡における官衛的要素を示す遺物としては、マンション建設地点では遺構に伴わないか円面破片3点と双耳杯が出土し、報文では同じ位置から出土した土器の年代から8世紀後半～末と判断している。また本地点ではS B 9で須恵器棧椀が出土し、S B 10からは2次の製塩のための製塩土器の可能性のある土器が出土した。2次の製塩には行政組織が運営に関わることも多いとされ(新名2013)、今後注目すべきものである。

県町遺跡の性格と範囲 県町遺跡の調査を総合すると、奈良時代に掘立柱建物を構築する時期があり、地形的な制約の可能性もあるものの、建物は方位を揃えていたと考えられる。本地点S T 1は片廂建物という、一般集落では検出例の少ない構造であり、遺物も「厨」墨書土器や、郡家クラス以上の遺跡でしか出土していない踏脚破、円面破や双耳杯・棧椀など官衛及び周辺遺跡で出土する傾向が高い遺物が同一段丘上で散見される。

長野国際会館地点は、調査以来水内郡家と推定されてきたが、その根拠は掘立柱建物跡と踏脚破のみであった。しかし半径約150m以内に官衛及び周辺の性格を示す調査成果が示されている以上、何らかの行政的な施設を想定することは不可能ではない。そして遺跡は弥生時代の集落域と重なるように裾花川第5段丘面上に存在すると考えられる。中央通りより東は湯福川扇状地に覆われるため、段丘が明瞭でないが、等高線によってその範囲を想定し、第6図に示したように段丘上を遺跡の範囲とした。ただし段丘下には裾花川旧流路が広がっており、農耕などの痕跡が残されている可能性がある。一帯は古くから市街地であるために攪乱を受けたり、既に埋没していることも予想されるが、県町遺跡の範囲については拡大していくことも十分あり得るであろう。

遺物観察表 (1)

調査年度	産地名	出土位置	種類	器種	口径	口径 幅径	体高 (cm)	体量 (g)	残存率	胎土	色面 (内/外)	備考
19	A SH1	東	赤土土器	鉢	30.2	—	15.3	309	90%程度劣化	赤土、赤砂	3.5寸赤土器	底彫彫、彫文全体が底彫彫・彫文、 内外全面底彫彫・彫文の順に記載
2	A SH2	東	赤土土器	鉢	17.0	—	12.0	492	100%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂	に底彫に黄砂	
3	A SH2	東	赤土土器	鉢	18.1	—	13.0	531	100%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂、赤土	明彫彫に黄砂	
4	A SH2	東	赤土土器	鉢	15.4	—	11.3	221	100%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂、赤土	明彫彫に黄砂	
5	A SH2	東	赤土土器	鉢	20.6	—	14.4	324	100%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂、赤土	明彫彫に黄砂	
6	A SH2	東	赤土土器	鉢	20.6	—	14.4	324	100%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂、赤土	明彫彫に黄砂	
7	A SH2	東	赤土土器	鉢	15.5	—	12.3	259	85%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂、赤土	底彫彫	
8	A SH2	東	赤土土器	鉢	15.5	—	12.3	259	85%	赤土、赤砂、 黄砂、石、長砂、赤土	底彫彫	
9	A SH3	東	赤土土器	鉢	17.35	11.2	40.05	2,837	57%	赤土、赤砂	底彫彫に砂	
10	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	9.8	231.0	922	58%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
11	A SH3	東上	赤土土器	鉢	—	10.0	30.7	2,076	47%	赤土、赤砂	に底彫彫	
12	A SH3	東	赤土土器	鉢	21.9	—	12.2	815	25%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
13	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	7.9	138.4	865	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
14	A SH3	東	赤土土器	鉢	10.2	6.9	19.4	917	48%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
15	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	5.8	49.0	212	100%	赤土、赤砂	に底彫彫	
16	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	10.2	21.1	1,881	100%	赤土、赤砂	に底彫彫	
17	A SH3	東	赤土土器	鉢	26.4	—	19.6	276	100%	赤土、赤砂	に底彫彫	
18	A SH3	東、SH1-2	赤土土器	鉢	22.9	10.0	31.7	3,203	63%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
19	A SH3	東	赤土土器	鉢	16.4	7.4	22.1	1,216	47%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
20	A SH3	下層	赤土土器	鉢	—	7.1	119.8	745	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
21	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	7.4	17.4	226	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
22	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	5.7	21.1	209	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
23	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	4.6	19.8	209	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
24	A SH3	東	赤土土器	鉢	—	4.6	19.8	209	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
25	A SH3	東	赤土土器	鉢	23.5	10.2	33.8	2,389	47%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
26	A SH3	東	赤土土器	鉢	9.7	7.4	13.4	340	37%	赤土、赤砂	に底彫彫	
27	A SH3	東	赤土土器	鉢	6.6	3.0	8.1	285	49%	赤土、赤砂	に底彫彫	
28	A SH4	下層	赤土土器	鉢	13.7	8.2	31.6	1,633	47%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	底彫彫	
29	A SH4	東上	赤土土器	鉢	—	9.0	38.5	2,694	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	底彫彫	
30	A SH4	東上	赤土土器	鉢	—	10.0	28.3	1,729	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
31	A SH4	東上	赤土土器	鉢	14.9	—	13.8	627	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
32	A SH4	東上	赤土土器	鉢	—	10.0	17.0	314	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
33	A SH4	東	赤土土器	鉢	—	7.5	49.7	529	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
34	A SH4	東	赤土土器	鉢	—	6.7	141.6	271	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	底彫彫	
35	A SH4	東上	赤土土器	鉢	—	4.3	111.5	222	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	底彫彫	
36	A SH4	下層	赤土土器	鉢	7.8	5.3	14.72	324	65%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	底彫彫	
37	A SH4	東、東上	赤土土器	鉢	21.8	—	23.7	1,613	71%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	底彫彫	
38	A SH4	東上層	赤土土器	鉢	24.4	9.65	30.6	2,389	17%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
39	A SH4	東上層	赤土土器	鉢	21.8	9.6	24.7	1,613	17%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	
40	A SH4	東	赤土土器	鉢	—	7.3	113.1	1,016	100%	赤土、赤砂、 黄砂、赤土	に底彫彫	

遺物観察表 (2)

調査年度	遺物番号	出土位置	種類	器種	口径	口径	高さ	底径	容量	残存率	胎土	色調(内/外)	備考
41	A-SH4	床	灰土器	甕	15.1	6.6	19.1	8.1	267.8	長砂土	赤土	赤土	素土
42	A-SH4	床	灰土器	甕	19.6	7.4	20.2	10.6	377.8	長砂土	赤土	赤土	素土
43	A-SH4	床	灰土器	甕	19.6	6.5	11.7	246.56/8		赤土	赤土	赤土	素土
44	A-SH4	床	灰土器	甕	9.5	4.8	10.1	168/17.8		赤土	赤土	赤土	素土
45	A-SH4	床	灰土器	甕	9.6	4.95	10.19	227/18/8		赤土	赤土	赤土	素土
46	A-SH4	床	灰土器	甕	—	5.8	8.35	174/14/8		赤土	赤土	赤土	素土
47	A-SH4	床	灰土器	甕	—	6.15	10.7	116.7/17/8		赤土	赤土	赤土	素土
48	A-SH4	床	灰土器	甕	13.7	8.45	20.2	698/68/8		赤土	赤土	赤土	素土
49	A-SH4	床	灰土器	甕	17.5	9.6	18.6	522/26/8		赤土	赤土	赤土	素土
50	A-SH4	床	灰土器	甕	14.25	9.3	18.8	535/67/8		赤土	赤土	赤土	素土
51	A-SH4	床	灰土器	甕	10.6	8.1	11.9	311/97/8		赤土	赤土	赤土	素土
52	A-SH4	床	灰土器	甕	10.4	7.6	13.4	296/86/8		赤土	赤土	赤土	素土
53	A-SH4	床	灰土器	甕	11.7	9.0	13.3	310/67/8		赤土	赤土	赤土	素土
54	A-SH4	床	灰土器	甕	16.4	8.2	15.8	455/45/8		赤土	赤土	赤土	素土
55	A-SH4	床	灰土器	甕	16.4	5.4	8.2	305/45/8		赤土	赤土	赤土	素土
56	A-SH4	床	灰土器	甕	16.4	5.4	8.2	305/45/8		赤土	赤土	赤土	素土
57	A-SH4	床	灰土器	甕	16.4	5.4	8.2	305/45/8		赤土	赤土	赤土	素土
58	A-SH4	床	灰土器	甕	20.6	8.1	11.1	679/77/8		赤土	赤土	赤土	素土
59	A-SH4	床	灰土器	甕	12.8	5.6	3.9	261/25/8		赤土	赤土	赤土	素土
60	A-SH4	床	灰土器	甕	12.8	5.6	3.9	260/25/8		赤土	赤土	赤土	素土
61	A-SH4	下層	灰土器	甕	18.35	115.2	7.3	437/17/8		赤土	赤土	赤土	素土
62	A-SH4	床	灰土器	甕	14.5	9.2	12.4	281/17/8		赤土	赤土	赤土	素土
63	A-SH4	床	灰土器	甕	—	8.7	(4.7)	126/2/17/8		赤土	赤土	赤土	素土
64	A-SH4	床	灰土器	甕	16.1	3.85	9.5	332/27/8		赤土	赤土	赤土	素土
65	D-SH20	床	灰土器	甕	—	7.0	(8.4)	685/5/17/8		赤土	赤土	赤土	素土
66	D-SH20	床	灰土器	甕	—	—	—	353/20/8		赤土	赤土	赤土	素土
67	D-SH20	床	灰土器	甕	—	—	—	75/61/8		赤土	赤土	赤土	素土
68	D-SH20	床	灰土器	甕	13.4	—	(13.4)	561/51/3		赤土	赤土	赤土	素土
69	D-SH20	床	灰土器	甕	9.6	6.0	11.1	208/25/8		赤土	赤土	赤土	素土
70	D-SH23	床	灰土器	甕	12.3	10.9	43.2	3,600/68/8		赤土	赤土	赤土	素土
71	D-SH23	床	灰土器	甕	19.8	9.2	43.9	2,948/67/8		赤土	赤土	赤土	素土
72	D-SH23	床	灰土器	甕	18.9	9.6	35.6	2,409/67/8		赤土	赤土	赤土	素土
73	D-SH23	床	灰土器	甕	17.6	9.2	35.2	1,900/66/8		赤土	赤土	赤土	素土

遺物観察表 (4)

遺物観察表 (4)

遺物番号	遺物名	出土位置	種類	器種	器種	口径	口径	容量 (cc)	残存率	胎土	色層(内外)	備考
112 B	S46	床	磁器器	杯	12.7	7.6	3.4	54,087.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
113 B	S46	床	磁器器	杯	12.8	5.8	3.6	44,432.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
114 B	S46	床	磁器器	杯	12.7	6.3	3.5	41,412.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
115 B	S46	床	磁器器	杯	13.2	6.2	3.2	32,412.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
116 B	S46	床	磁器器	杯	13.0	6.3	3.2	32,412.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
117 B	S46	床	磁器器	杯	14.2	7.0	3.2	105,847.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
118 B	S46	床	磁器器	杯	13.0	6.3	3.4	114,067.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
119 B	S46	床	磁器器	高付杯	12.5	9.9	3.4	107,267.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
120 B	S46	床	磁器器	高付杯	13.5	12.3	3.2	152,412.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
121 B	S46	床, カマド	土師器	石付杯	13.0	7.4	4.0	41,412.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 石付(胎付)。
122 B	S46	床, カマド	土師器	杯	21.8	4.3	37.0	800,247.8	100	白	白	輪削成形, 高(ハチ, ナブ), 外(ケズリ), ナブ。
123 B	S46	床	土師器	杯	10.0	—	17.5	629,517.8	100	白	白	輪削成形, 高(ハチ, ナブ), 外(ケズリ), ナブ。
124 B	S46	床, P16	土師器	杯	13.3	6.0	4.1	109,307.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
125 B	S46	床, P16	土師器	小壺	—	5.2	17.5	79,127.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
126 B	S47	—	磁器器	杯	13.4	7.4	4.1	172,517.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
127 B	S47	カマド	磁器器	杯	12.6	6.2	3.6	120,457.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
128 B	S47	—	磁器器	杯	13.0	7.2	3.9	135,317.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
129 B	S47	—	磁器器	杯	13.0	7.2	3.8	54,527.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
130 B	S47	—	磁器器	杯	12.6	6.8	4.1	105,627.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
131 B	S47	—	磁器器	杯	13.4	7.2	4.4	194,527.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
132 B	S47	—	磁器器	高付杯	12.6	9.2	4.2	199,527.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付), 高付(胎付)。
133 B	S47	—	磁器器	高付杯	15.0	9.4	6.6	260,227.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付), 高付(胎付)。
134 B	S47	—	磁器器	杯	13.6	7.7	5.1	187,867.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
135 B	S47	—	土師器	杯	13.8	7.4	4.1	60,527.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
136 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	13.8	—	6.7	55,827.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
137 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	14.0	—	6.0	31,327.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
138 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	13.9	—	6.0	31,327.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
139 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	13.9	—	6.0	31,327.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
140 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	13.9	—	6.0	31,327.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
141 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	13.9	—	6.0	31,327.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
142 B	S47	カマド	磁器器	高付杯	13.9	—	6.0	31,327.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産, 高付(胎付)。
143 B	S49	—	磁器器	杯	13.7	3.3	3.2	129,167.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
144 B	S49	—	磁器器	杯	14.0	3.1	3.2	162,277.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
145 B	S49	床	磁器器	杯	12.8	7.2	3.7	98,647.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
146 B	S49	床	磁器器	杯	12.8	7.2	3.9	66,027.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。
147 B	S49	床	磁器器	杯	12.8	6.3	3.7	69,337.8	100	白	白	ロクロ成形, 二段底, 外国産。

遺物観察表 (5)

圃 番号	遺物名	出土位置	時期	器種	口径	高さ	容量 (cm ³)	残存率	胎土	色調(内/外)	成形・施文(全体の成形・施文、 内外面成形等・施文の順に記載)	備考
148 B	SH9	F2	原始型	甕	12.8	7.2	42.62±8		長巻赤白土	灰	口外成形(外/内面)	
149 B	SH9	F2	原始型	甕	13.0	6.4	4.1	109.06±8	右, 長巻砂, 薄灰	灰	口外成形(外/内面)	
150 B	SH9	F2	原始型	甕	13.5	7.7	4.1	165.37±8	薄灰, 白土	灰	口外成形(外/内面)	
151 B	SH9	F2	原始型	甕	13.4	6.8	3.9	137.37±8	細灰, 白土	灰	口外成形(外/内面)	底欠
152 B	SH9	F2	原始型	甕	13.5	7.0	4.1	139.26±8	赤土	灰	口外成形(外/内面)	
153 B	SH9	F2	原始型	甕付付体	10.0	7.0	4.2	152.97±8	赤土, 黒土	灰	口外成形(外/内面, 外口縁部)	
154 B	SH9	F2	原始型	甕付付体	12.2	8.9	4.1	177.78±8	赤土, 黒土	灰	口外成形(外/内面, 外口縁部)	
155 B	SH9	F2	原始型	甕付付体	12.2	8.9	4.1	177.78±8	細灰, 赤土, 白土	灰	口外成形(外/内面, 外口縁部)	外口縁部, 胎土
156 B	SH9	F2	原始型	甕付付体	11.9	—	(6.3)	307.25±付体欠損	赤土, 赤土	灰	口外成形(外/内面, 外口縁部)	胎土, 胎土
157 B	SH9	F2	原始型	甕	17.0	—	(6.9)	267.25±付体欠損	赤土, 赤土	灰	口外成形(外/内面, 外口縁部)	胎土, 胎土
158 B	SH9	F2	原始型	甕	13.4	7.0	4.1	198.13±8	石角赤土	灰	口外成形(外/内面)	
159 B	SH9	F2	原始型	甕	13.5	7.0	4.1	198.13±8	赤土, 赤土	灰	口外成形(外/内面)	
160 B	SH9	F2	原始型	甕	13.4	6.3	3.2	146.12±8	赤土, 赤土	灰	口外成形(外/内面)	
161 B	SH9	F2	十層型	小甕	22.4	—	(11.0)	245.99±胎土	石角赤土	胎土	胎土, 胎土	
162 B	SH9	F2	十層型	小甕	22.4	—	(11.0)	239.25±胎土	石角赤土	胎土	胎土, 胎土	
163 B	SH10	F2	十層型	甕	25.0	7.3	13.7	419.19±胎土	赤土, 赤土	胎土	胎土, 胎土	
164 B	SH10	F2	原始型	甕	13.0	6.8	2.8	117.04±8	灰, 薄灰	灰	口外成形(外/内面)	
165 B	SH10	F2	原始型	甕	13.2	6.8	3.4	128.24±8	細灰	灰	口外成形(外/内面)	
166 B	SH10	F2	原始型	甕	13.4	6.5	4.8	63.04±8	細灰, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
167 B	SH10	F2	原始型	甕	13.0	6.0	4.0	111.04±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
168 B	SH10	F2	原始型	甕	13.6	7.2	3.8	98.24±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
169 B	SH10	F2	原始型	甕	13.6	7.2	3.8	98.24±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
170 B	SH10	F2	原始型	甕付付体	10.4	—	(3.8)	41.24±胎土	細灰, 長巻, 薄灰	胎土	口外成形(外/内面)	
171 B	SH10	F2	黒色土層	甕	14.2	6.4	4.9	167.07±8	胎土, 長土角, 赤土, 赤土	明赤土	口外成形(内/外)	薄灰
172 B	SH10	F2	黒色土層	甕	16.0	—	(5.0)	31.71±胎土	石角赤土	灰	口外成形(内/外)	
173 B	SH10	F2	黒色土層	甕	16.0	—	(5.0)	31.71±胎土	赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
174 B	SH10	F2	黒色土層	甕	16.0	—	(5.0)	342.06±胎土	赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
175 B	SH10	F2	十層型	甕	17.0	—	(7.7)	90.01±8	石角赤土	胎土	口外成形(内/外)	
176 B	SH10	F2	十層型	甕	21.2	5.8	32.7	1,585.07±8	赤土, 長巻, 赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
177 B	SH10	F2	十層型	甕	21.2	5.8	32.7	1,585.07±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
178 B	SH10	F2	十層型	甕	16.3	6.8	11.9	260.05±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
179 B	SH11	F2	原始型	甕	13.8	—	(2.2)	21.41±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
180 B	SH11	F2	原始型	甕付付体	12.2	9.0	3.1	81.54±8	胎土, 胎土	灰	口外成形(外/内面)	
181 B	SH11	F2	原始型	甕付付体	30.0	—	(11.8)	271.02±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
182 B	SH11	F2	十層型	甕	16.6	—	(6.2)	158.21±8	石角赤土, 赤土, 赤土	明赤土	口外成形(内/外)	
183 B	SH11	F2	十層型	甕	18.0	—	(6.3)	55.11±8	石角赤土, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
184 B	SH11	F2	十層型	甕	—	7.4	(7.0)	100.19±胎土	胎土, 石角, 赤土	胎土	口外成形(内/外)	
185 B	SH12	F2	原始型	甕	11.4	6.6	3.2	31.31±8	赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
186 B	SH12	F2	原始型	甕	12.2	—	(3.2)	25.51±胎土	赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
187 B	SH12	F2	十層型	甕	21.0	—	(6.2)	561.43±8	石角赤土, 赤土	胎土	口外成形(外/内面)	
188 B	SH12	F2	十層型	甕	23.0	—	(13.3)	395.41±胎土	石角赤土	胎土	口外成形(外/内面)	

遺物観察表 (6)

遺物観察表

調査 番号	遺物 名称	出土位置	種類	器種	器体	口径	器高	体高	容量(l)	残存率	胎土	色面(内/外)	底彫彫文・線文・ 内外各面彫製線・線文・ 内外各面刻字(ローゼツ)	備考
						mm	mm	mm						
189	B SH13		須臾器	杯蓋	杯蓋	15.0	47.2	3.1	112.2(2)8		灰黒ネリヤ	口口口口口口(外/天井部口口口口)	底彫彫文・線文・全体の底彫彫文・線文・ 内外各面彫製線・線文・刻字(ローゼツ)	外白胎土、フアミ層面工目肌、底彫彫文
190	B SH13		須臾器	杯	杯	12.2	8.0	3.4	33.9(2)8		ヤヤ黒、長、雲、襷	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
191	B SH13		須臾器	杯	杯	14.5	8.8	4.1	124.2(1)8		ヤヤ黒、長、雲、襷	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
192	B SH13	F	須臾器	杯	杯	13.9	7.8	3.7	104.2(2)8		ヤヤ黒、長、雲、襷	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
193	B SH13	SNS	須臾器	杯	杯	14.2	7.8	4.2	104.2(2)8		灰白	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
194	B SH13	SNS	須臾器	高付杯	高付杯	14.1	9.5	4.2	220.2(7)8		ヤヤ黒、石、多、雲	口口口口口口(外/底へ字)、高付彫文	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
195	B SH13	上層部内面	須臾器	杯	杯	15.6	8.4	5.6	226.1(6)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/ミ字本、雲色彫製)、外(底へ字)	雲、襷	
196	B SH13	中層部	須臾器	杯	杯	13.8	—	—	90.3(1)8		石、多、雲、襷、白、赤	口口口口口口(外/ミ字本、雲色彫製)、外(底へ字)	雲、襷	
197	B SH13	底層部	須臾器	杯	杯	12.2	—	—	100.3(1)8		石、多、雲、襷、白、赤	口口口口口口(外/ミ字本、雲色彫製)、外(底へ字)	雲、襷	
198	B SH13	底層部	須臾器	杯	杯	22.6	—	—	223.7(1)8		石、多、雲、襷、白、赤	口口口口口口(外/ミ字本、雲色彫製)、外(底へ字)	雲、襷	
199	B SH14		須臾器	杯	杯	13.0	6.2	1.1	128.0(2)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
200	B SH15		須臾器	杯	杯	14.7	8.0	4.6	51.7(2)8		須臾、砂、赤、白、黒	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
201	B SH15		須臾器	杯	杯	20.0	—	—	97.1(1)4(1)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
202	B SH15		須臾器	杯	杯	13.4	9.0	3.9	210.2(7)8		石、多、雲、襷、白	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
203	B SH16		須臾器	杯	杯	11.2	—	—	221.7(1)8		須臾、砂、赤	口口口口口口(外/ミ字)、外(底へ字)	雲、襷	
204	B SH16	F	須臾器	杯	杯	32.8	—	—	357.2(1)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
205	B SH16	F	須臾器	杯	杯	—	—	—	285.9(1)8		石、多、雲、襷、赤	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
206	B SH16		須臾器	杯蓋高杯	杯蓋高杯	16.6	—	—	116.2(3)8		灰白	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
207	B SH17		須臾器	杯	杯	23.0	—	—	136.7(1)8		雲、襷	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
208	B SH17	F	須臾器	杯	杯	13.0	6.0	3.5	20.9(1)8		灰白	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
209	B SH17	F	須臾器	高付杯	高付杯	—	10.0	2.6	45.0(1)6(2)8		雲、襷、白	口口口口口口(外/底へ字)、高付彫文	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
210	B SH17	F	須臾器	杯	杯	15.2	7.0	5.0	127.1(1)8		雲、襷、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
211	B SH19	F	須臾器	杯	杯	22.8	7.8	3.4	134.3(5)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
212	B SH19	F	須臾器	杯	杯	22.8	7.8	3.4	134.3(5)8		石、多、雲、襷、赤	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
213	B SH19		須臾器	杯	杯	23.5	9.4	1.5	200.4(5)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
214	B SH19		須臾器	小蓋	小蓋	8.4	7.0	12.0	392.0(6)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
215	B SH19		須臾器	杯	杯	12.8	5.4	4.1	170.37(5)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
216	B SH19		須臾器	高付杯	高付杯	14.4	9.0	7.1	328.7(7)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)、高付彫文	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
217	B SH19		須臾器	杯	杯	17.0	—	—	133.9(1)4(2)8		須臾、砂、赤	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
218	B SH19	上層部内面	須臾器	杯蓋	杯蓋	11.8	—	—	2.6	33.1(1)8	灰	口口口口口口(外/天井部口口口口)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
219	B SH19	中層部	須臾器	杯	杯	14.2	9.4	5.1	31.1(1)8		灰	口口口口口口(外/天井部口口口口)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
220	B SH19	底層部	須臾器	杯蓋	杯蓋	18.5	—	—	27.8(1)8		灰、雲、襷、赤	口口口口口口(外/天井部口口口口)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
221	B SH19	底層部	須臾器	杯蓋	杯蓋	—	—	—	123.0(1)4(1)8		須臾、砂、赤	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
222	B SH19	底層部	須臾器	杯蓋	杯蓋	27.1	—	—	649.3(2)~445.8		石、多、雲、襷、赤	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
223	B SH19	底層部	須臾器	杯	杯	12.7	6.1	3.6	121.8(2)8		灰白	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	
224	B SH19	底層部	須臾器	杯	杯	13.6	—	—	18.2(1)8		長砂、赤、土	口口口口口口(外/底へ字)	口口口口口口、フアミ層面工目肌、底彫彫文	

遺物観察表(7)

調査 番号	遺物名 番号	出土位置	種類	器種	口径 (cm)		器高	容量(公 升)	残容量	胎土	色調(内/外)	成形・施文 内容(成形態・施文・ 内外各部態態・施文の順に記載)	備考
					口径	器径							
225	SH8		土師器	杯	14.6	—	5.0	33.4(1.8)	—	灰白	内(1.若干)	内径延長	
226	SH8		埴土器	鉢	15.0	—	6(3)	35.8(1.8)	—	青灰	口タロ成形	底面小凸部の可塑性有り	
227	SH8		土師器	小壺	6.5	—	9(8)	179.9(1.8)	—	靑灰	口タロ成形, 外(黒赤)	体外スス	
228	SH19		埴土器	杯	14.1	7.0	3.3	44.4(2.8)	—	灰白	口タロ成形, 外(黒赤)		
229	SH19	SK1	埴土器	杯	13.2	6.0	3.7	135.0(6.8)	—	淡青	口タロ成形, 外(黒赤)		
230	SH19		埴土器	杯	12.9	7.0	3.8	114.6(6.8)	—	灰白に藍	口タロ成形, 外(黒赤)	器体器蓋「互五」	
231	SH19	龍土, 念合層	埴土器	杯	13.0	6.6	4.1	31.6(1.8)	—	オリーブ黒	口タロ成形, 外(黒赤)	内径延長	
232	SH19		埴土器	杯	8.0	6.2	3.6	75.3(2.8)	—	灰	口タロ成形, 外(黒赤)		
233	SH19		埴土器	杯	13.2	8.0	3.6	88.9(4.8)	—	胎土, 厚層, 長層 少, 厚層少, 長層少	口タロ成形, 外(黒赤)	内径延長	
234	SH19		埴土器	杯	13.3	5.3	4.0	137.0(6.8)	—	灰白	口タロ成形, 外(黒赤)	口縁内外, 底内径延長	
235	SH19	SK1	埴土器	杯	13.4	5.8	3.7	145.6(7.8)	—	灰白→淡青	口タロ成形, 外(黒赤)	口縁外, 底内径延長	
236	SH19	SK2	埴土器	杯	13.4	5.3	3.6	102.4(4.8)	—	灰白→に青	口タロ成形, 外(黒赤)	口縁外, 底内径延長	
237	SH19		埴土器	高付付付	—	9.9	3(1)	31.9(1.8)	—	灰	口タロ成形, 外(黒赤)外周口タロズリ, 高付(器付)		
238	SH19	地下	黒色土器	杯	16.6	7.0	5.1	39.2(1.8)	—	胎土, 厚層, 長層 多, 厚層少	口タロ成形, 内(ミダキ), 外(体下蓋ヘタケズリ)		
239	SH19		黒色土器	小椀	11.2	5.0	3.0	50.1(4.8)	—	胎土, 厚層, 長層 多, 厚層少	口タロ成形, 内(ミダキ), 外(高台器付, 高付付ケズリ)	外壁面延れる	
240	SH19		埴土器	厚直縁	10.2	—	6(9)	128.8(1~8)14.8	—	灰	口タロ成形	外周部→内径延長, 外縁延長	
241	SH19	トレンチ	埴土器	長直縁	—	8.0	7(1)	254.4(底面6.8)	—	灰白, 厚層, 長層	口タロ成形, 外(黒赤)外周口タロズリ, 高台(器付)	底内径延長	
242	SH19	カマド, 龍風	土師器	甕	22.0	—	26(4)	697.0(1.8)	—	胎土, 厚層, 長層 多, 厚層少	輪縁・口タロ成形, 内(ナデ), 外(体ケズリ)		
243	SH19	カマド, P1, P2	土師器	甕	24.0	—	11(4)	184.4(1.8)	—	胎土, 厚層, 長層 多, 厚層少	口タロ成形, 内(ナデ), 外(体ケズリ)		
244	SH19	カマド	土師器	小壺	12.8	—	8(9)	129.2(1.8)	—	胎土, 厚層, 長層 多, 厚層少	口タロ成形	器体	
245	SH19	カマド	土師器	小壺	—	6.0	5(1)	105.2(1.8)	—	胎土, 厚層, 長層 多, 厚層少	口タロ成形, 外(黒赤)		

遺物観察表

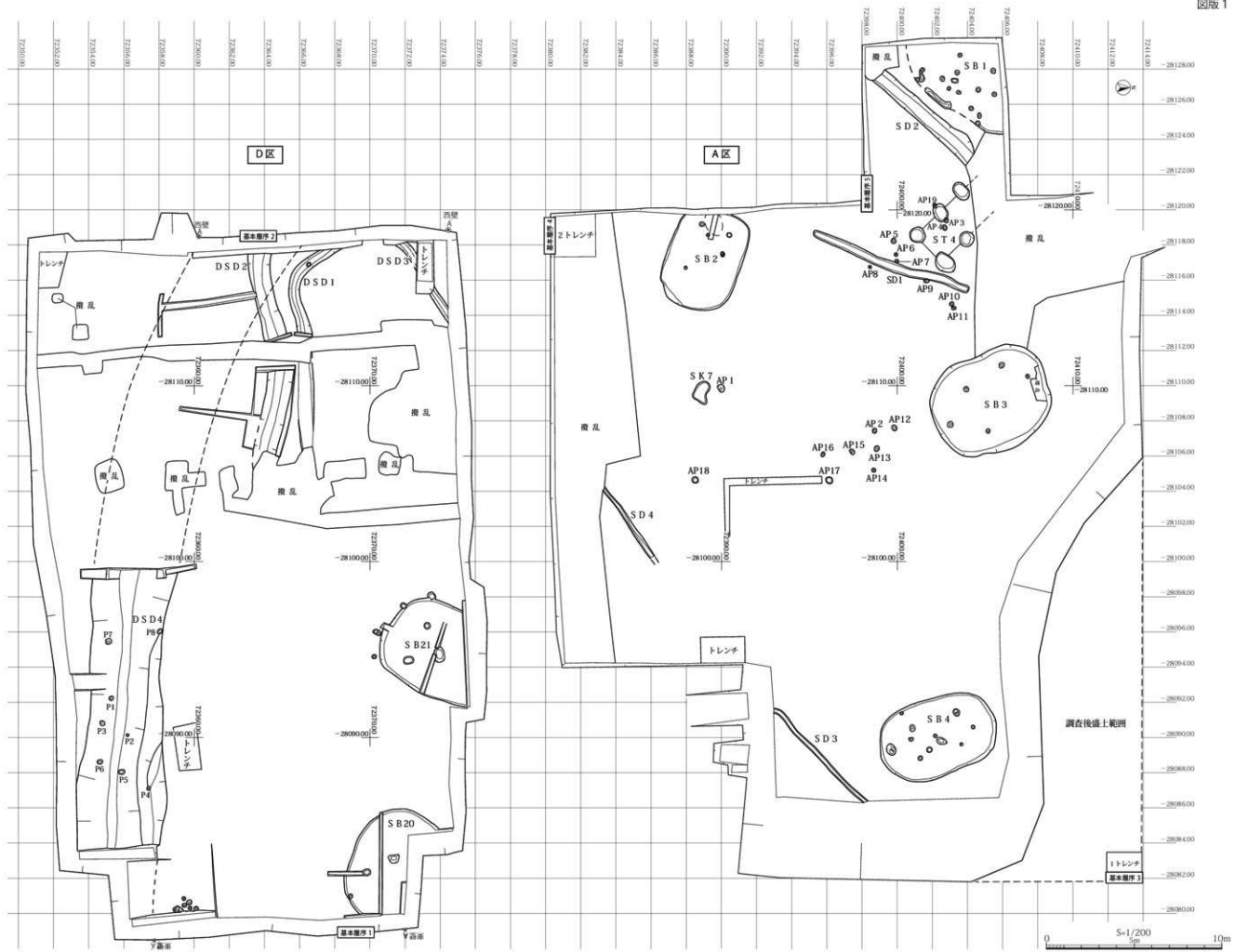
遺物観察表(8)

遺物 番号	調査 区	遺物名	出土位置	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備 考
						長さ	幅	厚さ		
246	A	横出面		石器	石鏃	(26.5)	18.3	4.0	1.75	チャート
247	A	掘土		石器	石鏃	(16.0)	11.3	3.3	0.56	SB4掘土より出土
248	D	SB21	床	石器	磨製石鏃	23.5	14.0	2.5	0.86	チャート、右孔*
249	B	SB10		石器	網片*	25.0	28.0	12.0	7.62	黒曜石
250	B	上層横出面		石器	打製石斧	126.0	43.5	15.5	105.49	頁岩
251	A	SB 3		石器	磨製石斧	100.0	67.0	42.0	547.10	輝緑岩、ベンガラ付着、焼熱
252	A	SB 3	下層	石器	磨製石斧	(53.0)	64.0	28.0	141.40	輝緑岩、ベンガラ付着
253	A	SB 4		石器	磨製石斧	134.5	64.5	37.0	529.26	輝緑岩、ベンガラ付着、焼熱
254	A	SB 4	下層	石器	磨製石斧	61.0	71.5	43.0	248.28	輝緑岩、ベンガラ付着
255	A	SB 2		石製品	有孔石製品	67.0	82.0	16.0	78.12	成紋岩、粘輝率*
256	B	SB 6		石製品	砥石	202.5	103.0	87.0	2,365.53	成紋岩
257	B	SB13		石製品	砥石	(74.0)	82.0	28.5	255.92	砂岩
258	B	SB13		石製品	砥石	150.0	76.0	44.0	593.60	成紋岩質礫灰岩
259	B	SB19	東下	石製品	砥石	58.5	30.0	22.0	44.40	成紋岩
260	B	SB12P27		石製品	砥石	49.5	32.0	24.0	49.58	成紋岩質礫灰岩、欠損部分孔あり
261	A	SB 3	上層	石	不明	46.0	53.0	16.3	39.08	安山岩、磨痕
262	A	SB 3	上層	石	不明	36.0	39.5	29.0	48.99	安山岩、用途不明
263	A	SB 4	掘土	石	不明	93.5	87.0	60.0	498.45	安山岩
264	A	SB 4	下層	石製品	磨石	90.0	80.0	55.0	468.30	安山岩、磨痕
265	A	SB 4	掘土	石製品	磨石	108.0	96.0	77.0	1,094.01	安山岩、磨痕
266	D	SB21		石製品	磨石	129.0	86.0	42.0	676.58	安山岩、長軸側面中央に縦打痕
267	D	SB21	床	石	不明	55.0	53.0	47.5	189.66	安山岩、用途不明
268	B	SB7	床	石	不明	106.0	84.0	69.0	836.52	安山岩、焼熱、ヌス付着
269	B	SB7	床	石	不明	103.0	101.0	80.5	1,077.69	石製品、磨痕
270	B	SB9		石製品	砕石	171.05	140.0	91.0	3,330.00	安山岩、磨痕、焼熱
271	B	SB10		石製品	砕玉	32.0	21.0	10.0	9.09	メノウ
272	B	下層横出面	下層	石製品	管玉	(11.5)	(8.5)	—	0.60	管玉
273	B	上層横出面		ガラス製品	ガラス玉	3.0	2.0	1.5	0.01	未調染青色
274	B	SB6	床	金属製品	不明	(05.0)	37.0	17.0	35.55	
275	B	SB6		金属製品	不明	(41.0)	26.3	7.3	10.11	
276	B	SB6	下層	金属製品	不明	(30.5)	20.0	8.0	6.10	
277	B	SB11	床	金属製品	不明	(84.0)	12.0	9.0	14.63	
278	B	SB18	床	金属製品	不明	(25.0)	8.0	5.0	1.18	
279	B	SB18	床	金属製品	不明	(24.5)	8.0	5.0	1.10	
280	B	ST1	臼	金属製品	不明	(33.0)	13.0	7.5	2.75	
281	B	SB6	床	金属	鉄滓	70.0	58.0	30.0	159.02	鉄、陶形滓*
282	B	SB8		金属	鉄滓	80.0	72.0	37.0	276.82	鉄、陶形滓*
283	B	SB19	PI、下層	金属	鉄滓	49.0	45.0	23.0	88.78	鉄
284	A	SB3	上層	金属製品	鉄貨	外径 28.0	内径 6.0	1.1	4.62	真鍮、寛永通宝四文銭、背11度、文政4~8(1821~25)年製造*
285	A	横出面		金属製品	鉄貨	外径 27.5	内径 6.0	0.9	4.48	真鍮、寛永通宝四文銭、背11度、文政4~6(1857~59)年製造*
286	A	横出面	北西	金属製品	銭貨	外径 2.2	—	1.05	3.01	銅質*、平銭銅貨、明治9年製造
287	D	SB20	床	土製品	粘輝率	5.0	0.55	0.6	16.1	残存率4.8

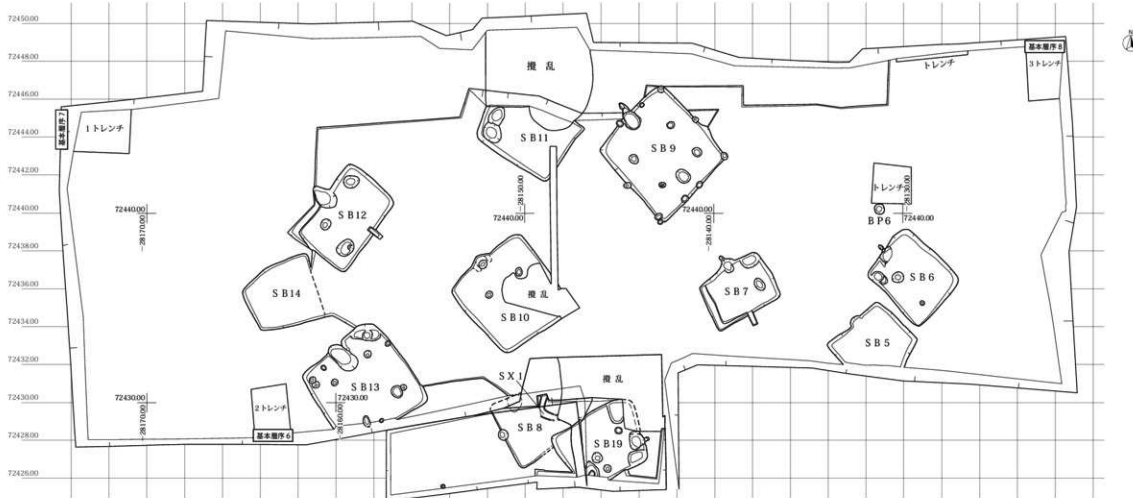
引用・参考文献

- 青木和明1984「箱清水式土器の編年の予察」『長野県考古学会誌』48号、長野県考古学会
- 石川日出志2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号、長野県考古学会
- 2012「Ⅱ栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター調査報告書100
- 飯島哲也1991「長野市松原遺跡出土の石戈について」『長野県考古学会誌』63号、長野県考古学会
- 飯田市教育委員会2007『埴川遺跡群官衙編』
- 茨城県立歴史館1991『茨城県史料』考古資料編弥生時代
- 神野恵・川越俊一2003「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』（独）奈良文化財研究所
- 上水内郡誌編集会1976『長野県上水内郡誌』
- 笹澤 浩1970「長野市泉町遺跡緊急発掘調査略報」『長野』30号
- 1982a「泉町遺跡」『長野県史』考古資料編主要遺跡（北・東信）
- 1982b「平柴平遺跡」『長野県史』考古資料編主要遺跡（北・東信）
- 2012「長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡」『中野市柳沢遺跡』、助長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 杉戸信彦ほか2015「長野盆地西縁の変動と活断層」『地質学雑誌』121号
- 杉戸信彦2014「1847年善光寺地震の地表地殻断層に関する既存資料の整理」『人間環境論集』14-3
法政大学人間環境学会
- 鈴木素行2011『泉坂下遺跡の研究』
- 喬木村教育委員会2011『阿島五反田遺跡』
- 寺島孝典1999「長野盆地南部の様相」『99シンポジウム長野県の弥生土器編年』、長野県考古学会
- 2013「栗林土器の成立と展開」『文化の十字路 信州』（社）日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集、⑧日本考古学協会
- 寺島典人2015「塑像断片（善光寺仁王門東地点出土）について」『信仰のみち』、長野市立博物館
- 豊野層団研究グループ1977「長野盆地西縁部の第四系」『地質学論集』14号
- （財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター1998～2000「松原遺跡」
長野県埋蔵文化財センター調査報告書36
- 1999「榎田遺跡」長野県埋蔵文化財センター調査報告書37
- 2000「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」長野県埋蔵文化財センター調査報告書54
- 2012「中野市柳沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター調査報告書100
- 2012「浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡」長野県埋蔵文化財センター調査報告書113
- 長野県1982『長野県史』考古資料編主要遺跡（北・東信）
- 長野市1997『長野市誌』第1巻自然編第2章第2節3
- 長野市2000『長野市誌』第2巻歴史編原始・古代・中世
- 長野市教育委員会1971「平柴平遺跡緊急発掘調査概報」
- 1991「小島柳原遺跡群中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・榎田遺跡」長野市の埋蔵文化財第41集
- 1993「松原遺跡Ⅲ」長野市の埋蔵文化財第58集

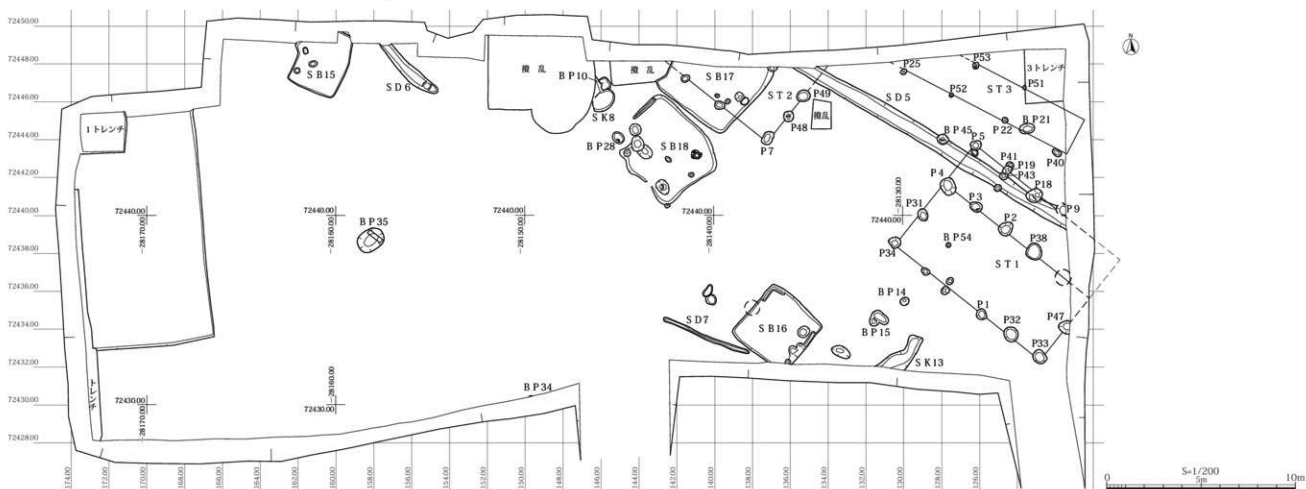
- 1998『長野遺跡群西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
- 2001『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集
- 2004『浅川扇状地遺跡群榎田遺跡』長野市の埋蔵文化財第105集
- 2006『長野遺跡群善光寺門前町跡』長野市の埋蔵文化財第115集
- 2008『長野遺跡群元善町遺跡・善光寺門前町跡（2）』長野市の埋蔵文化財第121集
- 2009『長野遺跡群元善町遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第123集
- 2012『浅川扇状地遺跡群桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第130集
- 2017『長野遺跡群県町遺跡』長野市の埋蔵文化財第147集
- 新名 強2013『古代東海地方における製塩状況－伊勢の事例を中心に－』『塩の生産・流通と官衙・集落』
第16回古代官衙集落研究会報告書、(独)奈良文化財研究所
- 費田 明2000a『第Ⅱ部第2章第4節土器が埋設される柱穴・土坑について』『松原遺跡』弥生・総論1 弥生中期・遺構本文
長野県埋蔵文化財センター調査報告書36、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 2000b『第Ⅱ部第2章堅穴住居址』『松原遺跡』弥生・総論1 弥生中期・遺構本文
長野県埋蔵文化財センター調査報告書36、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 馬場伸一郎2008a『武器形石製品と弥生中期栗林式文化』『赤い土器のクニ』の考古学、川崎保編、榊原山園
2008b『弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』
第145集、(独)国立歴史民俗博物館
- 2013『弥生集落と地域社会』『文化の十字路 信州』(社)日本考古学協会2013年度長野大会研究
発表資料集、(社)日本考古学協会
- 馬場伸一郎・遠藤英子2017『弥生時代中期の栗林式土器分布圏における栽培穀物』『明治大学黒耀石研究セン
ター紀要』第7号、明治大学黒耀石研究センター
- 原 明芳2011『信濃の陶硯』『長野県立歴史館研究紀要』17号、長野県立歴史館
- 平野 修2017『内陸地域における古代製塩生産と流通』帝京大学文化財研究所『研究報告』第16集
- 藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘2005『弥生時代の開始年代』『総研大文化科学研究』1号、総合研究大学院大学
- 町田勝則2008『石器に弥生の社会を読む』『赤い土器のクニ』の考古学、川崎保編、榊原山園
- 水沢教子・建石徹2011『屋敷遺跡群出土土器胎土の検討』『長野県立歴史館研究紀要』17号、長野県立歴史館



B区上層・北棟立会区

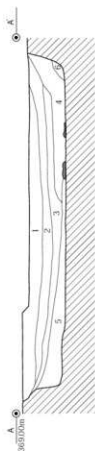
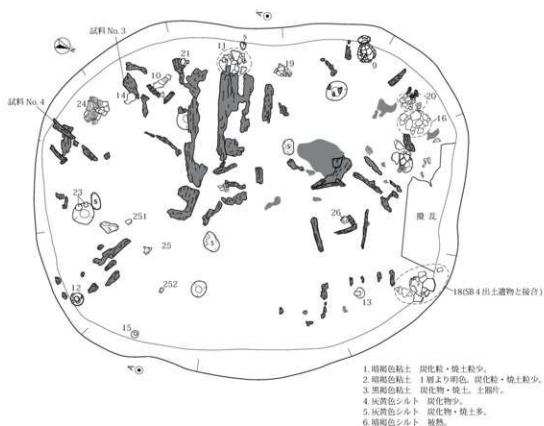


B区下層

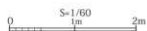
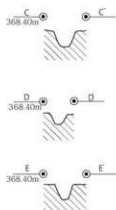
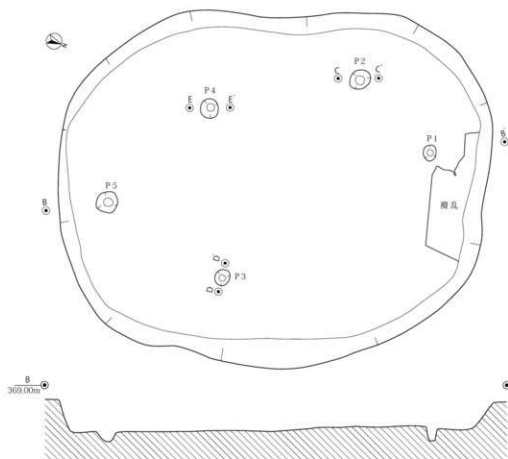


SB 3

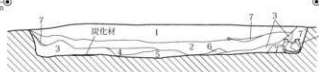
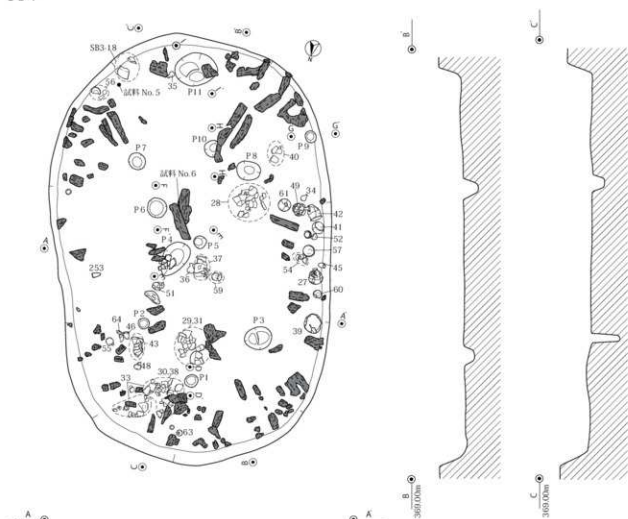
遺物出土状況



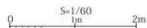
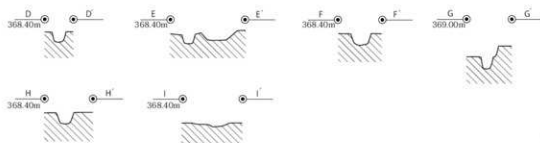
完掘状況



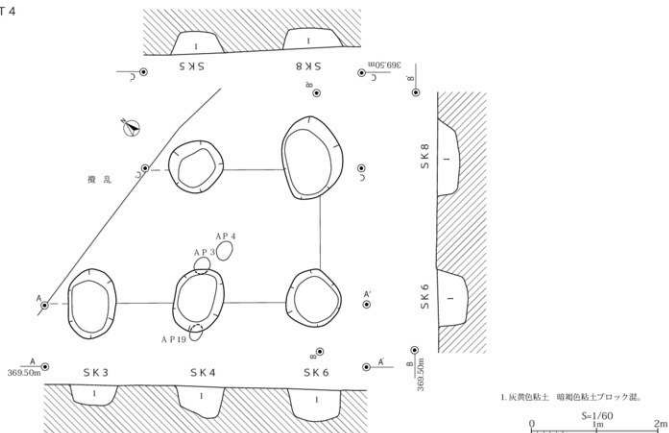
SB4



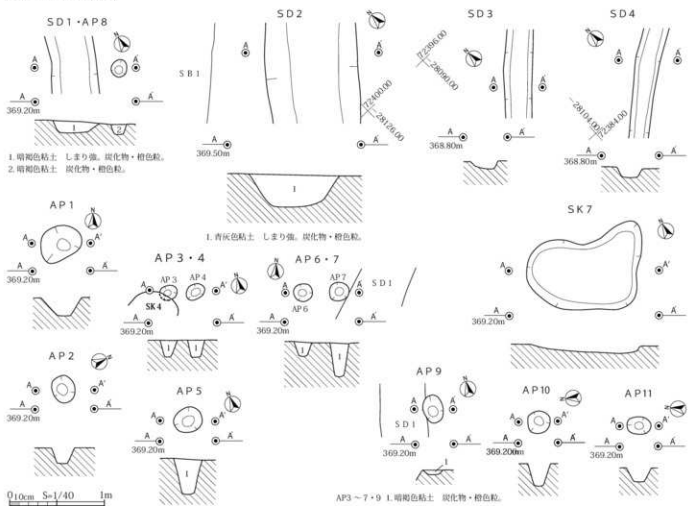
1. 暗褐色粘土 しまりやや強。炭化粒・焼土粒少。
2. 黒褐色粘土 炭化物・焼土やや多。
3. 灰黄色粘土 炭化物・焼土少。
4. 暗褐色粘土 炭化物・焼土。
5. 黒褐色粘土 しまり強。炭化物多。
6. 暗褐色シルト 焼土多。
- 7・7. 灰黄色粘土 炭化物・焼土少。焼熟。



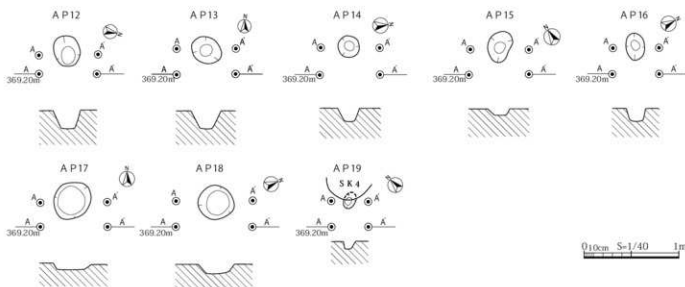
ST4



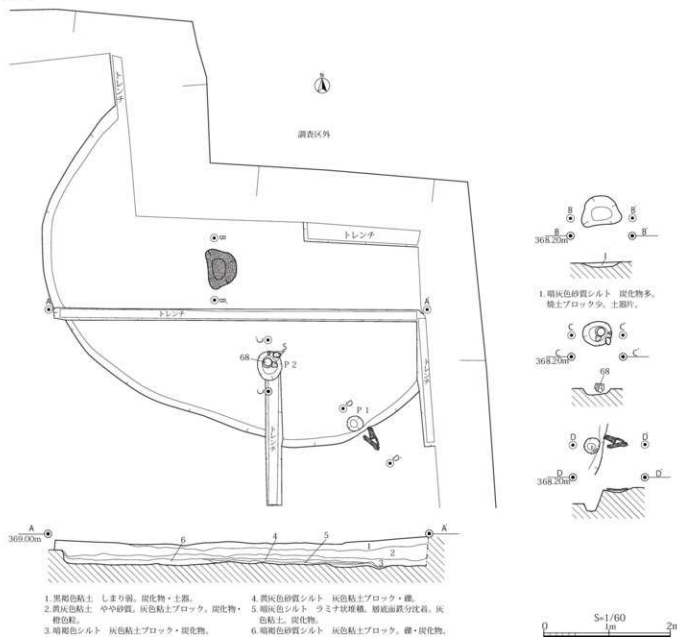
溝跡・土坑・小穴 (1)



小穴(2)

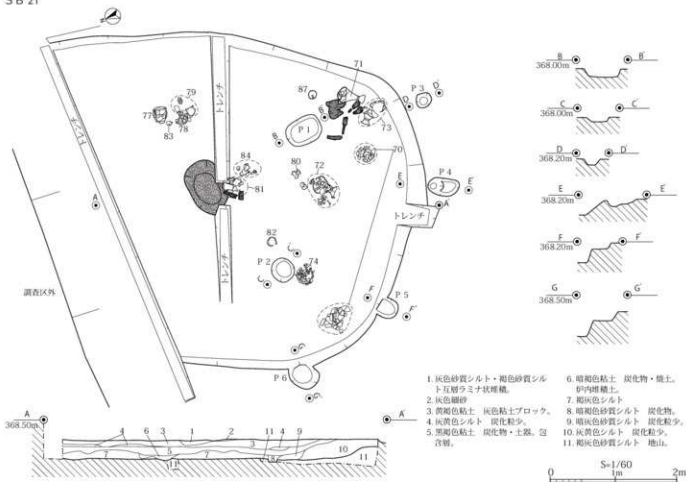


SB20



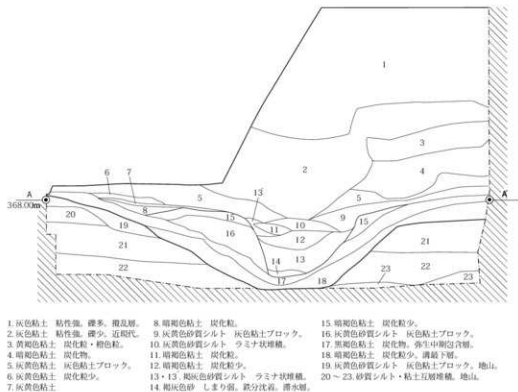
1. 黒褐色粘土 しまり弱。炭化物・土源。
2. 黄灰色粘土 中や砂質。灰色粘土ブロック。炭化物・褐色粒。
3. 暗褐色シルト 灰色粘土ブロック・炭化物。
4. 黄灰色砂質シルト 灰色粘土ブロック・礫。
5. 暗灰色シルト ラミナ状堆積。層底面起伏着。灰色粘土。炭化物。
6. 暗褐色砂質シルト 灰色粘土ブロック。礫・炭化物。

SB 21



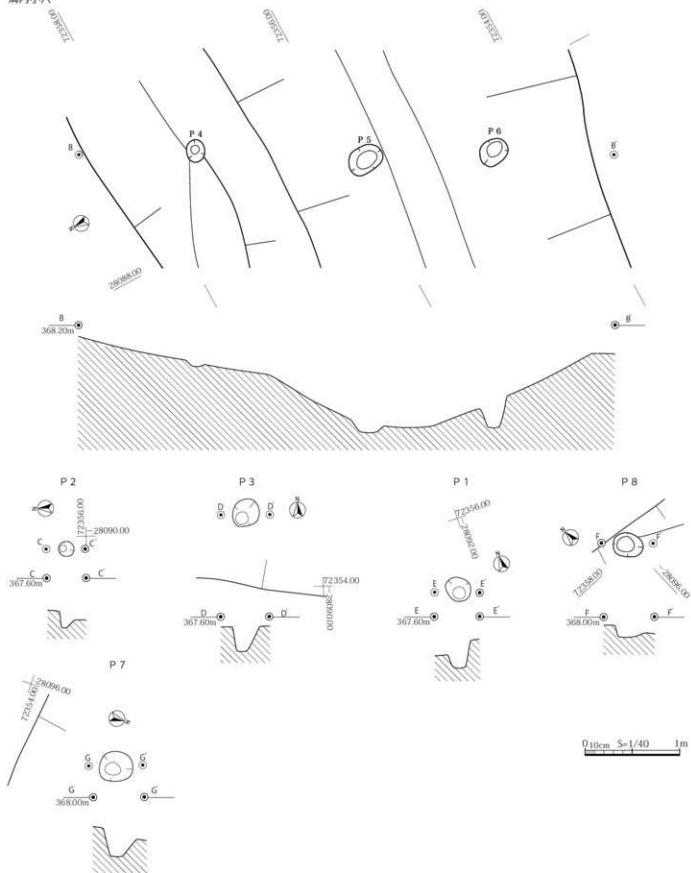
DSD4 (1)

土層断面

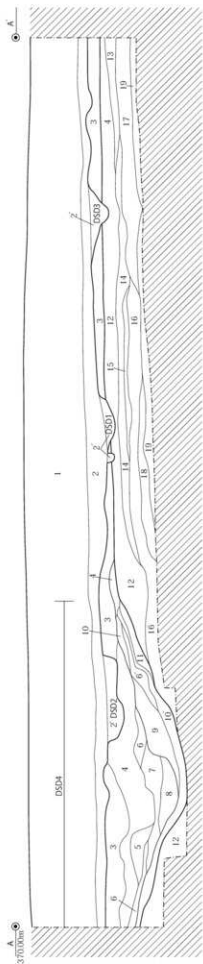


DSD4 (2)

溝内小穴



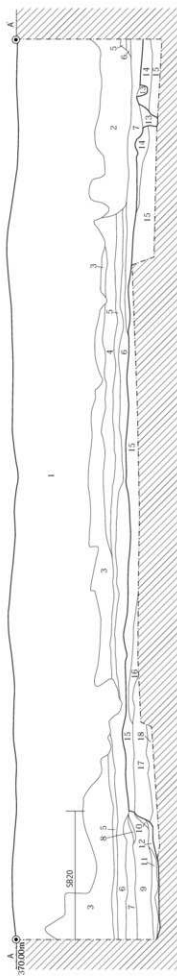
D区西壁土層断面



- 1 灰包粘土 粘性强、コンクリート・礎多、層厚。
- 2 灰包粘土 粘性强、礎少、外周部も含む。
- 3 灰包粘土 粘性强、礎少、外周部も含む。
- 4 灰包粘土 粘性弱。
- 5 褐色砂質シルト 粘性强。
- 6・6 灰包粘土 9・10 層上プロック層。
- 7 褐色砂質シルト、クマナ砂質層。
- 8 灰包砂 シルト・細砂・砂質粘厚層。
- 9 灰包粘土 しまり気、上下層上プロック。
- 10 褐色砂質シルト 砂・泥状。
- 11 褐色砂質シルト 灰包粘土上プロック、地山。
- 12 灰包砂質シルト 砂・泥状。
- 13 赤灰色砂質シルト 泥状、粗色粘、地山。
- 14 灰包粘土 地山。

- 15 灰包シルト 砂、地山。
- 16 灰包シルト 泥状、地山。
- 17 灰包シルト しまり気、地山。
- 18 褐色砂質シルト 地山。
- 19 褐色砂質シルト しまり気、地山。

D区東壁土層断面



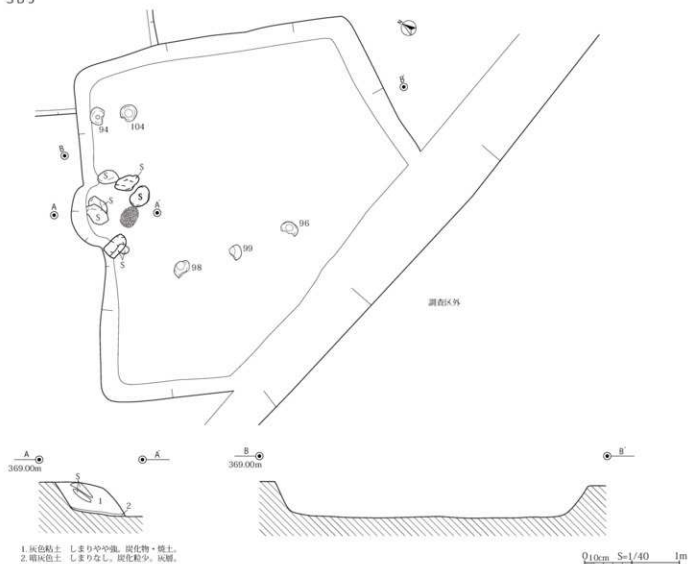
- 1 灰包粘土 粘性强、コンクリート・礎多、層厚。
- 2 灰包粘土 粘性强、礎少、基礎代。
- 3 灰包粘土 粘性强、礎少、粗色粘。
- 4 褐色砂質シルト 泥状、粗色粘。
- 5 褐色砂質シルト 泥状。
- 6 灰包粘土 粘性强。
- 7 灰包粘土 しまり気、灰包粘土・礎付、外周・中周部も含む。

- 8 褐色砂質シルト 灰包粘土。
- 9 褐色砂質シルト 中砂質、灰包粘土上プロック。
- 10 褐色砂質シルト 灰包粘土上プロック。
- 11 褐色砂質シルト 灰包粘土上プロック。
- 12 褐色砂質シルト クマナ砂質層、褐色砂質シルト。
- 13 灰包粘土 礎付、地山。
- 14 灰包シルト 地山。

- 15 褐色砂質シルト 砂、地山。
- 16 褐色砂質シルト 地山。
- 17 褐色砂質シルト 灰包粘土。
- 18 褐色砂質シルト 砂多、灰包粘土、地山。

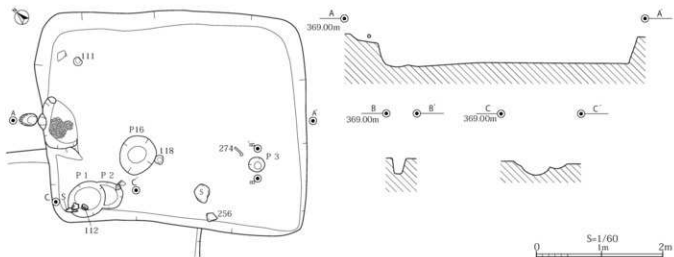


SB 5

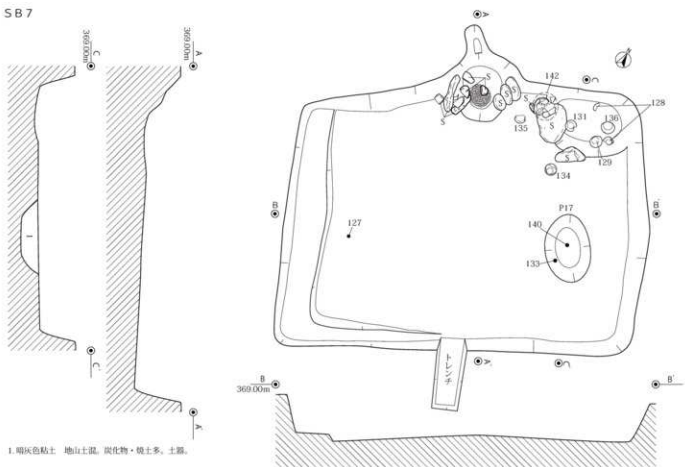


1. 灰色粘土 しまりや中強。炭化物・焼土。
 2. 暗灰色土 しまりなし。炭化量少。灰層。

SB 6

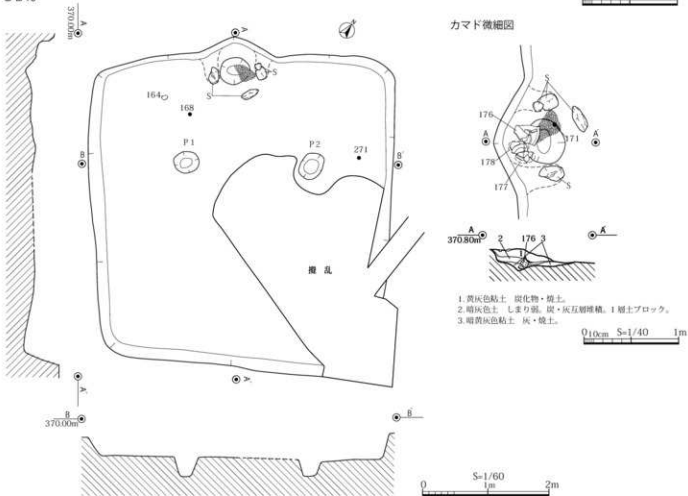


SB7



1. 明灰色粘土 地山土混。炭化物・焼土多。土跡。

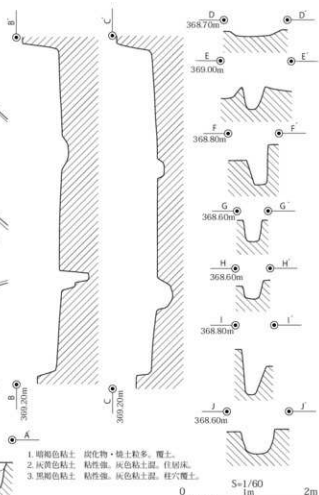
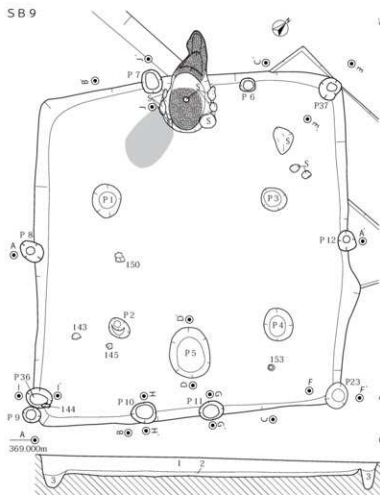
SB10



カマド微細図

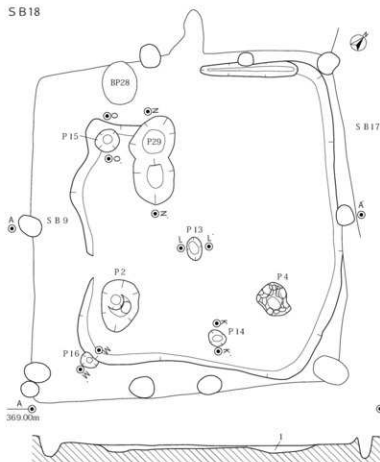
1. 黄灰色粘土 炭化物・焼土。
2. 暗灰色土 しまり強。炭・灰互層堆積。1層土ブロック。
3. 明黄灰色粘土 灰・焼土。

SB 9



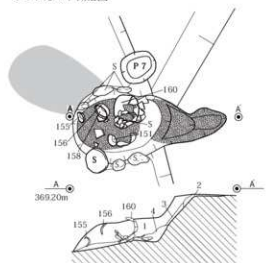
1. 暗褐色粘土 炭化物・焼土粒多。覆土。
2. 灰黄色粘土 粘性強。灰色粘土混。自腐床。
3. 黒褐色粘土 粘性強。灰色粘土混。柱穴覆土。

SB 18

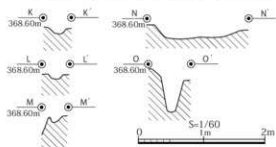


1. 灰色粘土 炭化物・焼土。

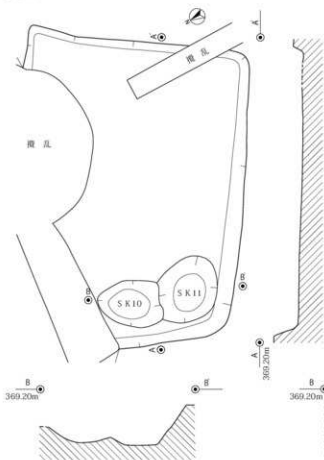
SB 9カマド微細図



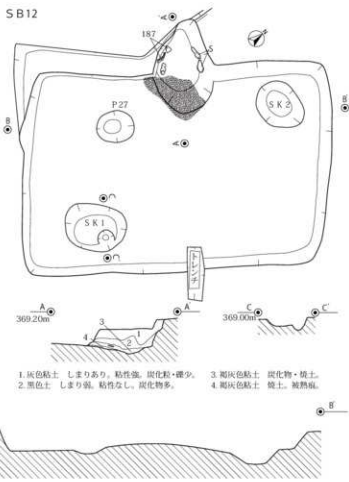
1. 灰黄色粘土 粘性強。炭化物・焼土粒多。カマド構築土。
2. 暗褐色土 粘性弱。焼熱。押通内土。
3. 暗灰黄色粘土 炭化物・焼土多。
4. 暗灰色粘土 炭化物・焼土・灰多。



SB11



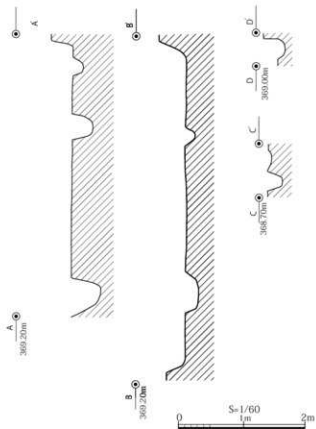
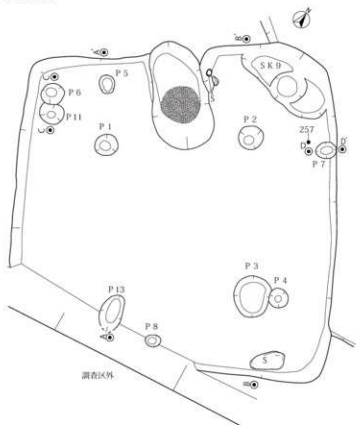
SB12



1. 灰色粘土 しまりあり、粘性強、炭化粒・礫少。
2. 黒色土 しまり弱、粘性なし、炭化物多。
3. 期灰色粘土 炭化物・硝土。
4. 期灰色粘土 硝土、凝熟礫。

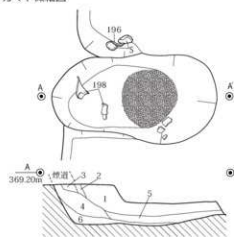


SB13 (1)



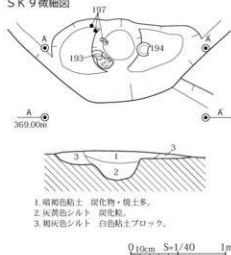
SB13 (2)

カマド微細図



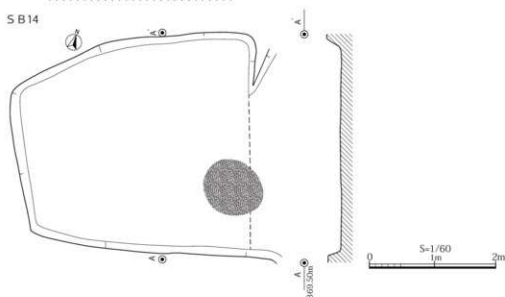
1. 灰色粘土 しまりあり、粘性強。炭化粒・燻少。
2. 暗灰色粘土 炭化物。燻熱痕。
3. 灰色粘土 1層土ブロック・炭化物。
4. 黄粘土 しまり弱。粘性なし。炭化物多。
5. 灰色粘土 炭化物・焼土。
6. 暗灰色粘土 焼土多。燻熱痕。

SK9微細図

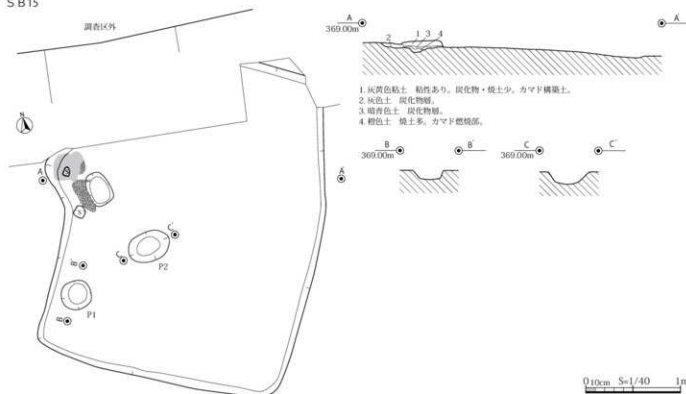


1. 暗褐色粘土 炭化物・焼土多。
2. 灰黄色シルト 炭化粒。
3. 暗灰色シルト 白色粘土ブロック。

SB14

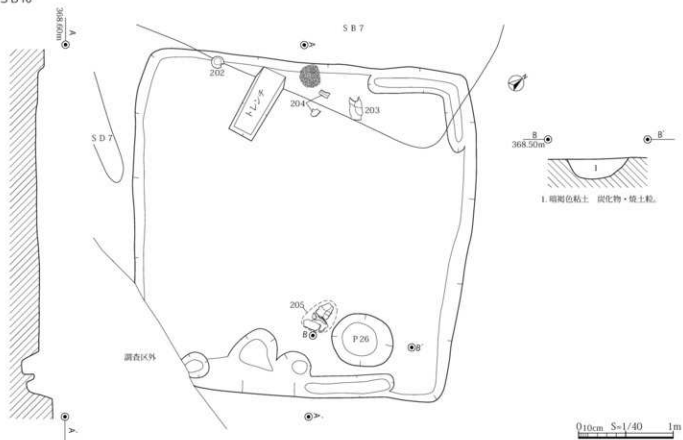


SB15

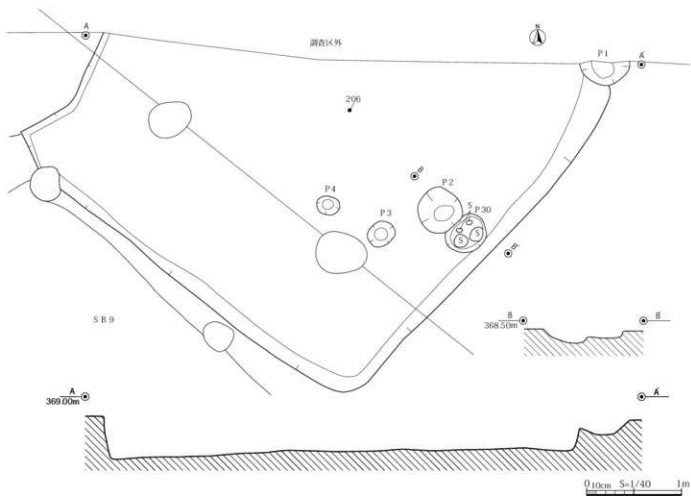


1. 灰黄色粘土 粘性あり、炭化物・焼土少。カマド構築土。
2. 灰色土 炭化物弱。
3. 暗青色土 炭化物弱。
4. 褐色土 焼土多。カマド燃焼部。

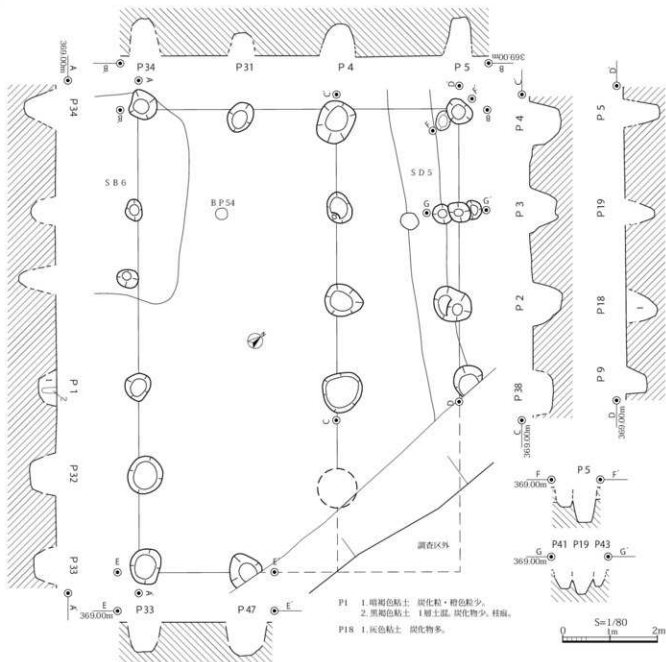
SB16



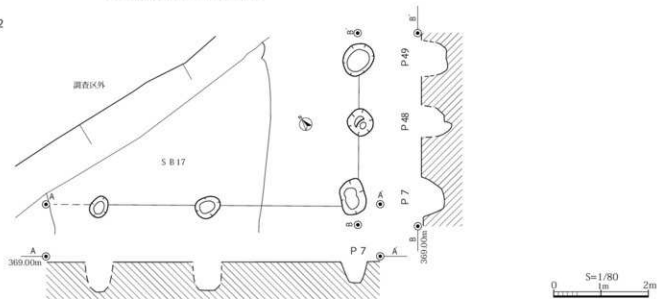
SB17



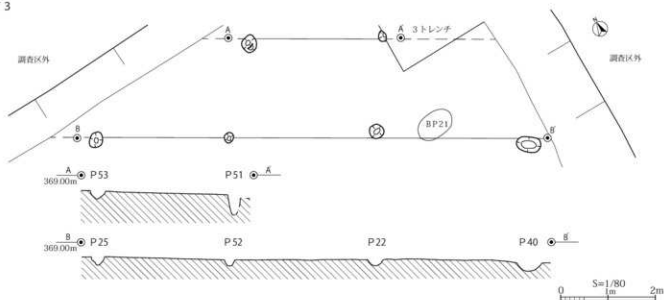
ST 1



ST 2

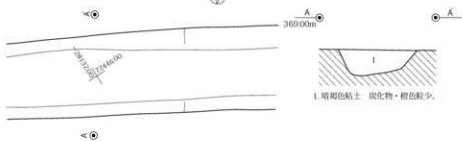


ST 3

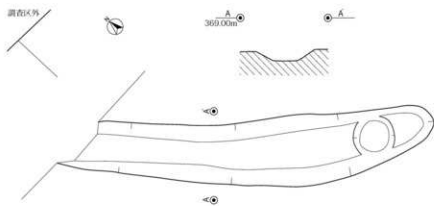


溝跡・土坑・小穴(1)

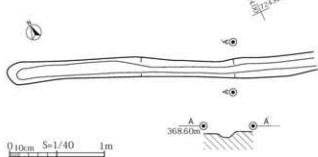
SD 5



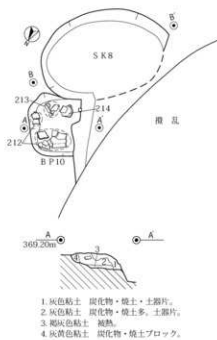
SD 6



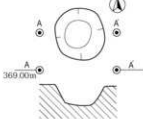
SD 7



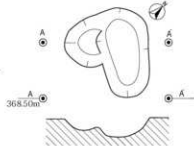
SK 8・BP10



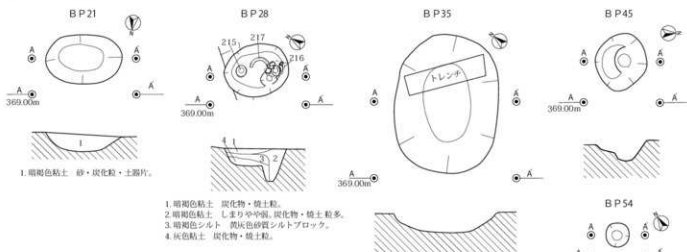
BP 6



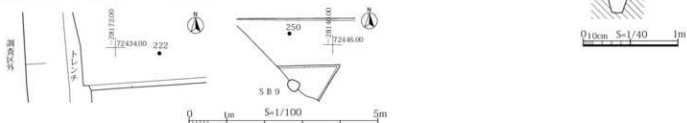
BP 15



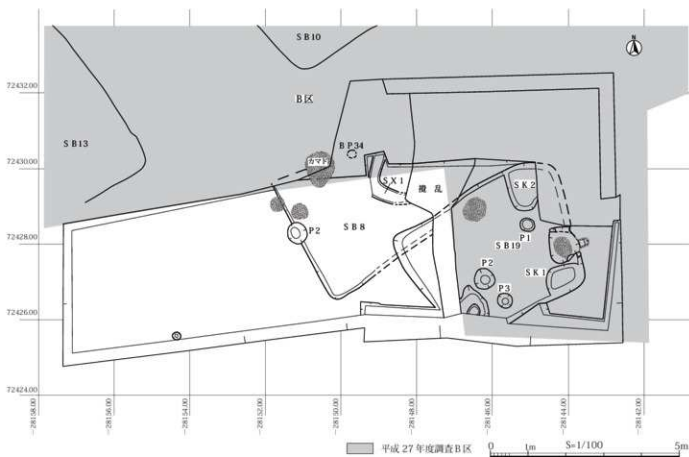
溝跡・土坑・小穴(2)



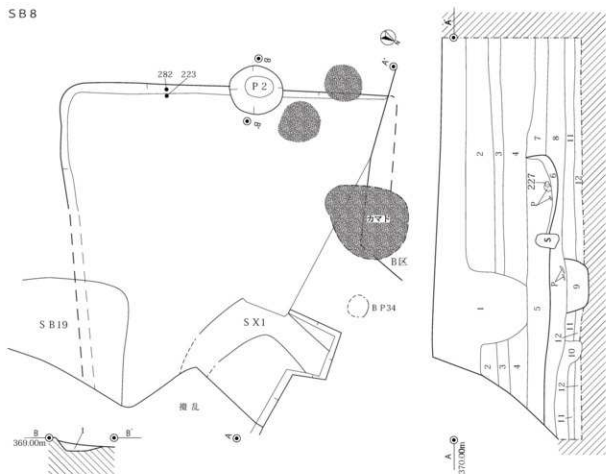
弥生土器(222)・打製石斧(250)出土位置



北棟立会区全体図



SB 8

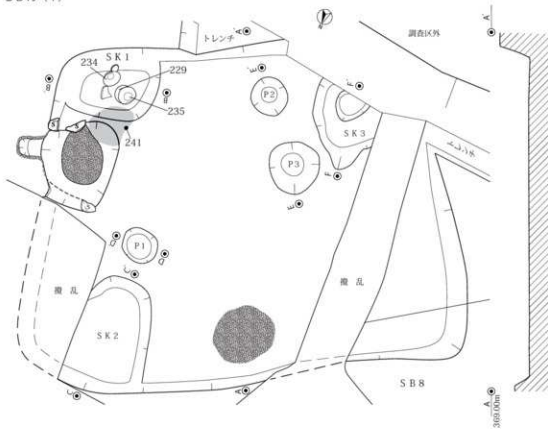


L 暗褐色粘土 焼土・灰。

1. 暗褐色粘土 雑多、コンクリート・炭化物、撥丸。
- 2・3. 灰色粘土 鉄分沈着。
4. 暗褐色粘土 炭化物・褐色粒。
5. 暗褐色粘土 炭化物・褐色粒やや多。土器、SB8 覆土。
6. 黒色土 炭化物・焼土多。カマド。
7. 灰黄色粘土 しまりあり。

8. 暗褐色粘土 炭化物・褐色粒。上層横出面。
9. 暗褐色粘土 炭化物・焼土多。BP24 覆土。
10. 暗褐色粘土 炭化物。
11. 暗褐色粘土 炭化物・褐色粒少。
12. 灰黄色シルト

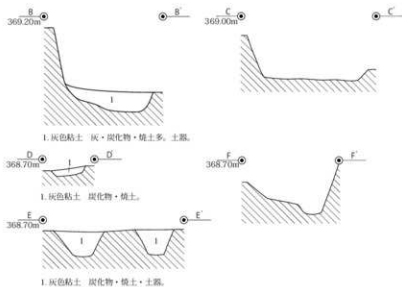
SB 19 (1)



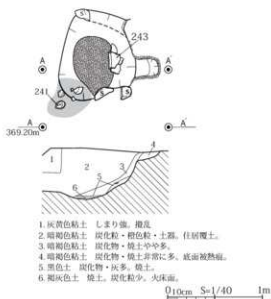
0.10cm S=1/40 1m

0.10cm S=1/40 1m

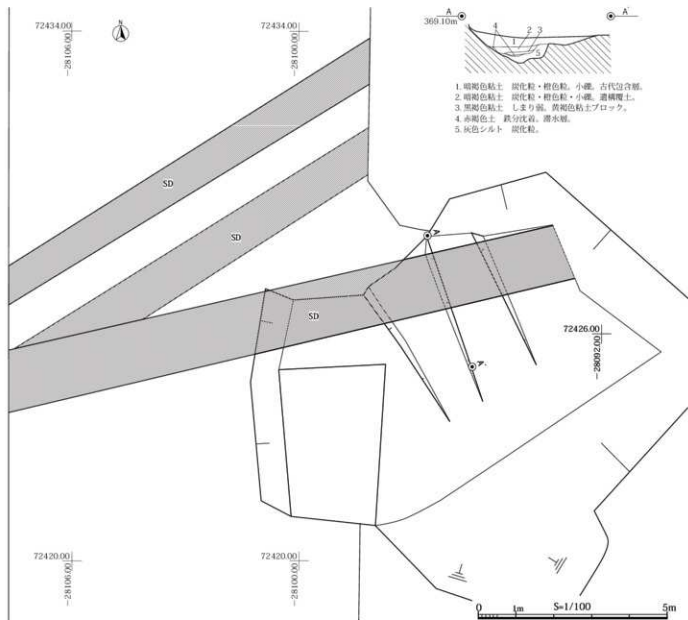
SB19 (2)



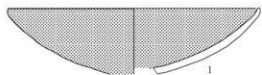
カマド跡細図



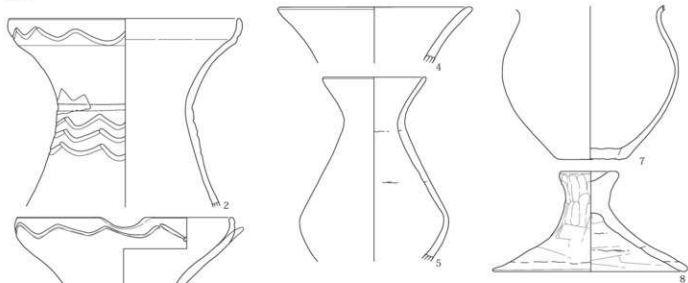
中央棟立会区全体図



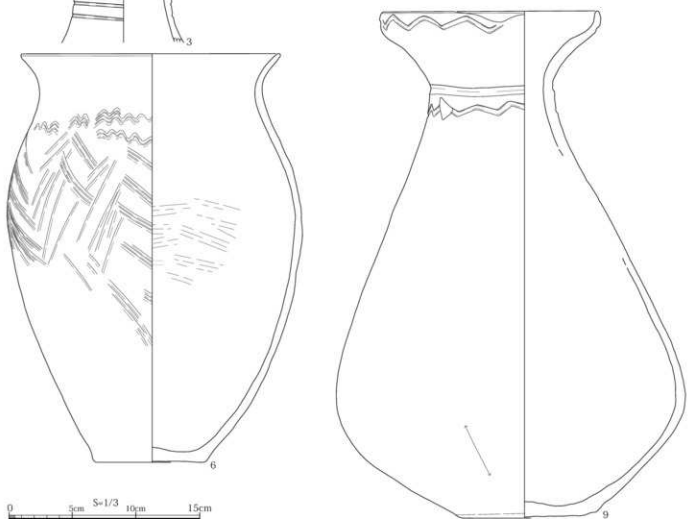
SB 1



SB 2

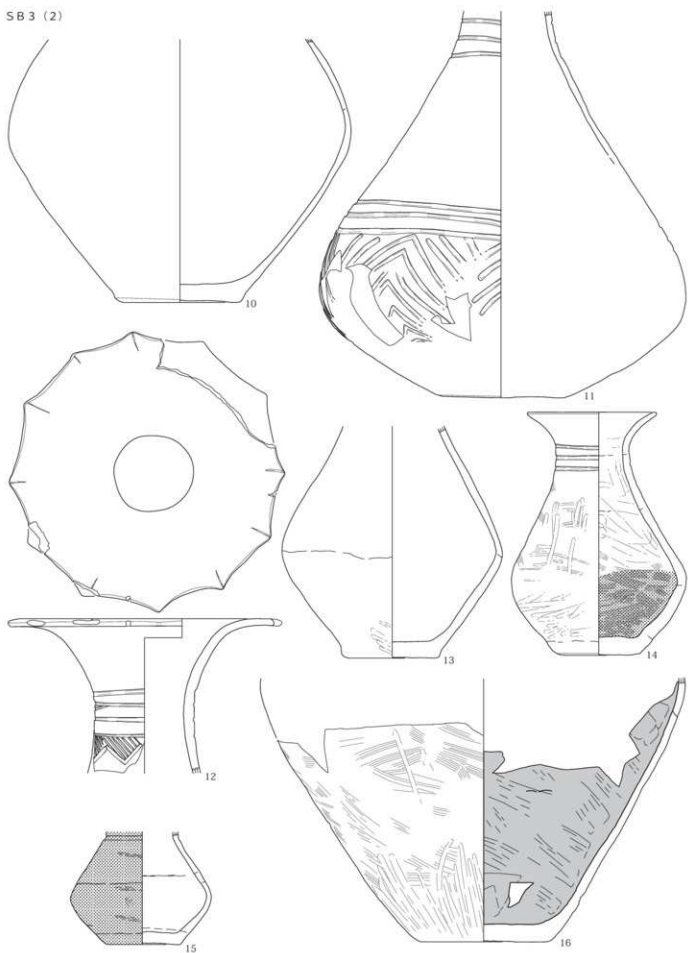


SB 3 (1)



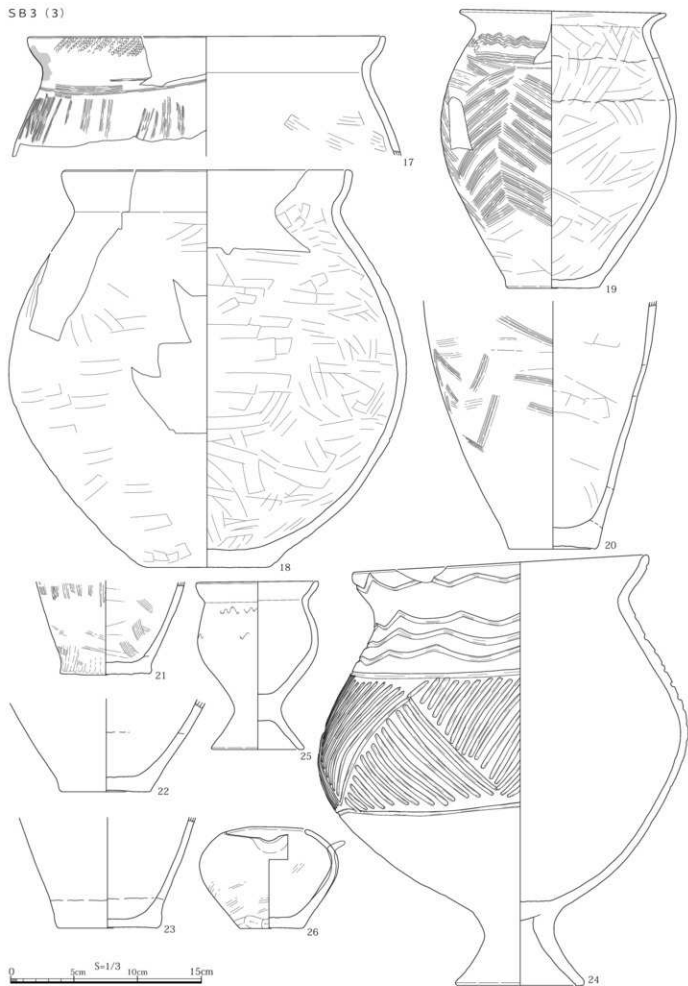
0 5cm S=1/3 10cm 15cm

SB 3 (2)

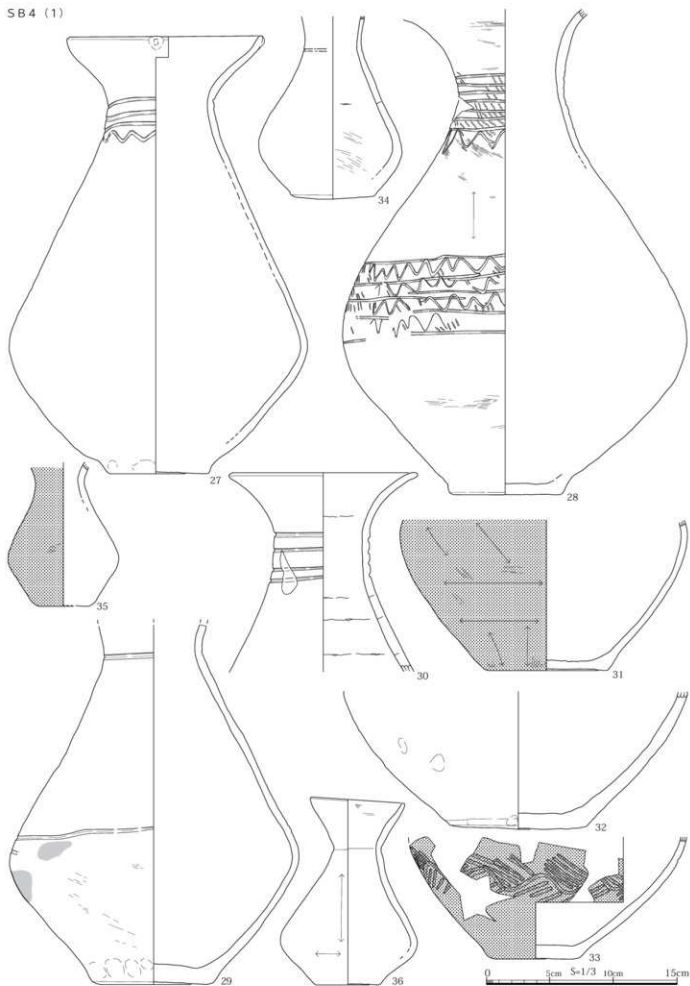


0 5cm S=1/3 10cm 15cm

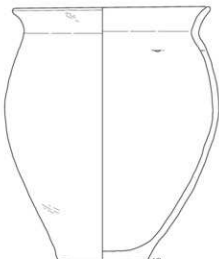
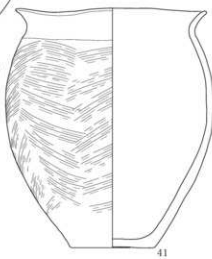
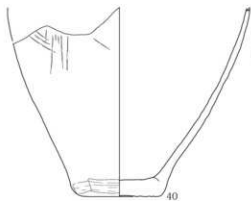
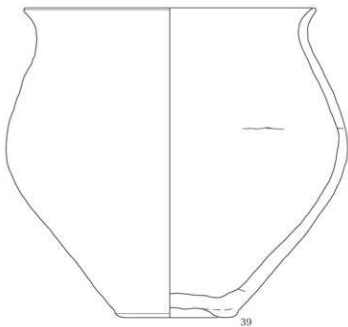
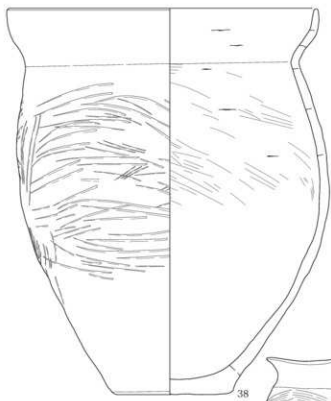
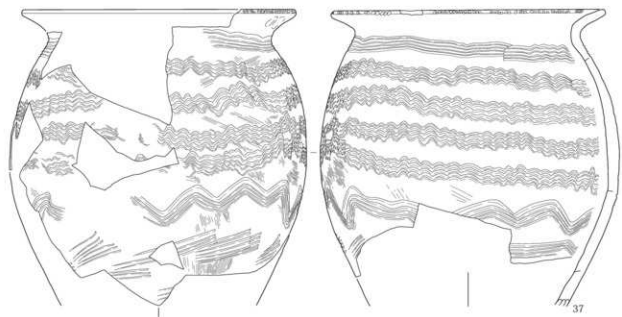
SB 3 (3)



SB4 (1)

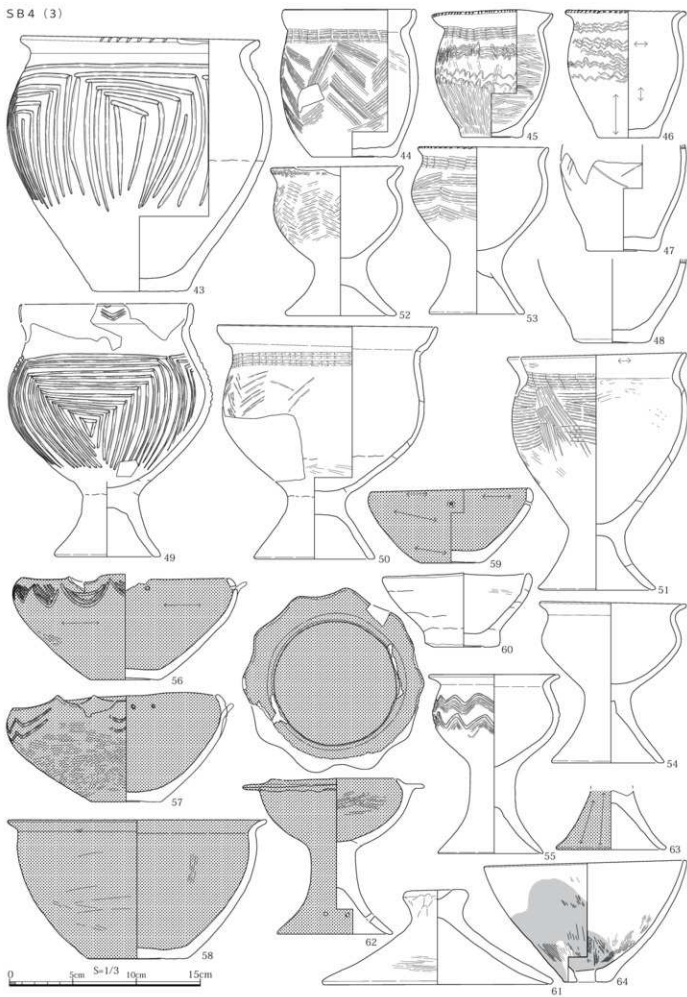


SB 4 (2)

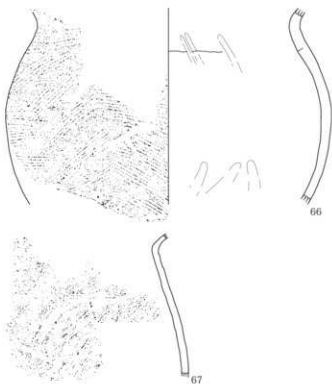
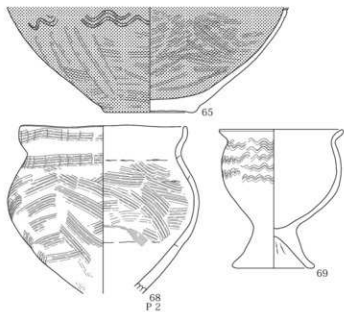


0 5cm S=1/3 10cm 15cm

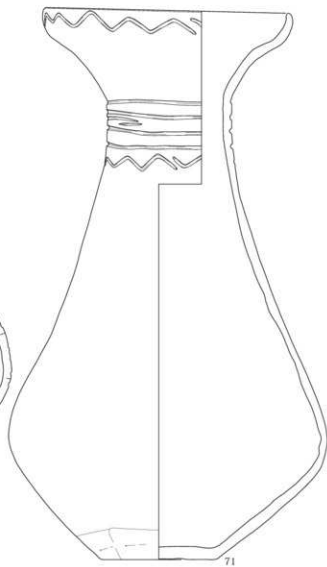
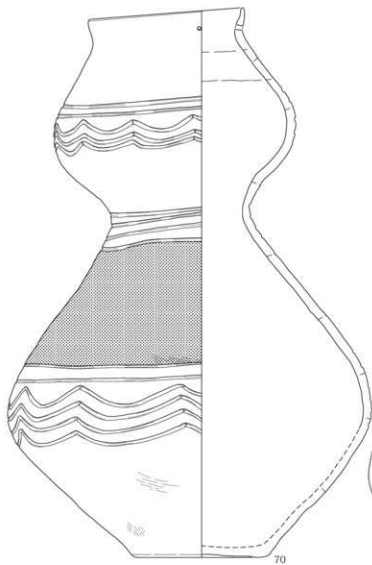
SB 4 (3)



SB20

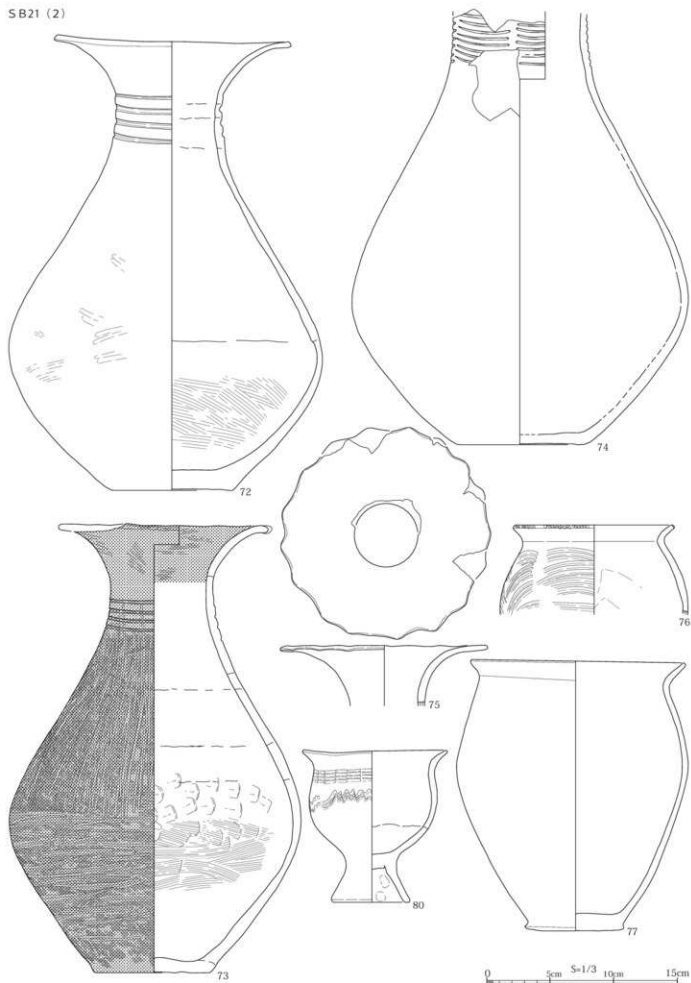


SB21 (1)

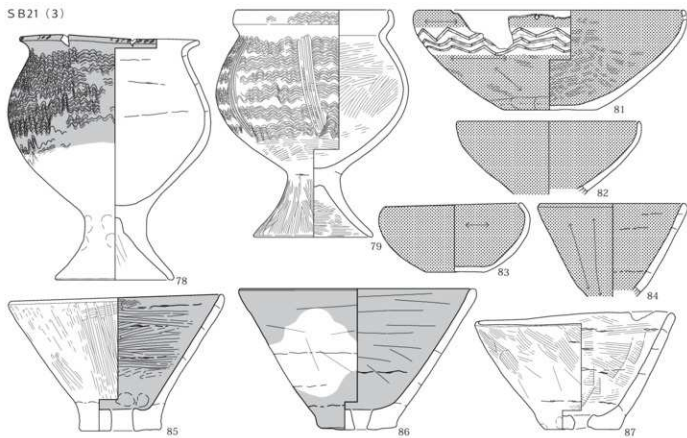


0 5cm S=1/3 10cm 15cm

SB21(2)



SB21 (3)



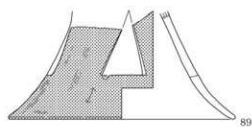
DSD 1



DSD 4

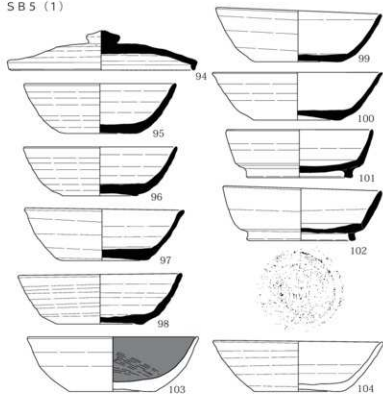


DSD 2

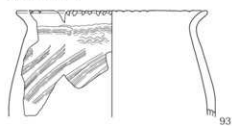


B区

SB5 (1)

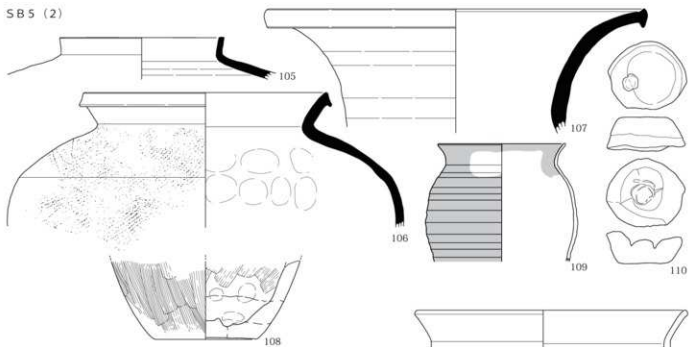


D区道溝検出面

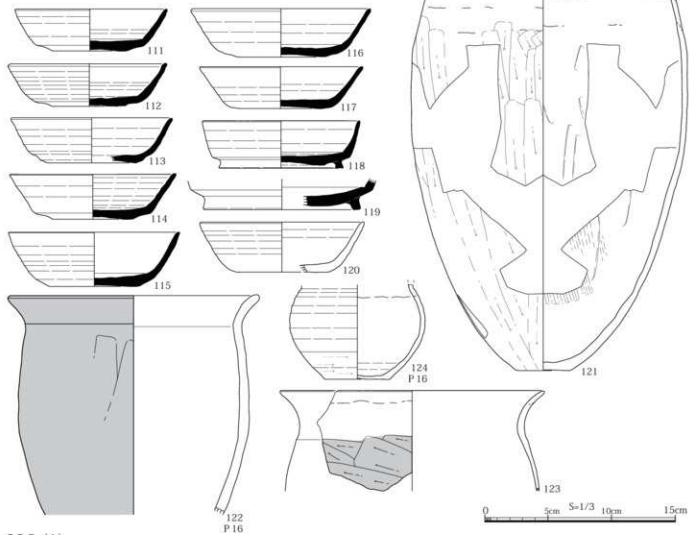


0 5cm S=1/3 10cm 15cm

SB 5 (2)



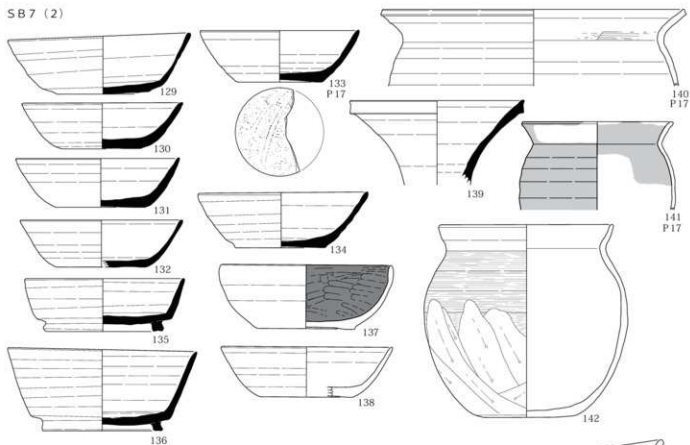
SB 6



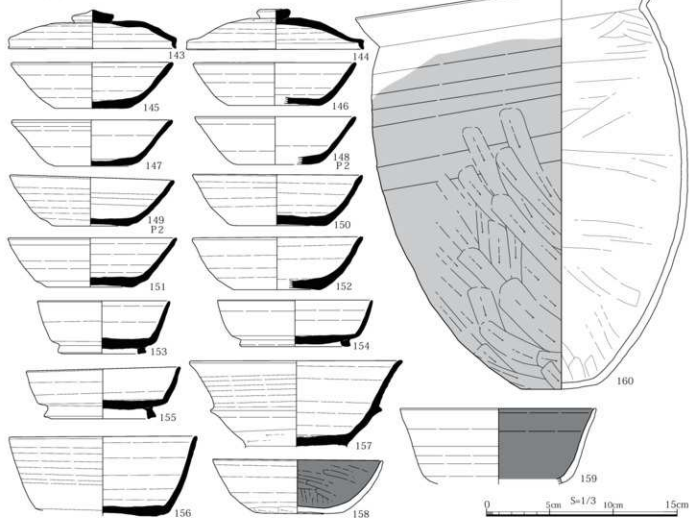
SB 7 (1)



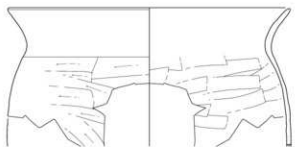
SB7 (2)



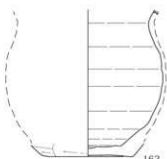
SB9 (1)



SB9 (2)



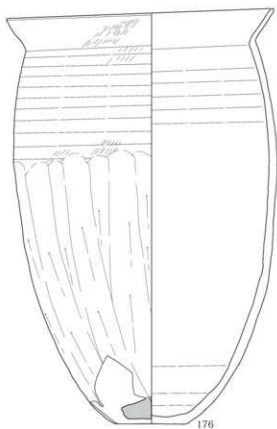
161



162



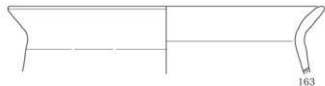
175



176

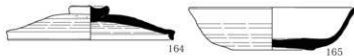
0 5cm $S=1/3$ 10cm 15cm

SB18



163

SB10



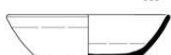
164



165



166



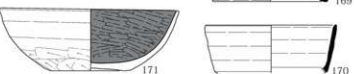
167



168



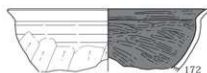
169



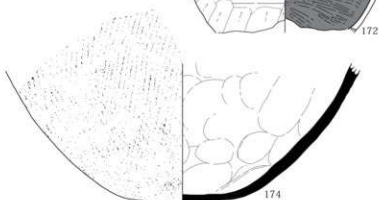
171



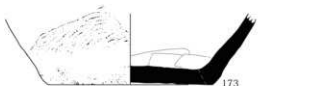
170



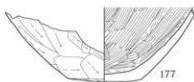
172



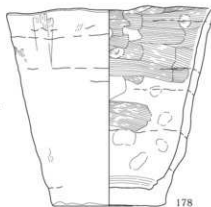
174



173

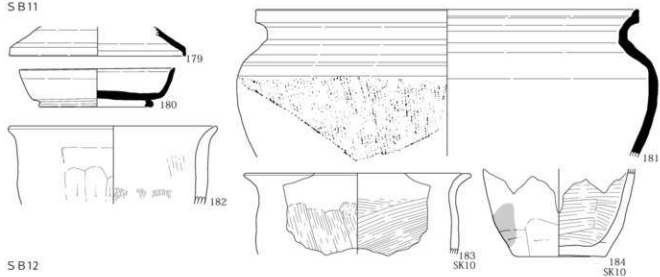


177

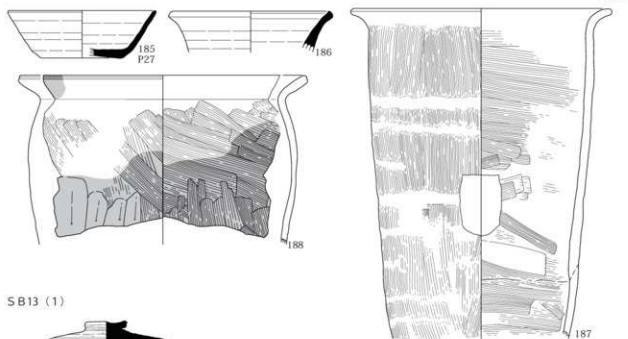


178

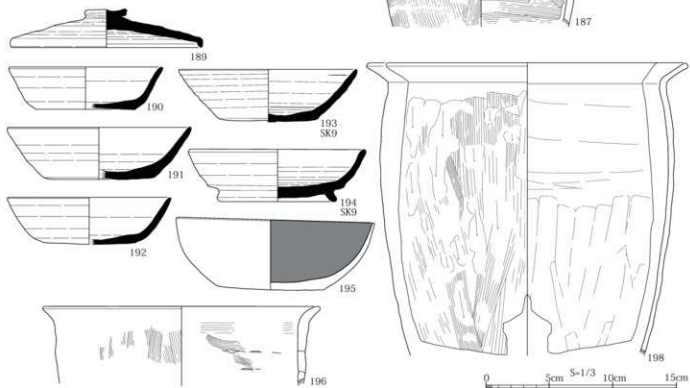
SB11



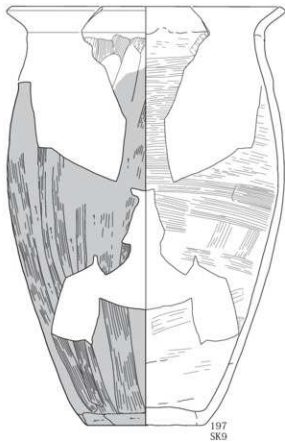
SB12



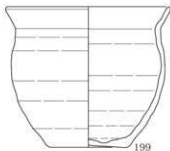
SB13 (1)



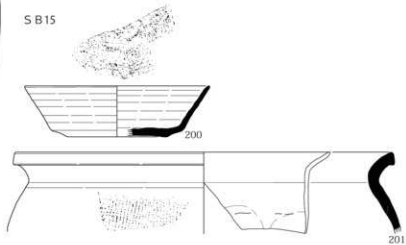
SB13 (2)



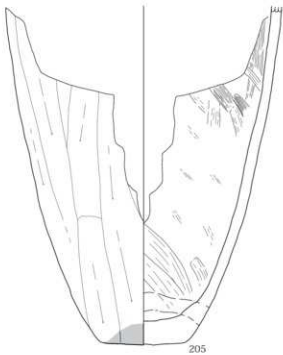
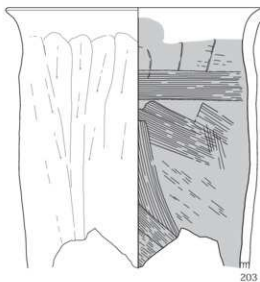
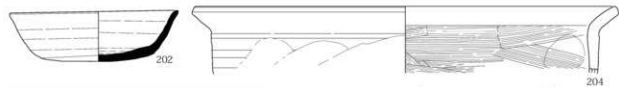
SB14



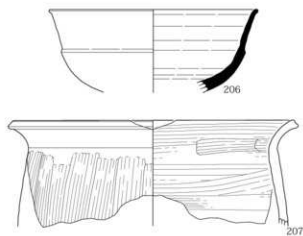
SB15



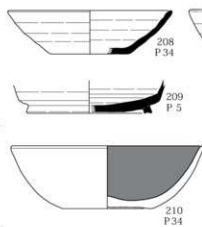
SB16



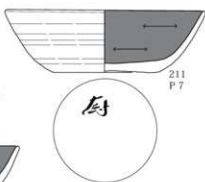
SB17



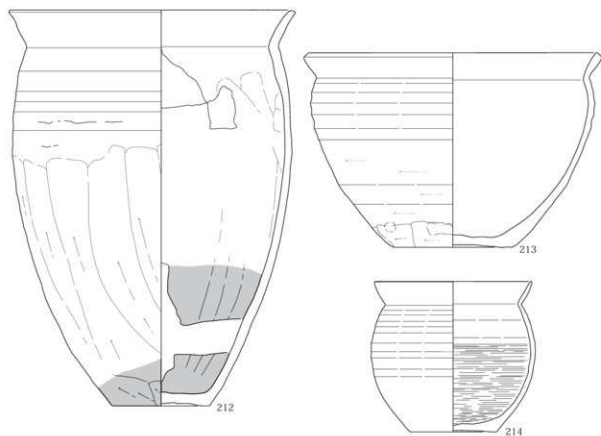
ST 1



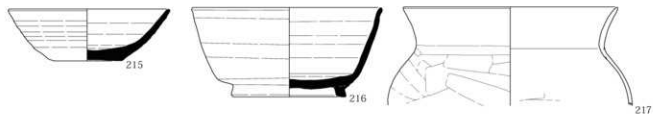
ST 2



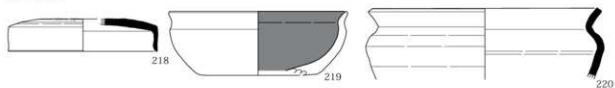
BP10



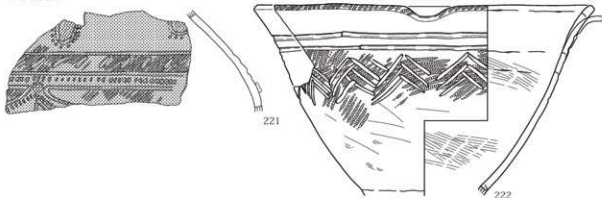
BP28



上層検出面

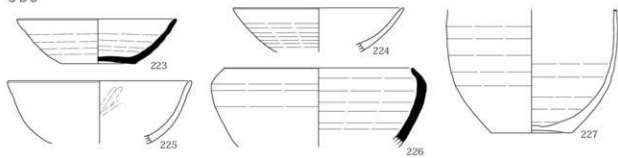


下層検出面

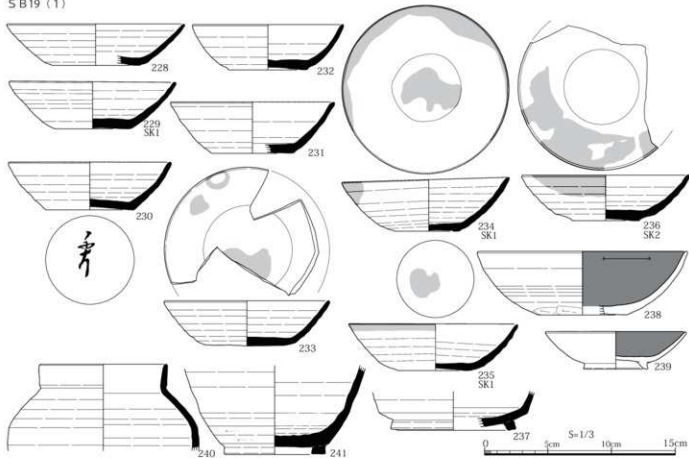


北棟立会調査区

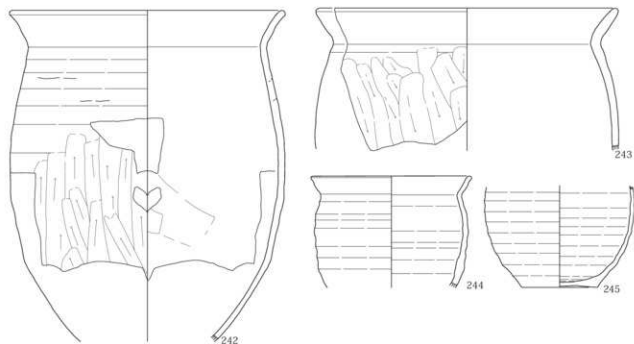
SB 8



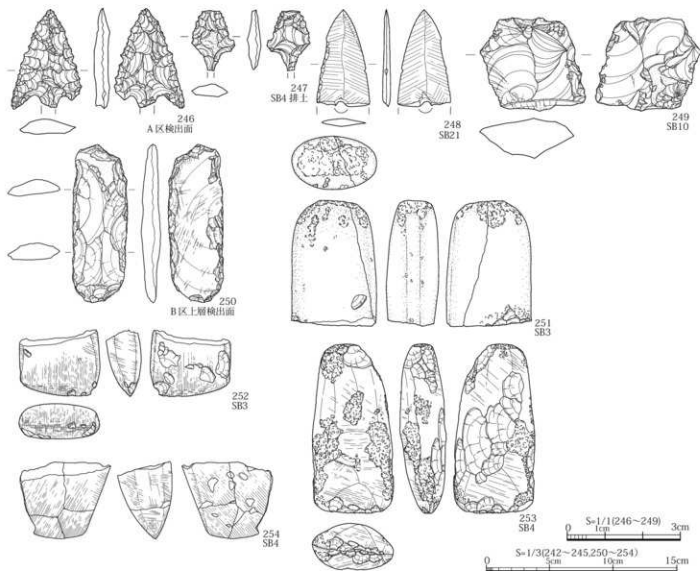
SB 19 (1)



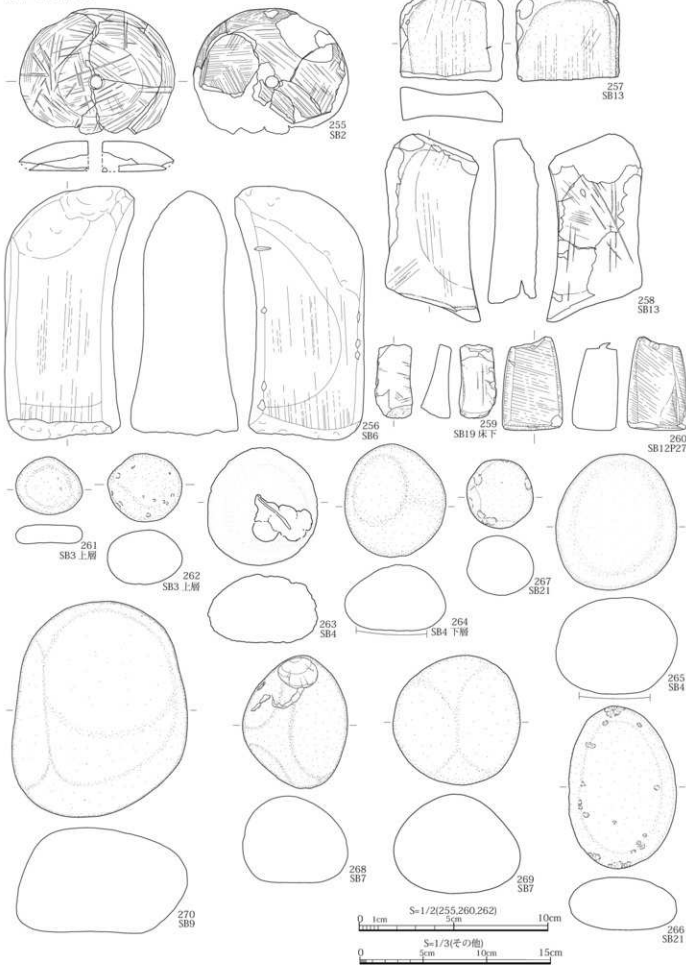
SB19(2)



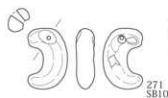
石器・石製品(1)



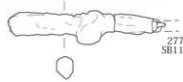
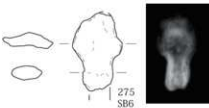
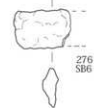
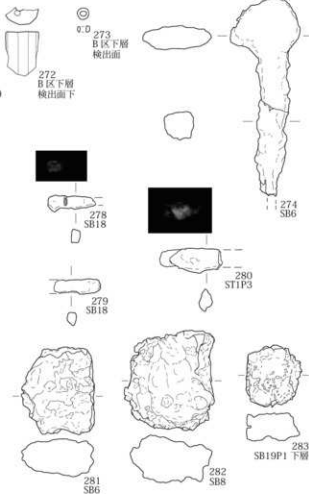
石器・石製品 (2)



玉類

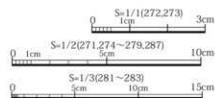


金属製品・鉄滓



土製品

墨書・簡書・線刻 (縮尺任意)





平成 27 年度調査区全景（上が北）



A区全景（上が北）



B区上層西部(上が北)



B区上層東部(上が北)



B区下層全景(東から)



D区西部(南東から)



D区東部(上が南)



S B 1 完掘状況 (北西から)



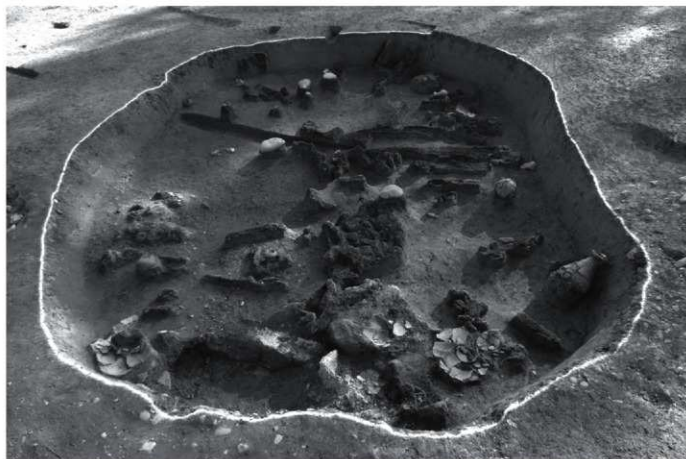
S B 2 完掘状況 (西から)



S B 2 遺物出土状況 (西から)



S B 3 土層断面 (北から)



S B3 遺物出土状況 (北から)



S B3 完掘状況 (北から)



SB4土層断面(北から)



SB4遺物出土状況(上が東)



SB4完掘状況(東から)



SB20土層断面(南から)



S B20 遺物出土状況 (上が南)



S B21 遺物出土状況 (北から)



DSD1完掘状況(北西から)



DSD1土層断面(調査区西壁)



DSD4土層断面(調査区西壁)



DSD4土層断面(調査区東壁)



DSD4完掘状況(西から)



SB5 遺物出土状況(南東から)



SB6 完掘状況(南東から)



SB6カマド完掘状況(南東から)



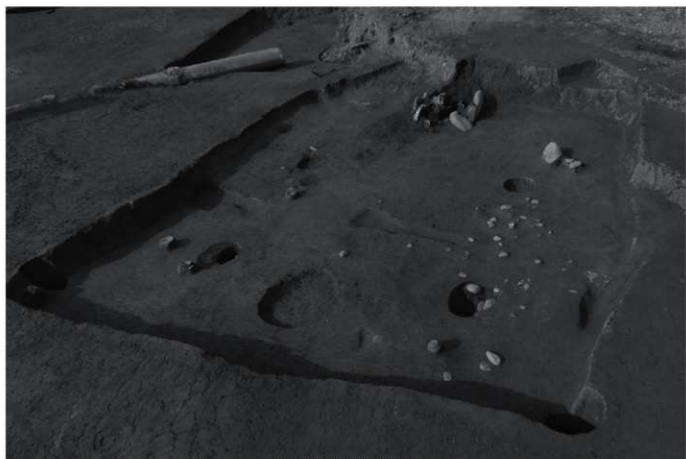
SB6遺物出土状況(南東から)



SB7カマド遺物出土状況(南東から)



SB7完掘状況(南東から)



SB9遺物出土状況(南東から)



S B9 カマド土層断面 (東から)



S B9 カマド遺物出土状況 (南から)



S B10 遺物出土状況 (南東から)



S B10 カマド土層断面 (西から)



S B11 完掘状況 (南東から)



S B 12 遺物出土状況 (南東から)



S B 13 遺物出土状況 (南東から)



S B13 カマド土層断面 (西から)



S B13 S K 9 土層断面 (北から)



S B14 完部状況 (東から)



S B15 遺物出土状況 (南から)



S B16 遺物出土状況 (南から)



S B 17・18 遺物出土状況 (北東から)



S T 1 完備状況 (北東から)



ST1P1土層断面(北から)



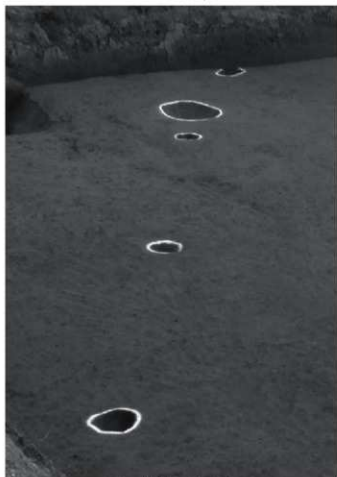
ST1P9・SD5土層断面(北西から)



ST1P18土層断面(南から)



ST1P47土層断面(西から)



ST2完掘状況(北西から)



SK8・BP10遺物出土状況(南から)



BP10土層断面(西から)



BP 28 土層断面 (西から)



S B 8 遺物出土状況 (東から)



S B 19 S K 1 遺物出土状況 (東から)



S B 19 カマド土層断面 (南から)

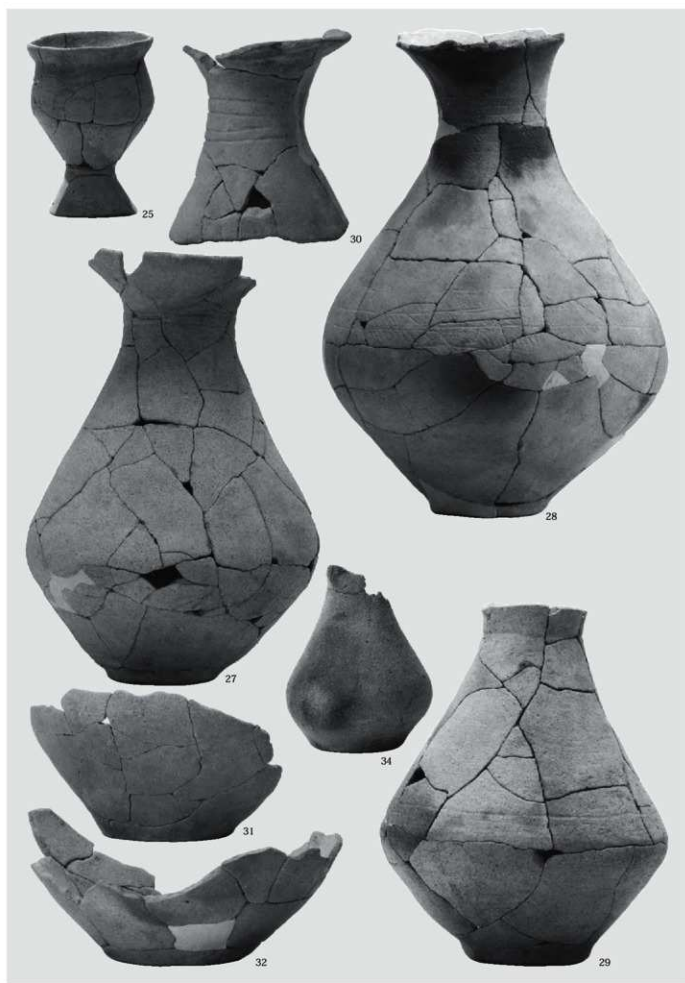


S B 19 完掘状況 (西から)











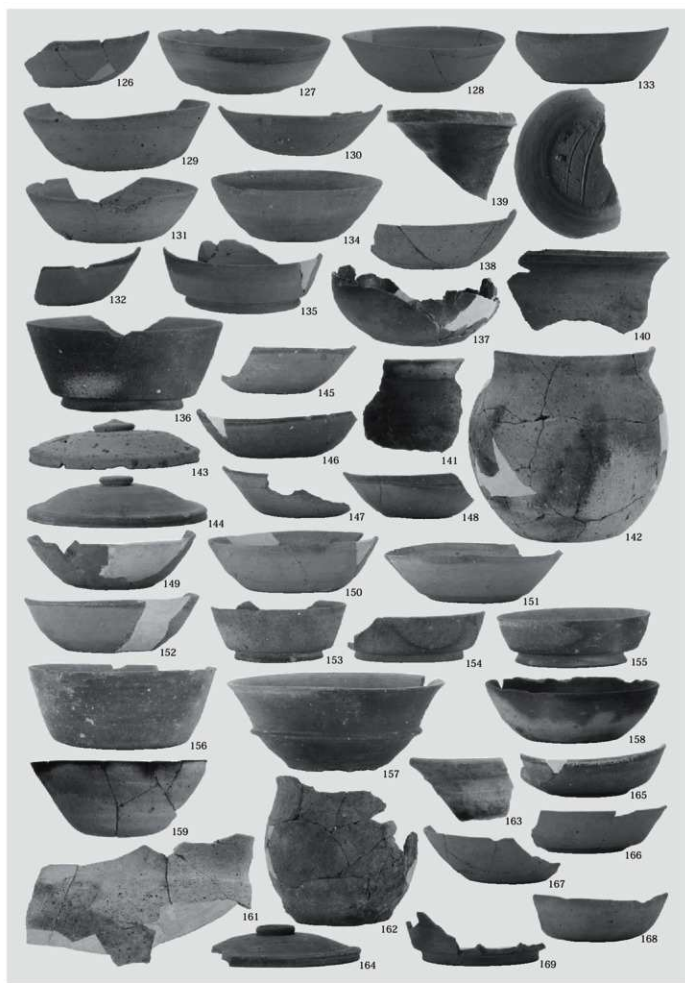








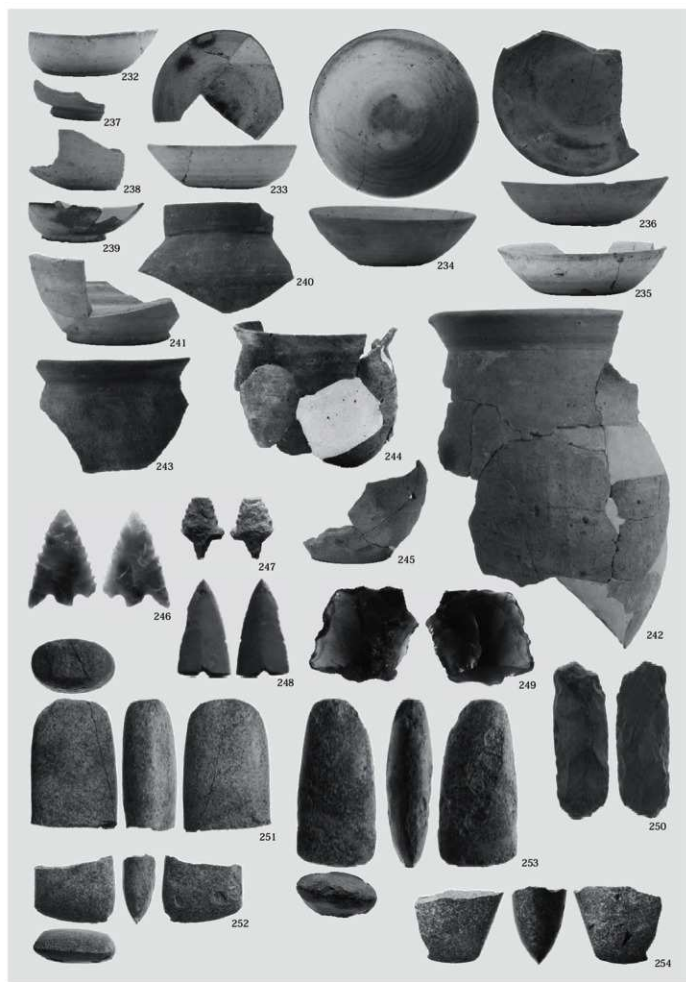


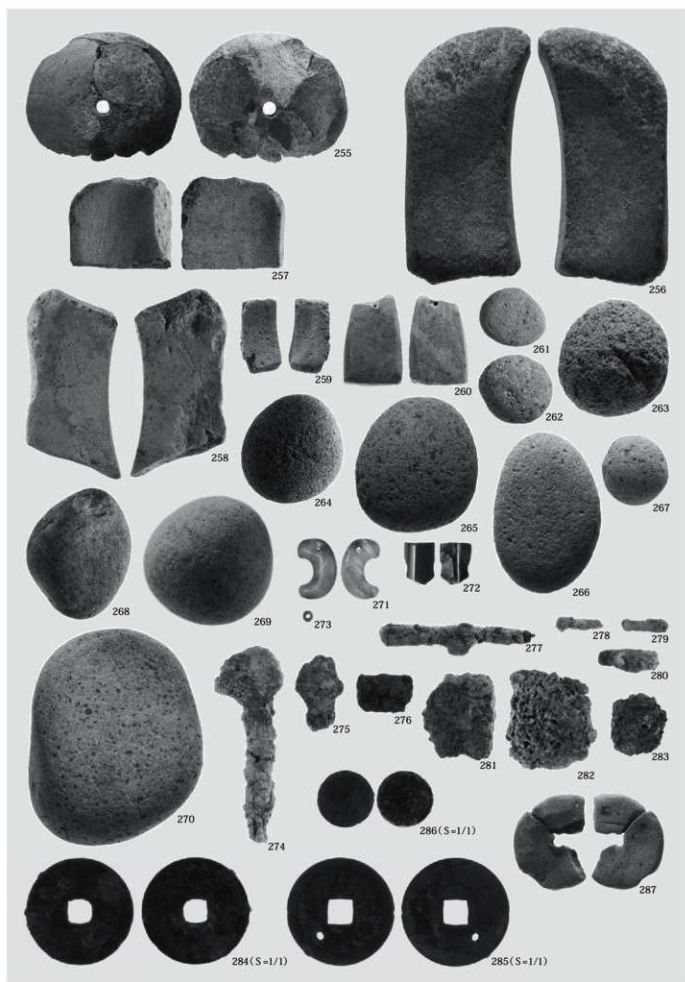












報告書抄録

ふりがな	ながのいせきくんあがたまちいせき (2)
書名	長野遺跡群県町遺跡 (2)
副書名	後町小学校跡地活用整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第151集
編著者名	飯島哲也 田中暁徳 バリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL026-284-0004・FAX026-284-0106
発行年月日	2018 (平成30) 年 3月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
県町遺跡	長野市大字南長野 603番地外	20201	C-005	36°	138°	20150911 ～ 20160120	2,132㎡	後町小学校跡地活用整備事業 (県立大学学生寮建設、後町ホール建設)
	長野市大字南長野 614番地-1			39°	11°	20160905 ～ 20161117		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
県町遺跡	集落	弥生時代中期後半	竪穴住居跡 5軒・溝跡 1条	弥生土器・石鏃・磨製石斧・土製紡錘車・種実・炭化材				
		弥生時代後期	竪穴住居跡 1軒・溝跡 4条					
		古墳時代後期	竪穴住居跡 1軒	土師器・須恵器				
		奈良時代前期～平安時代前期	竪穴住居跡13軒・溝跡 4条・掘立柱建物跡4棟・土坑 2基・小穴10基	土師器・須恵器・墨書土器・刺書土器・砥石・金属製品・鉄滓				
	その他	溝跡 1条・土坑 1基・小穴17基・不明遺構 1基	打製石斧 (縄文時代)・勾玉・管玉・ガラス小玉・寛永通宝・半銭銅貨・近代陶磁器					
要 約								
<p>裾花川河岸段丘上に弥生時代中期最終末の集落とそれを囲郭する大溝が検出され、大形の瓢形竈や、小壺に納められた約3万粒のアワが出土し、住居跡出土遺物は一括性が高く当該期の貴重な資料と評価できる。周辺の弥生時代の遺跡との関係も看取され、従来、点として把握されてきた、裾花川段丘上の弥生時代中期後半の様相が明らかになった。奈良時代末～平安時代初頭の掘立柱建物跡は、県町遺跡長野国際会館地点で検出された掘立柱建物跡と主軸が直交すると判断される。また本地点で「厨」墨書土器や後輪が、県町遺跡既調査地点でも跡脚礎・円面硯・双耳杯が出土していることから、郡家など文書事務を伴う施設が存在する可能性が高まった。</p>								

長野市の埋蔵文化財 第151集

長野遺跡群

県町遺跡（2）

—後町小学校跡地活用整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成30年3月23日 印刷

平成30年3月23日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 大日本法令印刷株式会社